甲府市文化財調査報告 26

甲府市内遺跡 I

— 昭和61年度～平成５年度試掘調査報告書 —

2004

甲府市教育委員会

ページ		誤	正
	目次	2　小瀬氏館跡遺跡	2　小瀬氏館跡
	写真図版	図版1　小瀬氏館跡遺跡出土遺物(1)	図版1　小瀬氏館跡出土遺物(1)
		図版2　小瀬氏館跡遺跡出土遺物・	図版2　小瀬氏館跡・
9		表1　小瀬氏館跡遺跡出土遺物観察表	表1　小瀬氏館跡出土遺物観察表
10		表2　小瀬氏館跡遺跡出土遺物観察表	表2　小瀬氏館跡出土遺物観察表
42	調査の概要	朝気遺跡は、弥生時代から	朝気遺跡は、縄文時代から
		拡幅工事に伴い7次の調査	拡幅工事に伴い8回の調査
	層序	比較的安定しているもの、	比較的安定しているものの、
	遺構・遺物	また高坏はすべて脚部のみが検出	また高坏は高台部と脚部が別々に検出
46	調査の概要	今回この地に老ハ保健施設の	今回この地に老人保健施設の
61	まとめ	かつて存在した微高地は	かつて存在した微高地は
82		図版1　小瀬氏館跡遺跡出土遺物(1)	図版1　小瀬氏館跡出土遺物(1)
83		小瀬氏館跡遺跡出土遺物(2)	小瀬氏館跡出土遺物(2)
		図版2　小瀬氏館跡遺跡	図版2　小瀬氏館跡

序

甲府市内には、今から8,000年以上前の縄文時代早期から、新しくは甲府城に代表される江戸時代の遺跡まで、240箇所以上の遺跡が確認されています。この中には、横根桜井地域に見られるような、積石塚古墳をまとめて数えていますので、それらを個別にすると400箇所以上が確認されていることになります。

遺跡の大半は地下に埋もれているため、「埋蔵文化財」として扱われ、文字資料だけでは知ることのできない先人たちの生活・文化など、甲府の成り立ちと歩みを考える上で、私たちに多くの情報を与えてくれる貴重な財産です。しかし近年の各種開発により、遺跡を含めて周辺の環境は大きな変化を遂げつつあることも事実です。

甲府市では文化財保護の立場から、国及び県の補助金を得て、公共事業を始め市内各地の個人住宅建設等小規模な開発に対して、事前の確認調査や発掘調査を実施してきました。その結果、甲府の歴史をひも解く上で大変貴重な成果を上げることができました。

本書は、昭和61年度から平成５年度までに行われた試掘調査をはじめとする小規模な調査の報告書として、今後の文化財の保護ならびに地域の歴史研究の一助として、市民、学校を始めとし、各種機関にご活用いただければと存じます。

最後になりましたが、調査を実施するにあたりご理解とご協力をいただきました地権者ならびに地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成16年３月

甲府市教育委員会
教育長　角　田　智　重

例　　言

1．本書は、昭和61年度から平成５年度にかけて実施した甲府市内における各種開発行為に伴う試掘調査の報告書である。

2．本書に収録した調査は、文化庁・県教育委員会の指導のもと、甲府市教育委員会が主体となって実施した。調査経費は国・県の補助金の交付を受けた。

3．調査は、信藤祐仁・伊藤正幸・鈴木俊雄（元教育委員会文化財主事）が担当した。

4．本書の執筆は信藤祐仁・伊藤正幸・平塚洋一・鈴木由香（法政大学卒）が、編集は中込　功（文化芸術課長）を編集責任者とし、鈴木由香が行った。

5．本書の挿図は、内藤真千子・鈴木由香・清水秀樹（文化芸術課嘱託）・栗田かず子・望月秀和（現一宮町教育委員会）が作成した。

6．本書に係わる出土遺物及び記録図面・写真等は甲府市教育委員会で保管している。

7．発掘調査にあたり、土地所有者の御協力を賜った。

8．調査参加者

飯窪よし子	池谷富士子	石原久子	一瀬よし子	井上武士	猪股久美子
岩井友子	岩井政代	内田春美	江川富子	遠藤正美	大林慶太
岡　悦子	小倉哲二	笠井由美	数野照子	金井いく代	川合益貴
岸本美苗	窪田　平	倉田勝子	古平道子	小宮通子	三枝和子
三枝尚美	斉藤健一	坂本しのぶ	佐田金子	佐野順子	篠原王子
柴崎栄子	志村ふみ子	白鳥伸和	鈴木茂夫	田井　賢	高野令司
高野　衛	高橋菊子	高橋良行	田村弘幸	塚田俊樹	津金和子
手賀　聡	徳田康江	戸田仁子	中村雅子	中村雅博	名取つる子
西村通喜	原　政幸	早川玲子	松本鈴子	平沢則子	平沢節子
福田妙子	福本みちよ	藤巻享子	堀井岩雄	堀井公雄	堀内貴弘
堀江喜代子	本田正子	松枝邦明	水本勝也	三井健一	望月裕司
望月方夫	森田きぬえ	渡辺百合子	武井美知子		（敬称略）

凡　　例

1．遺構・遺物番号は、各調査地区単位で通し番号とした。

2．遺構名は、各遺構の性格や形状に応じて調査当時、各担当者が名称を付した。今後、新たな調査等により全体の把握がなされた場合、変更が生じる可能性がある。

3．全体図・遺構・遺物実測図の縮尺は、図面上に表示したスケールのとおりである。

4．調査区位置図には、甲府市都市計画図（1／2500）を使用したが、一部調査対象区域が広大なものについてはこれを適宜縮尺して掲載した。

5．遺物観察表中の色調は「標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1997後期）に基づいて記載した。

6．図面のスクリーントーン指示は、個々の図面上または遺物観察表に表示している。

目　　次

序
例　　言
凡　　例
目　　次
調査区位置図
調査区一覧表

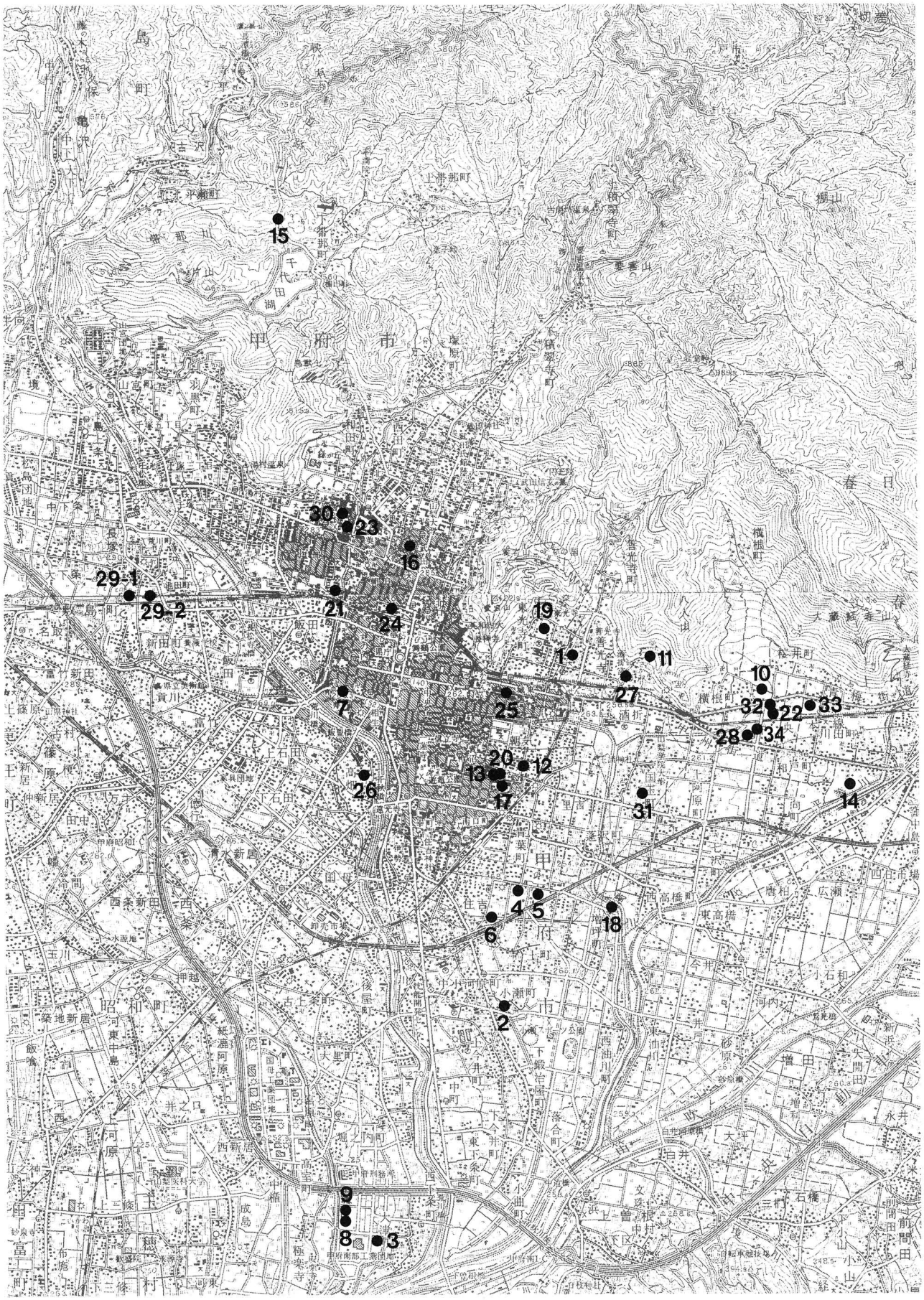
市内遺跡試掘調査

1　宮ノ脇遺跡……1
2　小瀬氏館跡遺跡……4
3　村添遺跡……11
4　二又遺跡……12
5　宮田遺跡……12
6　上ノ木遺跡……12
7　寿・宝区画整理予定地……13
8　技能開発センター予定地……17
9　工業技術センター予定地……17
10　八木沢遺跡……19
11　酒折ワイナリー予定地……21
12　朝気遺跡（VI次調査）……22
13　朝気遺跡……27
14　川田工業団地予定地……30
15　千代田湖ゴルフクラブ予定地……31
16　北東部市民センター予定地……33
17　朝気遺跡（VII次調査）……34
　　朝気遺跡におけるプラント・オパール分析……36
18　外河原ヂクヤ遺跡……38
19　亥の兎遺跡……41
20　朝気遺跡（VIII次調査）……42
21　塩部遺跡……45

22　大坪遺跡……46
23　緑が丘一丁目遺跡……48
24　甲府城関係遺跡……50
25　甲府市立図書館予定地……50
26　高源寺経塚……51
27　酒折縄文遺跡……54
28　大坪遺跡……55
29　豆田遺跡……56
30　緑が丘一丁目遺跡……57
31　深田遺跡……58
32　大坪遺跡……58
33　上土器遺跡……59
34　大坪遺跡……81

写真図版

図版１　小瀬氏館跡遺跡出土遺物(1)……82
図版２　小瀬氏館跡遺跡・宮ノ脇遺跡・工業技術センター予定地・
八木沢遺跡・緑が丘一丁目遺跡出土遺物……83
図版３　寿・宝区画整理予定地出土遺物(1)……84
図版４　寿・宝区画整理予定地・大坪遺跡・緑が丘一丁目遺跡出土遺物……85
図版５　朝気遺跡（Ⅵ次調査）出土遺物……86
図版６　朝気遺跡出土遺物……87
図版７　外河原ヂクヤ遺跡出土遺物……88
図版８　朝気遺跡（Ⅷ次調査）出土遺物……89
図版９　高源寺経塚出土遺物……90
図版10　上土器遺跡出土瓦(1)……91
図版11　上土器遺跡出土瓦(2)……92
図版12　上土器遺跡出土瓦(3)……93
図版13　上土器遺跡出土瓦(4)……94
図版14　上土器遺跡出土遺物……95

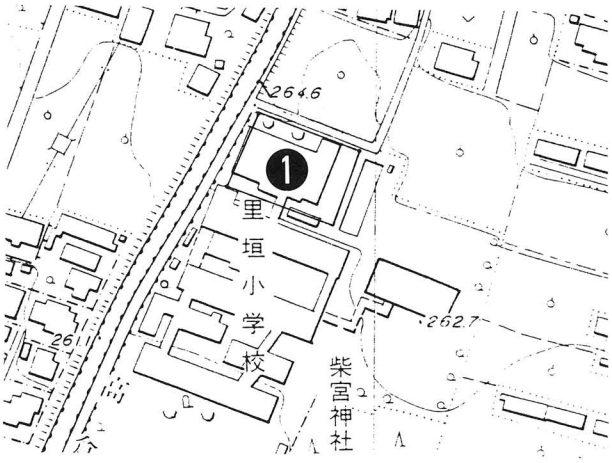


● 番号は調査区一覧表と対応

市内遺跡調査区一覧表

番号	調査年度	遺　跡　名	所　在　地	調　査　原　因	調査面積	調 査 期 間	遺構	遺　　物
1	S．61年度	宮ノ脇遺跡	善光寺二丁目10他	里垣小学校体育館改築	500m²	S.61 6/5～21	集石	壺・鉢・陶器・灯明皿・染付
2		小瀬氏館跡	小瀬町590他	五割川改修工事	1500m²	S.61 6/25～7/10 S.62 3/1～31	土塁・墓	かわらけ・陶器・青磁・銭貨
3	S．62年度	村添遺跡	大津町1437	南部工業団地造成	36m²	S.62 7/1～8	なし	なし
4		二又遺跡	住吉四丁目1563他	住吉区画整理	100m²	S.62 7/23～8/10	なし	なし
5		宮田遺跡	住吉五丁目569-1	住吉区画整理	50m²	S.62 7/23～8/10	なし	なし
6		上ノ木遺跡	住吉五丁目612	住吉区画整理	50m²	S.62 7/23～8/10	なし	なし
7		寿・宝区画整理予定地	寿町宝二丁目	寿・宝地区区画整理	42m²	S.62 7/29～8/28	なし	かわらけ・内耳鍋・擂鉢・瓶
8	S．63年度	技能開発センター予定地	大津町2130-2	技能開発センター建設	8m²	S.63 12/21	なし	なし
9	H．元年度	工業技術センター予定地	大津町2094	工業技術センター建設	22m²	H.元 5/10～12	なし	かわらけ・蓋・染付・凹石
10		八木沢遺跡	横根町東畑地内	英和大学建設	148m²	H.元 11/20～30	なし	かわらけ・壺・甕・陶器
11		酒折ワイナリー予定地	酒折町1338-60他	ワイナリー建設	10m²	H.元 4/24～26	なし	なし
12	H．2年度	朝気遺跡（VI次調査）	朝気一丁目	市道拡幅	180m²	H．2 11/19～12/6	住居・溝	壺・甕・坏・高坏・甑・染付
13		朝気遺跡	朝気三丁目6	小林アパート建設	100m²	H．2 11/26～12/6	土坑	甕・竈・坏
14		川田工業団地予定地	川田町664他	ファッション工業団地建設	80m²	H．3 2/12～26	なし	なし
15		千代田湖ゴルフ場予定地	平瀬・下帯那地内	千代田湖ゴルフ場建設	200m²	H．3 3/10～28	なし	なし
16		北東公民館予定地	武田三丁目22他	北東公民館建設	15m²	H．3 3/29～30	なし	なし
17	H．3年度	朝気遺跡（VII次調査）	朝気三丁目156	市道拡幅	625m²	H．3 11/16～12/19	畦畔	甕・鉢・坏
18		外河原ヂクヤ遺跡	増坪町710－3	最終処分場建設	53m²	H．4 2/5～3/20	なし	壺・坏・墨書土器
19	H．4年度	亥の兎遺跡	東光寺三丁目3	宅地造成	54m²	H．4 6/5～22	なし	なし
20		朝気遺跡（VIII次調査）	朝気三丁目4-16	店舗建設	23m²	H．4 7/29～8/28	なし	壺・S字甕・高坏・陶器
21		塩部遺跡	塩部一丁目431他	朝日幼稚園改築	60m²	H．4 9/7～9	なし	なし
22		大坪遺跡	横根町554	かわせみ苑建設	232m²	H．4 9/16～10/14	なし	なし
23		緑が丘一丁目遺跡	緑が丘一丁目112-2他	東京電力寮建設	63.5m²	H．4 12/10～14	なし	土器・石製品
24		甲府城関係遺跡	丸の内一丁目1	新都市拠点整備	1447m²	H．5 1/20～3/27	なし	なし
25	H．5年度	市立図書館予定地	城東一丁目12	市立図書館建設	60m²	H．5 4/12～13	なし	なし
26		高源寺経塚	高畑一丁目20-22	境内整備	4m²	H．5 4/27～5/13	経塚	一石経・かわらけ・陶器・染付
27		酒折縄文遺跡	酒折三丁目3680	アパート建設	12m²	H．5 9/28	なし	なし
28		大坪遺跡	横根町反田451-3･4他	アパート建設	11m²	H．5 11/11	なし	壺
29-1		豆田遺跡	池田三丁目271-1他	宅地造成	12m²	H．5 12/8～9	なし	陶器
29-2		豆田遺跡	池田三丁目199-1他	集合住宅建設	4.5m²	H．6 1/17	なし	なし
30		緑が丘一丁目遺跡	緑が丘一丁目149、150-1	住宅新築工事	13.5m²	H．5 12/13～21	なし	甕
31		深田遺跡	国玉町深田590-1	住宅新築工事	14.5m²	H．5 12/22・24	なし	なし
32		大坪遺跡	桜井町深田606、610他	市道改良工事	15m²	H．6 2/23	なし	なし
33		上土器遺跡	横根町上土器272～282	宅地造成	168m²	H．6 3/7～4/4	瓦窯・溝	甕・坏・高坏・陶器・瓦
34		大坪遺跡	横根町反田465-2	ガソリンスタンド建設	132m²	H．6 3/22.23	なし	なし

宮ノ脇遺跡



調査位置　甲府市善光寺二丁目10番地他
調査原因者　甲府市
調査原因　里垣小学校体育館改築工事
調査面積　500㎡
調査期間　昭和61年6月5日～6月21日
調査担当者　伊藤正幸

調査の概要

広義の高倉川扇状地扇端部に立地する本遺跡は、高倉川左岸に位置し標高265ｍ程を測る。高倉川扇状地上には多くの遺跡が知られており、扇状地北部では「北原古墳群」と呼ばれるように古墳も数多く分布している。

宮ノ脇遺跡は縄文時代及び平安時代以降の遺物の散布地として周知されているが、今回この地に里垣小学校体育館の建設が計画されたため発掘調査を実施した。調査は体育館建設予定地全面を対象とし、面的に調査を行なった。

遺　　構

現地表から、－50㎝の位置で集石遺構１基が確認された。自然石が不規則に集中しており、近世以降の土器及び陶磁器の破片が伴出した。集石下部に掘り込み等は認められず、性格は不明である。

遺　　物

いずれも破片であるが、土器及び陶磁器が出土した。

土器は埦及び鉢で、いずれも近世後半の所産と考えられる。

陶磁器は皿、碗及び甕が確認できる。やはり近世の所産であろうが、13の陶器の皿は底部にトチン跡が認められ、時期的にも大窯１か２に比定される。

ま　と　め

本遺跡が位置する里垣地区にはこれまでに善光寺北遺跡、北原遺跡、本郷遺跡等が調査され、縄文時代から中世までの遺跡の存在が確認されている。今回の宮ノ脇遺跡では高倉川の氾濫あるいは葡萄の耕作により攪乱を受けた可能性が高く、多くを言及するには至らなかった。

（伊藤正幸）

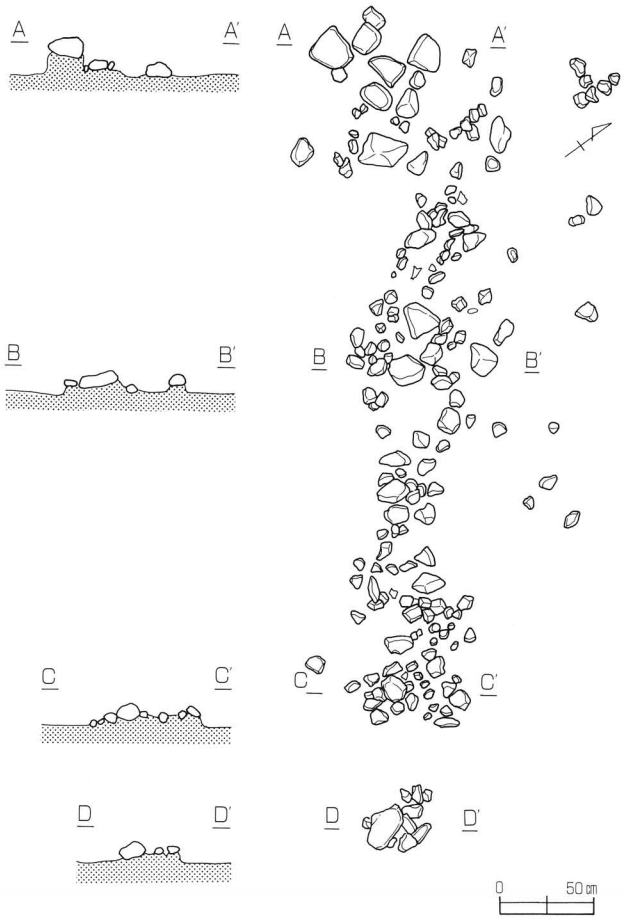


図１　集石微細図

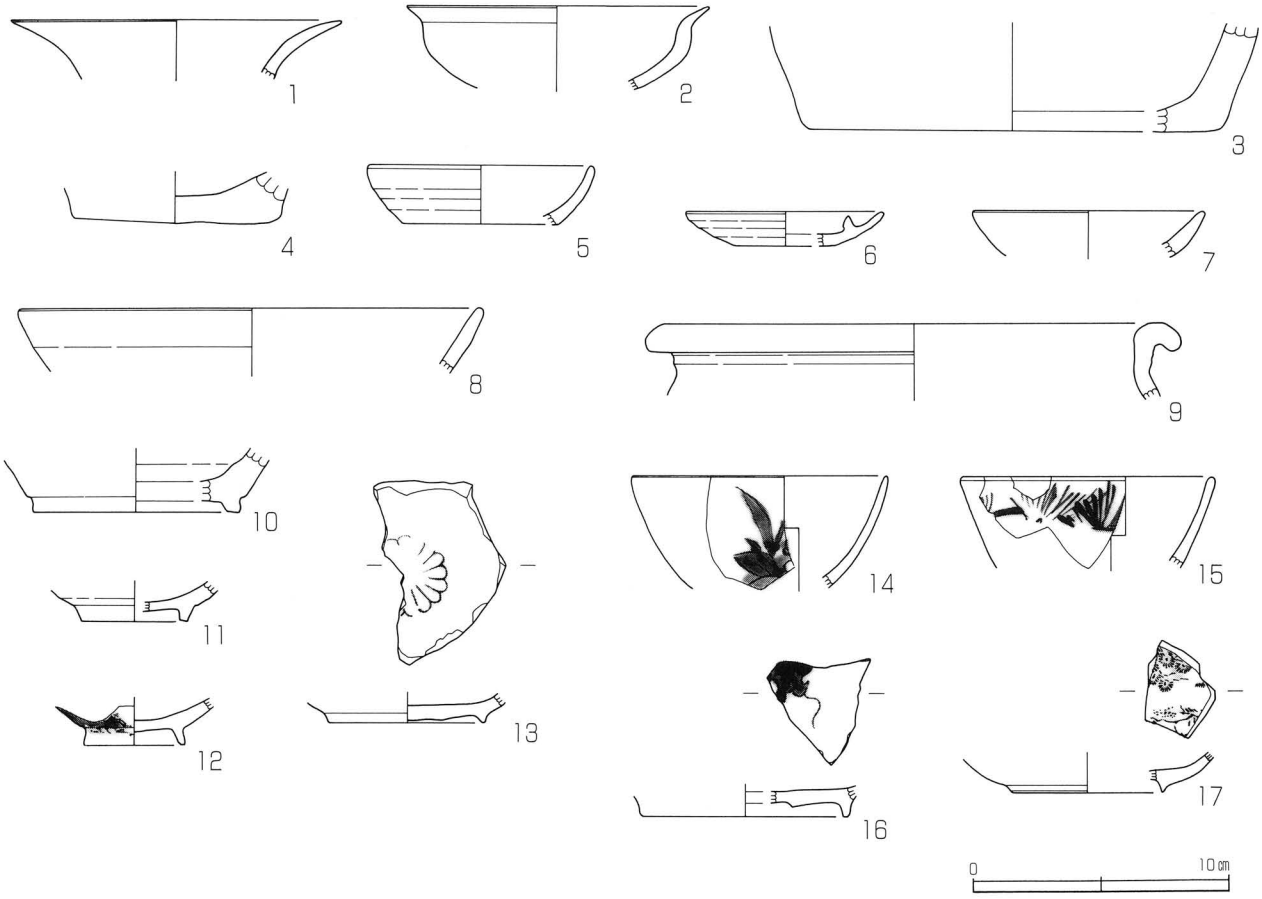


図2　出　土　遺　物

表1　宮ノ脇遺跡出土遺物観察表

( )復元値、単位(cm)

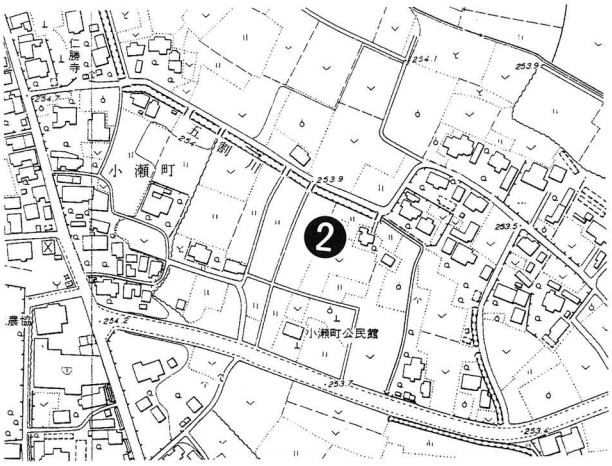
番号	種別 産地	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	土器	壺	(12.9)・－・－	口縁部	ナデ	長石・金雲母・赤色粒子	良	橙 5YR 6/8	
2	土器	椀	(12.0)・－・－	口縁部～体部	ナデ	長石・石英・金雲母	良	浅黄橙 10YR 8/3	
3	土器	鉢	－・－・(16.0)	底部	ナデ	雲母・金雲母	良	内)黄灰 2.5YR 6/1 外)にぶい黄褐 10YR 5/3	
4	土器	不明	－・－・(8.0)	底部	ナデ	金雲母	良	内)橙 5YR 6/6 外)にぶい黄橙 10YR 7/3	
5	陶器	碗	(9.0)・(2.3)・(6.2)	口縁部～底部	施釉	密	良	－	
6	陶器	灯明皿	(7.6)・(1.35)・(4.0)	口縁部～底部	施釉	密	良	－	
7	陶器	皿	(9.0)・－・－	口縁部～体部	施釉	密	良	－	
8	陶器	皿	(18.0)・－・－	口縁部	施釉	密	良	－	
9	陶器	甕	(19.6)・－・－	口縁部	施釉	密	良	－	
10	陶器	碗か	－・－・(8.0)	底部	外面施釉	密	良	－	
11	陶器	碗	－・－・(4.2)	底部	内面施釉	密	良	－	見込部・高台畳付にトチン痕
12	磁器	碗	－・－・(4.0)	底部	－	緻密	良好	－	
13	陶器	皿	－・(1.2)・(6.2)	底部	緑釉 見込部に菊印	密	良	－	大窯1か2 底部にトチン痕
14	磁器	碗	(9.9)・－・－	口縁部～底部	－	緻密	良好	－	
15	磁器	碗	(10.0)・－・－	口縁部～体部	－	緻密	良好	－	
16	磁器	皿	－・－・(8.0)	底部	－	緻密	良好	－	
17	磁器	皿	－・－・(6.0)	底部	畳付無釉	緻密	良好	－	

写真1　調査区近景

写真2　集石遺構

写真3　調査風景

小瀬氏館跡



調査位置　甲府市小瀬町590番地他
調査原因者　甲府市
調査原因　五割川河川改修工事
調査面積　1,500㎡
調査期間　（第１次調査）
　昭和61年６月25日～７月10日
（第２次調査）
　昭和62年３月１日～３月31日
調査担当者　伊藤正幸

調査の概要

濁川の沖積原上、標高255ｍ程の平坦地に位置する。本来諏訪神社の社地であったが、鎌倉時代の初めに諏訪神社を下鍛冶屋町の鈴の宮に合祀し石和五郎信光が居館を造営したという。鎌倉時代以降、小笠原長清、右馬助信長、小瀬宮内大輔信堅らが居を構えたと伝えられ、江戸時代には玉田寺の寺域となった。玉田寺は大正時代まで存続したが、その後民有地となり現在にいたる。

昭和61年度に五割川の河川改修工事が計画され同計画が館跡推定地内を縦断するものであったため、甲府市教育委員会で発掘調査を実施した。

調査成果

層序　調査では、砂若しくは砂利が厚く堆積しており、度重なる五割川の氾濫を髣髴させた。以下に基本土層を示す。

第Ⅰ層　茶褐色土層　耕作土層（30cm）
第Ⅱ層　褐色土層　黄茶褐色砂粒子を多量に含む。（40cm）
第Ⅲ層　黄茶褐色砂利層

第Ⅲ層上部には、灰白色細粒砂層が５cmほど確認できる部分も認められた。遺構及び遺物の確認面は第Ⅱ層中である。

遺　　構

当初現地に残されている南北に細長い微高地を土塁と想定した。遺物の分布がこの微高地を境に大きく差があるためだが、土の堆積状況に特徴や変化を認めることはできず、確証を得るには至っていない。

遺構としては土坑２基と10個の柱穴（ピット）が確認できたに止まった。

土坑は直径80cm、深さ10cm前後でやや浅い。また柱穴は直径15～30cm、深さ10～20cm程度である。いずれの遺構中からも遺物は確認できなかった。

遺　　物

同一面から、古墳時代後期の土器の小破片及び、平安時代から近世に至る土器・陶磁器・古銭などが確認された。このうち図示できたものは70点である。量的には中世後半から近世に位置付けられる土師質土器及び、同時期の陶磁器が８割を占めている。

土師質土器

31点が図示できた。かわらけは肉薄のロクロ成形により、底部には糸切痕が確認できるが、一部のものには成形後手持ちヘラ削りの痕跡が認められるものもある。皿は厚手のものが多く、胎土も粗い。

一部の土器（No.１・３・４・28）には、その器形的特徴から13世紀中葉から後半に位置付け可能な北陸系の土師質土器も認められた。

陶器及び陶質土器

碗、甕、壺、擂鉢、灯明皿、水鉢等が出土した。これらのうちNo.56は四耳壺を、またNo.57は鉢を、それぞれ骨壺として転用していた。

磁器

鎬蓮弁の文様を持つ青磁碗の体部と思われる破片が検出している。この内、No.53番のものは中国龍泉窯系の青磁である。

その他の遺物

銅製品として、煙管１点、古銭８点、石製品として凹石１点が検出された。

ま　と　め

小瀬氏館跡は鎌倉時代の館跡として位置付けられている。現地に認められる若干の微高地が土塁を、また屈曲した五割川の流路が堀を示しているとされる。今回の発掘調査では館跡を裏付ける遺構は確認できなかったが、出土遺物からその可能性についてある程度推測することは可能であろう。

現在の小瀬町及びその周辺には、中世の伝承及び史跡が多く、小瀬団地の中にある富士塚は小笠原長清により誅殺された源有雅を弔った塚といわれる。また天津司の舞が小瀬町の天津司神社から下鍛冶屋町の諏訪神社へ御幸するのは、本来諏訪神社の社地であった所へ石和五郎信光が居館を移したために諏訪神社が遷宮したと伝えられている。

小瀬氏館跡と伝えられる小瀬氏が登場するのは室町時代になってからで、宝徳年中に武田安芸守巨勢宮内大輔信堅の居館となったことによる。その後、武田民部小輔信乗が暮らすが、後に玉田寺の境内となり現在では畑となった。玉田寺の名残は、数基の石造物と墓石を残すのみである。

（伊藤正幸）

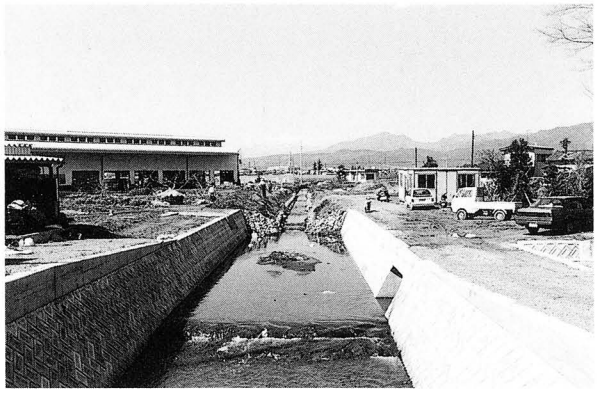


写真１　調査区遠景

写真２　調 査 風 景

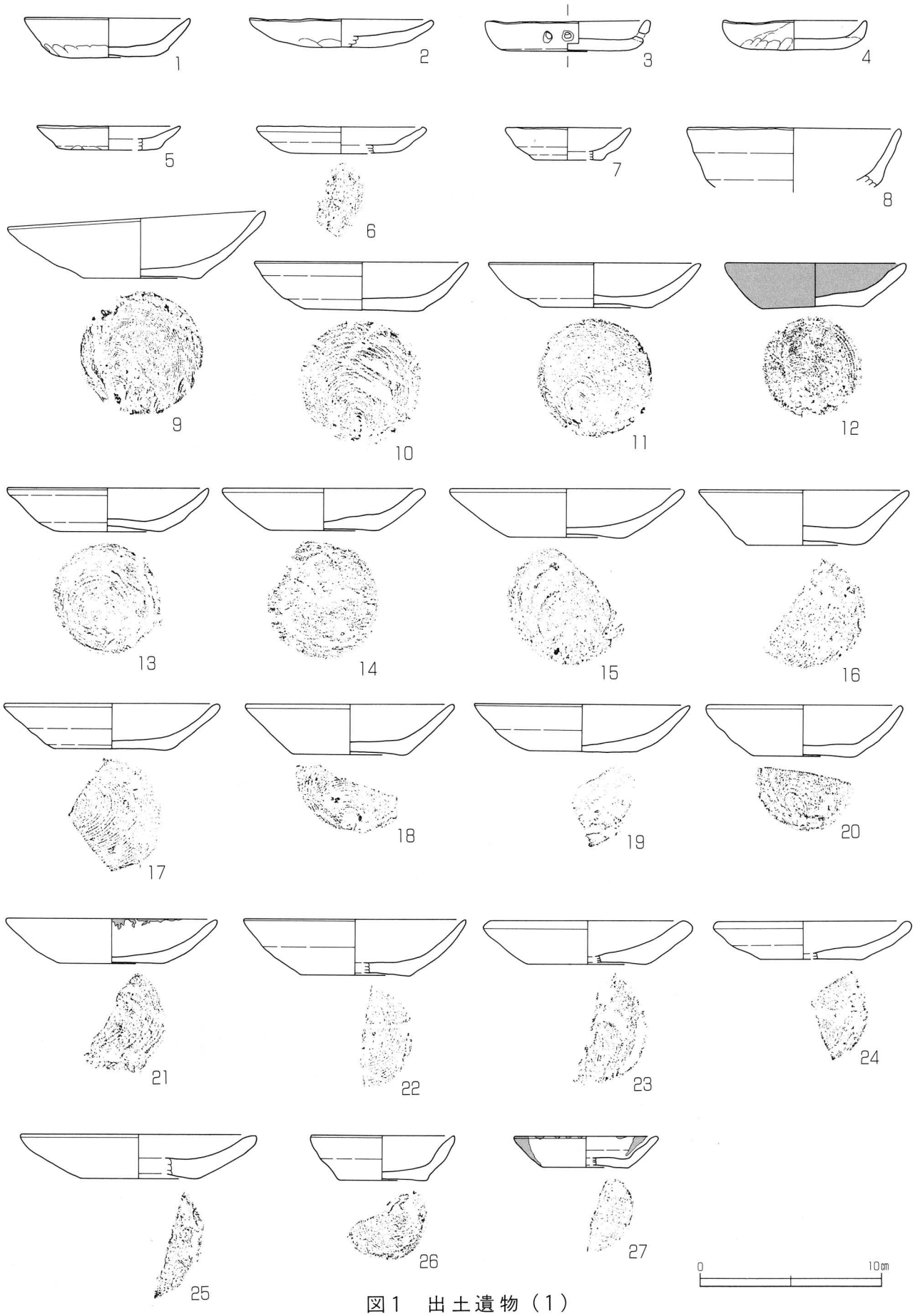

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
0
10cm

図1　出土遺物（1）

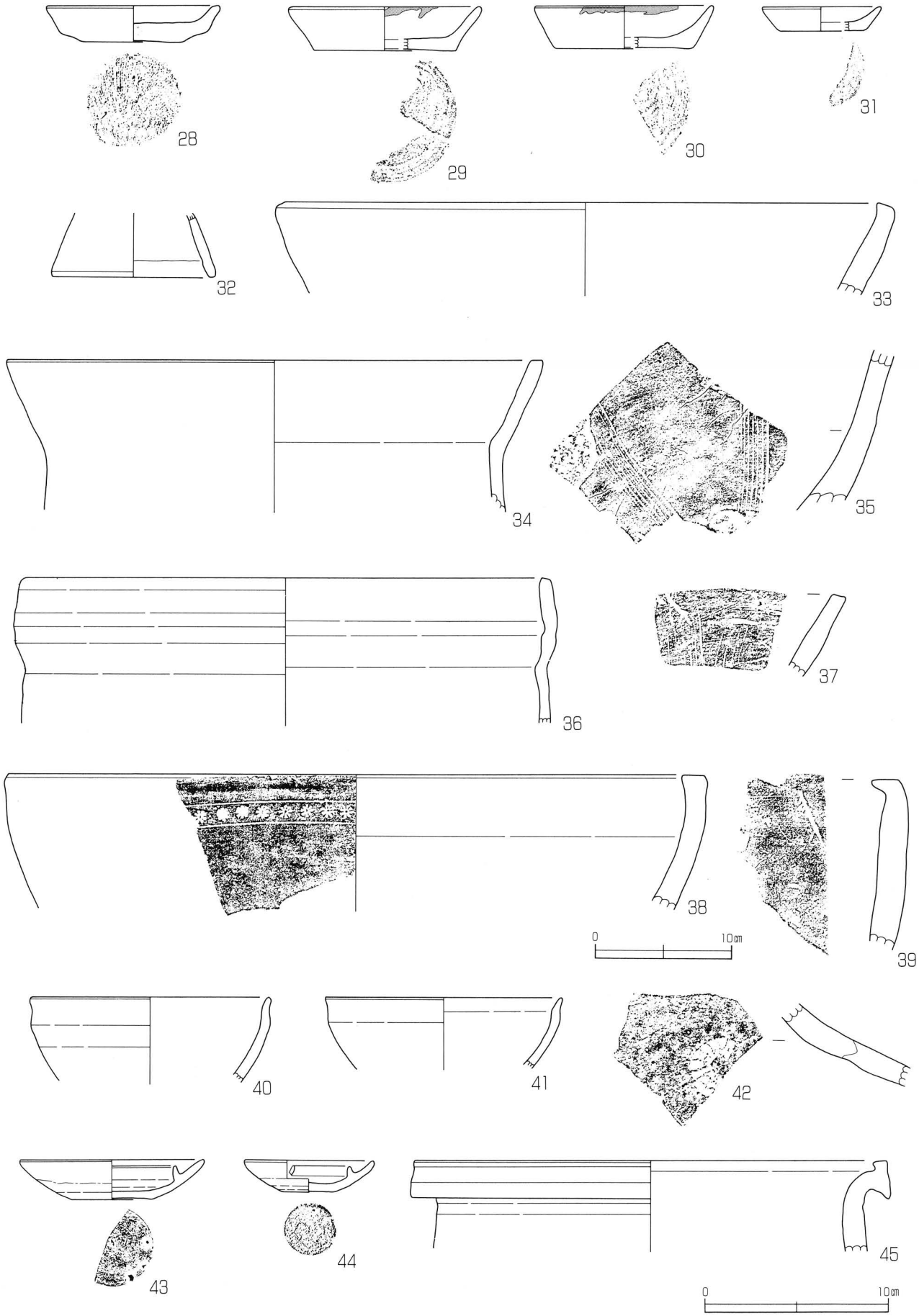


図2　出土遺物（2）

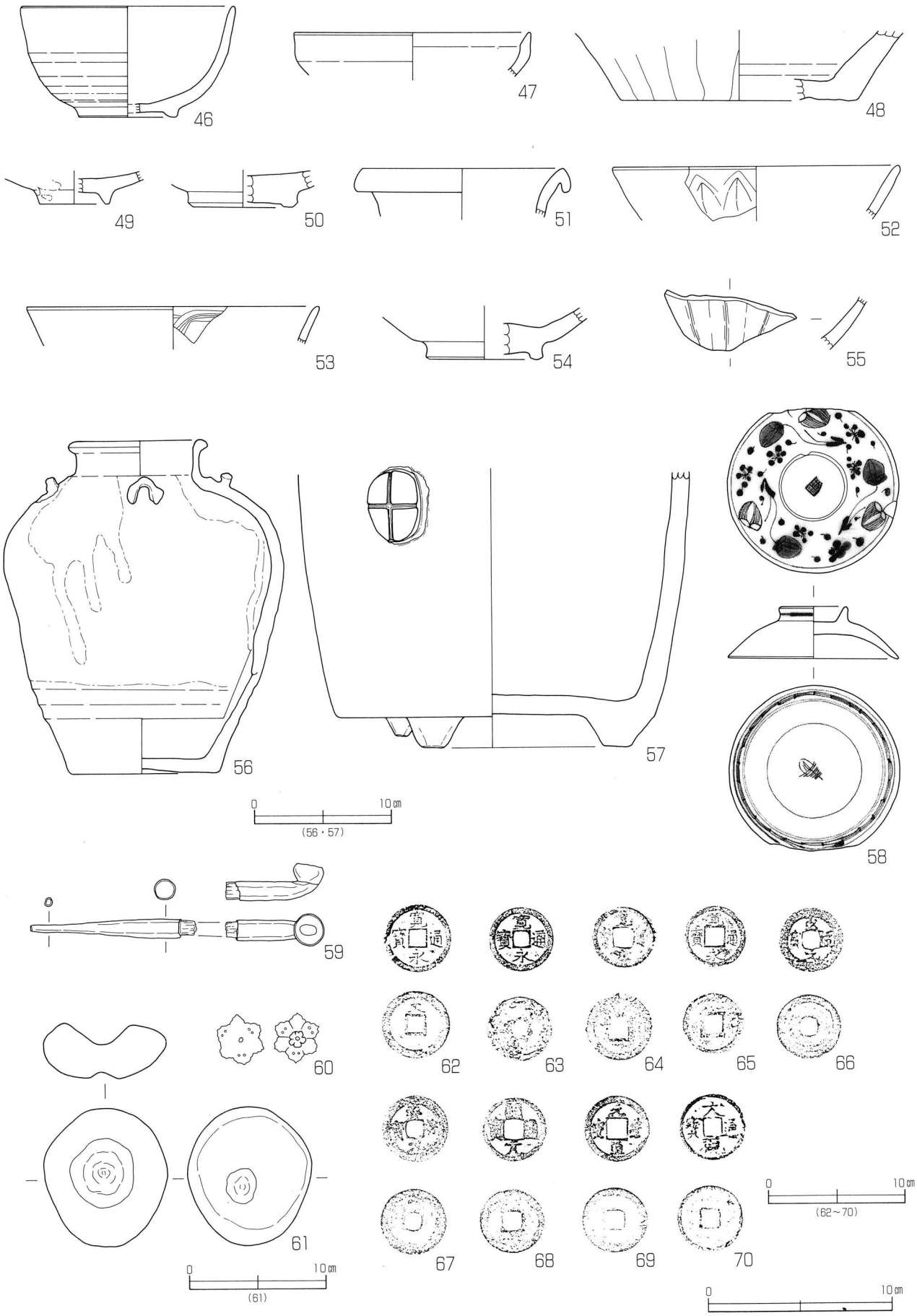

46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
0
10cm
(56・57)
59
60
61
0
10cm
(61)
62
63
64
65
66
67
68
69
70
0
10cm
(62～70)
0
10cm

図3　出土遺物（3）

表１　小瀬氏館跡遺跡出土遺物観察表

（　）復元値、単位(cm)

番号	種別 産地	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	土器	かわらけ	(9.2)・(2.2)・ －	口縁部～底部	手づくね	金雲母・長石・赤色粒子	良	にぶい橙 7.5YR 7/4	
2	土器	かわらけ	(10.2)・(1.6)・(5.0)	口縁部～底部	手づくね	金雲母	良	褐灰 10YR 4/1	
3	土器	かわらけ	(9.2)・(1.7)・(7.4)	口縁部～底部	手づくね 2箇所穿孔	金雲母・長石・石英・赤色粒子	良	橙 7.5YR 7/6	
4	土器	かわらけ	(8.0)・(1.6)・(6.0)	口縁部～底部	手づくね	金雲母・長石・石英・赤色粒子	良	橙 5YR 6/6	
5	土器	かわらけ	(8.0)・(1.3)・(5.8)	口縁部～底部	手づくね	金雲母・長石	良	橙 7.5YR 7/6	
6	土器	かわらけ	(9.4)・(1.9)・(6.6)	口縁部～底部	手づくね	金雲母・長石	良	橙 5YR 6/6	
7	土器	かわらけ	(7.0)・(1.8)・(4.6)	口縁部～底部	手づくね	金雲母・長石	良	橙 5YR 6/6	
8	土器	かわらけ	(12.0)・ －・ －	口縁部～体部	手づくね	金雲母・赤色粒子	良	にぶい橙 7.5YR 7/4	
9	土器	かわらけ	14.3・ 3.2・ 6.6	口縁部～底部	ロクロ 底部回転糸切り	金雲母・長石・石英	良	橙 5YR 6/6	
10	土器	かわらけ	11.9・ 2.6・ 6.4	ほぼ完形	ロクロ 底部回転糸切り	金雲母・長石・赤色粒子	良	橙 7.5YR 7/6	
11	土器	かわらけ	11.9・ 2.5・ 6.4	ほぼ完形	ロクロ 底部回転糸切り	金雲母・長石・赤色粒子	良	橙 7.5YR 7/6	
12	土器	かわらけ	(10.0)・(2.4)・ 5.4	ほぼ完形	ロクロ 底部回転糸切り	金雲母・長石	良	黒 7.5YR 2/1	熱による黒変
13	土器	かわらけ	11.2・ 2.4・ 6.0	ほぼ完形	ロクロ 底部回転糸切り	金雲母・長石・赤色粒子	良	橙 7.5YR 7/6	
14	土器	かわらけ	(11.2)・(2.3)・(6.0)	口縁部～底部	ロクロ 底部回転糸切り	金雲母・長石・石英	良	にぶい黄橙 10YR 7/4	
15	土器	かわらけ	(13.1)・(2.7)・(6.6)	口縁部～底部	ロクロ 底部回転糸切り	金雲母・長石・石英	良	橙 7.5YR 6/6	
16	土器	かわらけ	(11.6)・(3.0)・ 6.3	口縁部～底部	ロクロ 底部回転糸切り	金雲母・長石・石英	良	橙 5YR 6/6	
17	土器	かわらけ	(12.0)・(2.5)・(6.4)	口縁部～底部	ロクロ 底部回転糸切り	金雲母・長石・石英・赤色粒子	良	橙 5YR 7/6	
18	土器	かわらけ	(11.6)・(2.8)・(6.4)	口縁部～底部	ロクロ 底部回転糸切り	金雲母・長石・石英・赤色粒子	良	橙 5YR 6/6	
19	土器	かわらけ	(12.0)・(2.6)・(6.0)	口縁部～底部	ロクロ 底部回転糸切り	金雲母・長石・石英・赤色粒子	良	橙 5YR 6/6	
20	土器	かわらけ	(10.8)・(5.6)・(5.6)	口縁部～底部	ロクロ 底部回転糸切り	金雲母・長石・石英	良	橙 5YR 6/6	
21	土器	かわらけ	(11.8)・(2.5)・(6.0)	口縁部～底部	ロクロ 底部回転糸切り	金雲母・長石・石英	良	橙 5YR 6/6	口縁部にスス付着
22	土器	かわらけ	(12.4)・(3.1)・(6.0)	口縁部～底部	ロクロ 底部回転糸切り	金雲母・長石・赤色粒子	良	にぶい橙 7.5YR 6/4	
23	土器	かわらけ	(11.6)・(2.4)・(6.8)	口縁部～底部	ロクロ 底部回転糸切り	金雲母・長石・石英	良	橙 5YR 6/6	
24	土器	かわらけ	(11.0)・(2.1)・(5.6)	口縁部～底部	ロクロ 底部回転糸切り	金雲母・長石・赤色粒子	良	橙 5YR 6/6	
25	土器	かわらけ	(13.2)・(2.4)・(6.6)	口縁部～底部	ロクロ 底部回転糸切り	金雲母・長石・石英・赤色粒子	良	にぶい橙 7.5YR 6/4	
26	土器	かわらけ	(8.0)・(2.5)・(5.0)	口縁部～底部	ロクロ 底部回転糸切り	金雲母・長石・赤色粒子	良	にぶい橙 5YR 6/4	
27	土器	かわらけ	(8.0)・(1.7)・(4.8)	口縁部～底部	ロクロ 底部回転糸切り	金雲母・長石・赤色粒子	良	橙 5YR 7/6	口縁部にスス付着
28	土器	かわらけ	9.5・ 2.5・ 5.6	完形	ロクロ 底部回転糸切り	金雲母・長石・石英・赤色粒子	良	橙 7.5YR 6/6	
29	土器	かわらけ	(10.6)・ －・(7.9)	口縁部～底部	ロクロ 底部回転糸切り	金雲母・長石・石英	良	にぶい赤褐 5YR 5/4	口縁部にスス付着
30	土器	かわらけ	(9.8)・(2.3)・(7.5)	口縁部～底部	ロクロ 底部回転糸切り	金雲母・長石	良	にぶい橙 5YR 6/4	口縁部にスス付着
31	土器	かわらけ	(6.5)・(1.3)・(4.6)	口縁部～底部	ロクロ 底部回転糸切り	金雲母	良	橙 5YR 6/6	
32	土器	台付甕	－・－・(8.8)	脚部	ナデ	金雲母・雲母・長石・石英	良	にぶい橙 7.5YR 6/4	
33	土器	擂鉢	(32.6)・ －・ －	口縁部	ロクロ	金雲母・雲母・長石	良	内)褐灰 10YR 6/1 外)灰色 10YR 8/2	
34	土器	鉢	(29.4)・ －・ －	口縁部～頸部	ロクロ	金雲母・雲母・長石・石英	良	内)褐灰 10YR 6/3 外)にぶい黄橙 10YR 6/3	
35	土器	擂鉢	－・－・ －	体部	ロクロ	金雲母・長石	良	黄灰 2.5Y 6/1	

表２　小瀬氏館跡遺跡出土遺物観察表

（　）復元値、単位(cm)

番号	種別 産地	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
36	土器	鉢	(28.5)・－・－	口縁部～体部	ロクロ	雲母・長石・石英	良	内)にぶい黄橙 10YR 7/3 外)灰黄褐 10YR 4/2	
37	土器	擂鉢	－・－・－	口縁部	ロクロ	石英	良	にぶい橙 7.5YR 7/4	
38	土器	火鉢	－・－・－	口縁部～体部	ロクロ 外面に花文	金雲母・長石・雲母	良	内)灰白 2.5Y 7/1 外)黄灰 2.5Y 6/1	
39	土器	火鉢	－・－・－	口縁部～体部	ロクロ	密	良	灰白 2.5Y 7/1	
40	陶器	天目茶碗	(13.0)・－・－	口縁部～体部	鉄釉	密	良	－	
41	陶器	天目茶碗	(13.0)・－・－	口縁部～体部	鉄釉	密	良	－	
42	陶器	常滑甕	－・－・－	肩部	施釉	密	良	－	
43	陶器	灯明皿	(10.0)・(2.2)・(4.4)	口縁部～底部	上部のみ施釉	密	良	－	
44	陶器	灯明皿	(7.0)・(1.75)・(2.8)	口縁部～底部	施釉	密	良	－	
45	陶器	常滑甕	(26.0)・－・－	口縁部	施釉	密	良	－	
46	陶器	碗	11.65・(6.1)・(5.2)	口縁部～底部	緑釉	密	良	－	
47	陶器	天目茶碗	(13.0)・－・－	口縁部	鉄釉	密	良	－	
48	陶器	甕か鉢	－・－・(13.0)	底部	施釉	密	良	－	
49	陶器	碗	－・－・(3.9)	底部	施釉	密	良	－	
50	陶器	碗	－・－・(5.4)	底部	施釉	密	良	－	
51	磁器	甕	(11.0)・－・－	口縁部	緑釉	緻密	良	－	
52	青磁	碗	(15.8)・－・－	口縁部	－	緻密	良好	－	
53	龍泉窯系 青磁	碗	(16.0)・－・－	口縁部	内面に沈線による区画	緻密	良好	－	
54	青磁	碗	－・－・(6.0)	底部	施釉	緻密	良好	－	
55	青磁	碗	－・－・－	体部	－	緻密	良好	－	
56	陶器	四耳壺	9.3・24.3・10.8	口縁部～底部	施釉	密	良	－	骨壺に転用 17世紀代伊賀焼
57	土器	鉢	－・－・23.2	胴部～底部	ロクロ	長石・石英・金雲母	良	橙 7.5YR 6/6	骨壺に転用 十字文が貼付
58	磁器	蓋	9.2・2.85・3.7	ほぼ完形	染付	緻密	良好	－	
59	銅製品	キセル	雁首部 9.1 吸口部 5.4 最大幅 1.1・厚さ 1.1	雁首部 吸口部	－	－	－	－	
60	銅製品	不明	縦 2.7・横 2.6・厚さ 0.1	－	－	－	－	－	
61	石製品	凹石	縦 10.1・横 9.1・厚さ 3.8	－	－	－	－	－	
62	銭貨	寛永通宝	直径 2.55・穿径 0.57・重量 3.1	－	－	－	－	－	
63	銭貨	寛永通宝	直径 2.44・穿径 0.52・重量 3.5	－	－	－	－	－	
64	銭貨	寛永通宝	直径 2.32・穿径 0.63・重量 2.8	－	－	－	－	－	
65	銭貨	寛永通宝	直径 2.3・穿径 0.64・重量 2	－	－	－	－	－	
66	銭貨	至道元宝	直径 2.43・穿径 0.62・重量 2.6	－	－	－	－	－	67・68と重なり出土
67	銭貨	祥符元宝	直径 2.89・穿径 0.59・重量 3.7	－	－	－	－	－	
68	銭貨	開元通宝	直径 2.43・穿径 0.66・重量 3.3	－	－	－	－	－	
69	銭貨	元豊通宝	直径 2.44・穿径 0.66・重量 2.5	－	－	－	－	－	
70	銭貨	大観通宝	直径 2.46・穿径 0.59・重量 2.5	－	－	－	－	－	

村添遺跡

調 査 位 置　甲府市大津町字村添1437番地
調査原因者　甲府市
調 査 原 因　甲府南部工業団地造成工事
調 査 面 積　36㎡
調 査 期 間　昭和62年７月１日～７月８日
調査担当者　伊藤正幸

調査の概要

鎌田川と荒川の合流点北側に位置する本遺跡は、標高250ｍ程の平坦地上に位置する。地域的に遺跡の分布は極めて散漫であり、笛吹川に架かる中央高速の橋脚工事の際に、深さ５ｍ以上の場所から、古墳時代の土器の出土例があるが、同地域に下水道の本管を埋設する際に、幅４ｍ、深さ９ｍ余を掘り下げたが、遺物等は何ら検出されなかったという。

今回の確認調査は甲府市南部工業団地造成工事に先だち、開発地域東側に接する村添遺跡の範囲確認及び、造成地内における新たな遺跡の確認調査を目的として試掘調査を実施した。造成工事予定地は26.8haにおよび、村添遺跡に隣接して位置するため、確認調査は、基本的にはグリッド調査（１ｍ×１ｍ乃至1.5ｍ）としたが、一部においては１ｍ×30ｍのトレンチ調査を実施した。

ま　と　め

調査の結果遺構はなく、土層観察でも自然堆積のみで、人工的な作為は認められなかった。遺物も1002-2番地において、常滑陶器の小破片が検出されたが、流川の流路拡幅の際に土を盛った位置にあたり、流れ込みによるものと考えてよかろう。　（伊藤正幸）

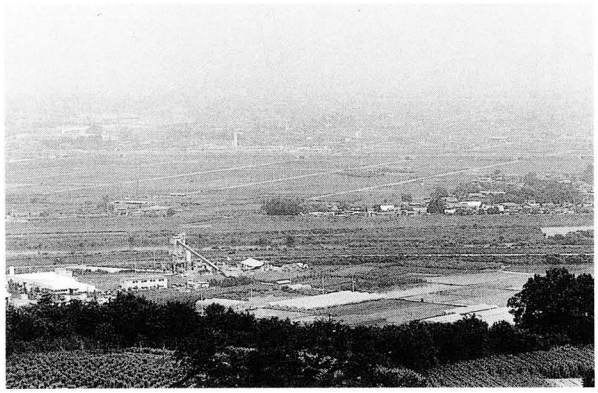


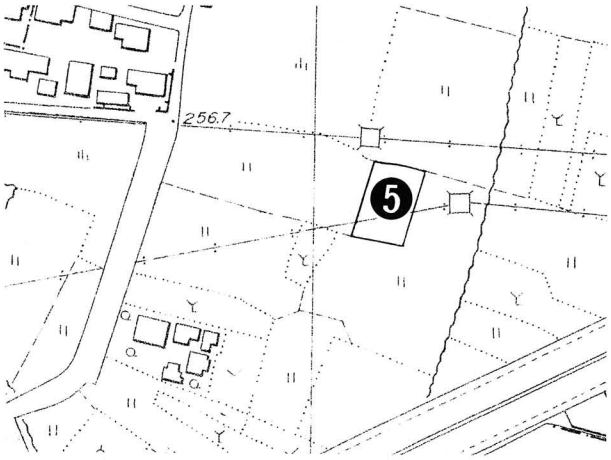
写真１　村添遺跡遠景

写真２　調 査 風 景

二又遺跡

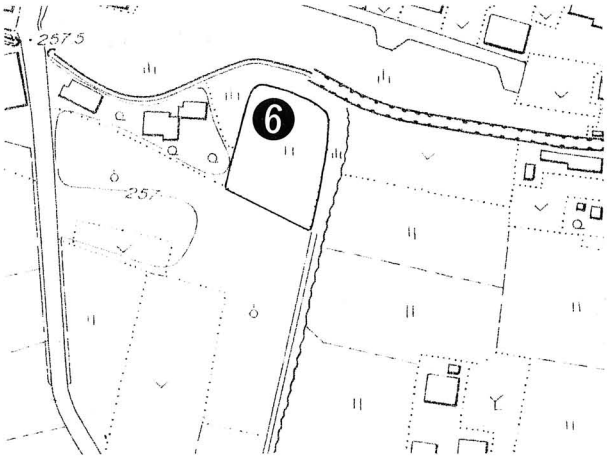
調 査 位 置　甲府市住吉4-1562.1563.1564.1566番地
調査原因者　甲府市
調 査 原 因　区画整理事業
調 査 面 積　100㎡
調 査 期 間　昭和62年７月23日～８月10日
調査担当者　伊藤正幸

宮田遺跡



調 査 位 置　甲府市住吉5-569-1番地
調査原因者　甲府市
調 査 原 因　区画整理事業
調 査 面 積　50㎡
調 査 期 間　昭和62年７月23日～８月10日
調査担当者　伊藤正幸

上ノ木遺跡



調 査 位 置　甲府市住吉5-612番地
調査原因者　甲府市
調 査 原 因　区画整理事業
調 査 面 積　50㎡
調 査 期 間　昭和62年７月23日～８月10日
調査担当者　伊藤正幸

ま　と　め

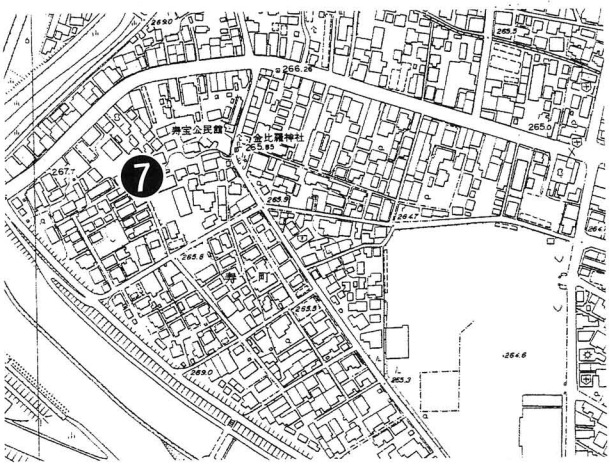
住吉四丁目から五丁目にかけては、部分的にではあるが弥生時代から平安時代に至る遺跡が確認されている（昭和60年度遺跡詳細分布調査報告）。住吉地区区画整理事業に先だち確認調査を実施したこれらの遺跡は、標高255ｍ程のほぼ平坦地に位置している。

現状での土地利用の制約のため、上ノ木遺跡及び宮田遺跡は２ｍ×２ｍの試掘坑により調査を行なったが、二又遺跡では５ｍの幅で長さ20ｍを調査することができた。

いずれの試掘坑からも遺構は検出されず、遺物についても小破片が多く、図示するには至っていない。

（伊藤正幸）

寿・宝区画整理予定地



調 査 位 置　甲府市宝二丁目、寿町
調査原因者　甲府市
調 査 原 因　寿・宝地区区画整理事業
調 査 面 積　42.0m²
調 査 期 間　昭和62年７月29日～８月28日
調査担当者　信藤祐仁

調査の概要

甲府市寿町と宝二丁目地内14.55ヘクタールの区画整理予定地内には、山梨県民文化ホール建設時に土器等が出土した寿町遺跡が存在する。江戸時代には、甲州街道が区域内を東西に貫通しており、街道沿いは飯田新町などの町屋がかつて存在していた地域である。

施工対象地が広大であり、埋蔵文化財の存在が想定されるため、保留地となっている空き地に調査区を設定して埋蔵文化財の有無を確認した。北西に相川、西南には荒川が流れており、特に荒川沿いは度重なる氾濫によって包含層相当部分が流失している可能性が高いため、西南部分は調査対象から除外した。調査区は、Ａ地点からＨ地点までの８地点において、敷地面積の状況に応じてトレンチまたは試掘坑を設定し、すべて人力で埋蔵文化財の有無を確認した。

Ａ地点は、２ｍ×18ｍの東西方向のトレンチを設定した。調査区の西半分は旧建物のコンクリート基礎が深くまで及んでおり、そのほとんどが攪乱を受けていた。

Ｂ地点は、１ｍ×２ｍの試掘坑を２箇所設定した。南側の試掘坑から、江戸期以降の敷石と遺物が発見された。

Ｃ～Ｆ地点は、1.5ｍ×２ｍの試掘坑それぞれ２箇所設定した。Ｃ・Ｄ地点は河川氾濫による砂層であったが、江戸期以降の遺物が確認された。Ｅ・Ｆ地点は、安定した土壌であったが遺物は確認できなかった。

Ｇ地点は、２ｍ×２ｍの試掘坑を１箇所設定した。河川氾濫による砂礫層のみであったが、大正時代の化粧水や白髪染めの瓶が出土している。

Ｈ地点は、粘土質の安定した土層であり、土鍋と擂鉢が出土している。

江戸時代以降の遺構や遺物が確認された地点があったが、当時近世以降は埋蔵文化財として認知されていなかったため、試掘調査のみで終了している。　（信藤祐仁）

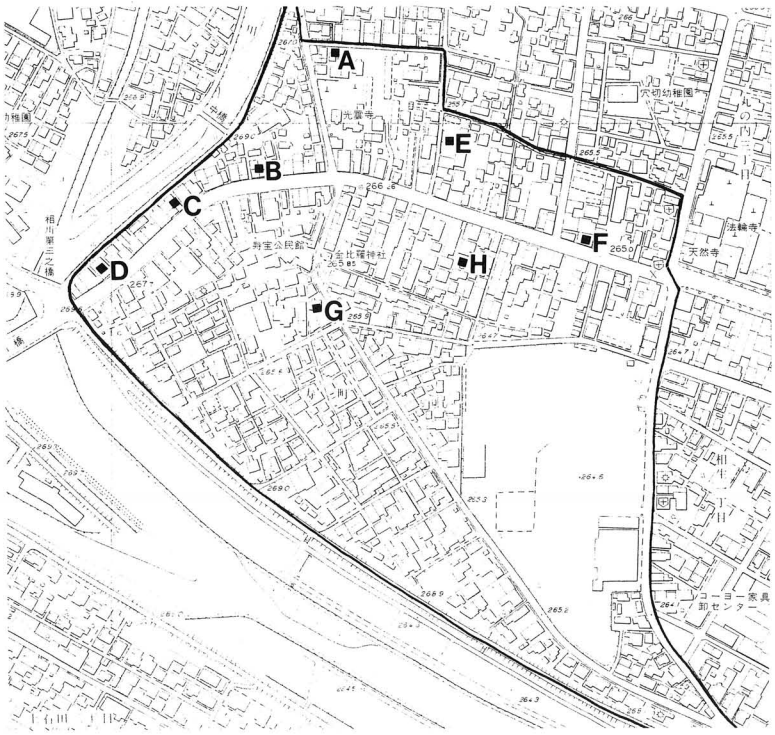


図１　調査区設定位置図

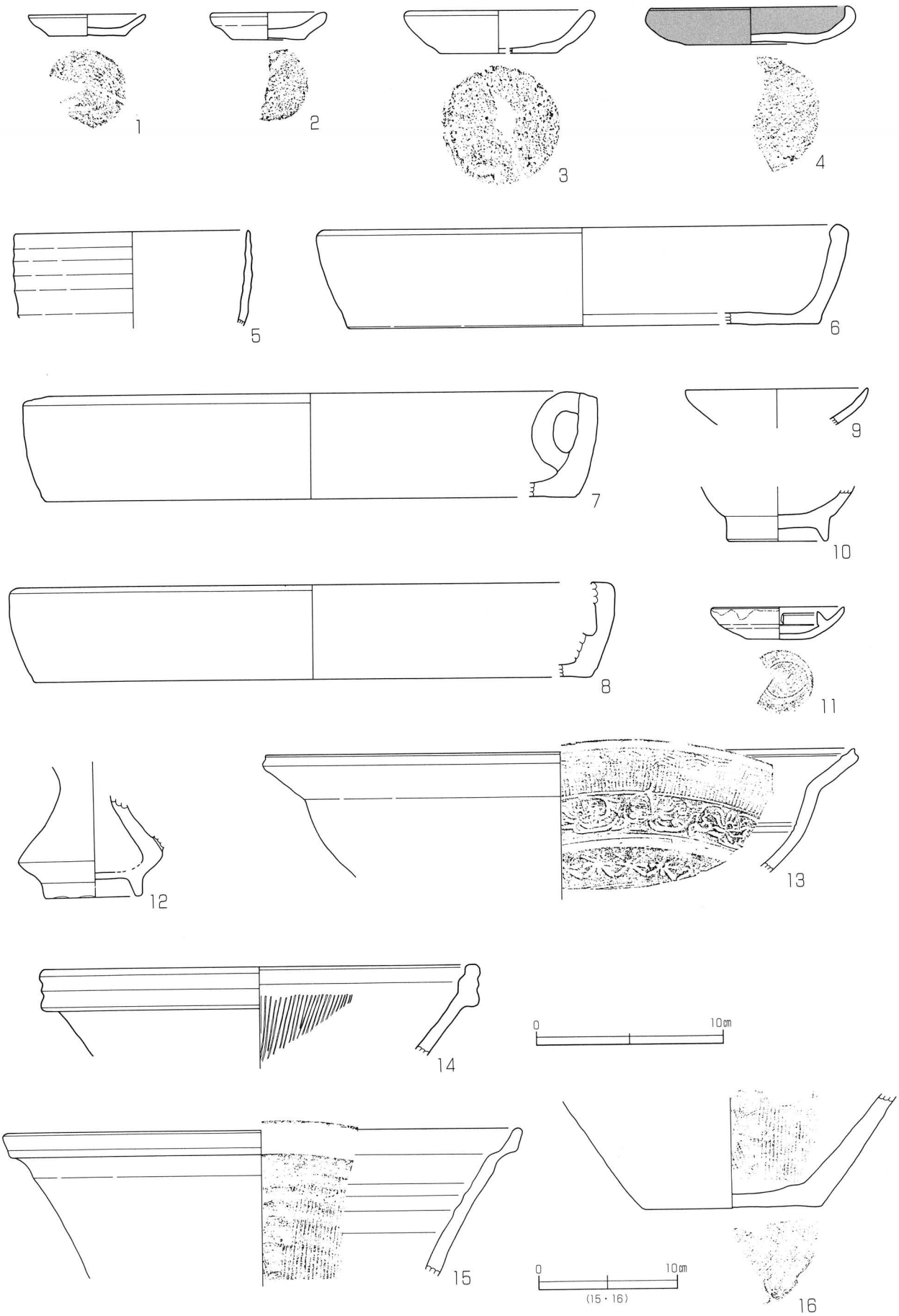


図2　出土遺物（1）

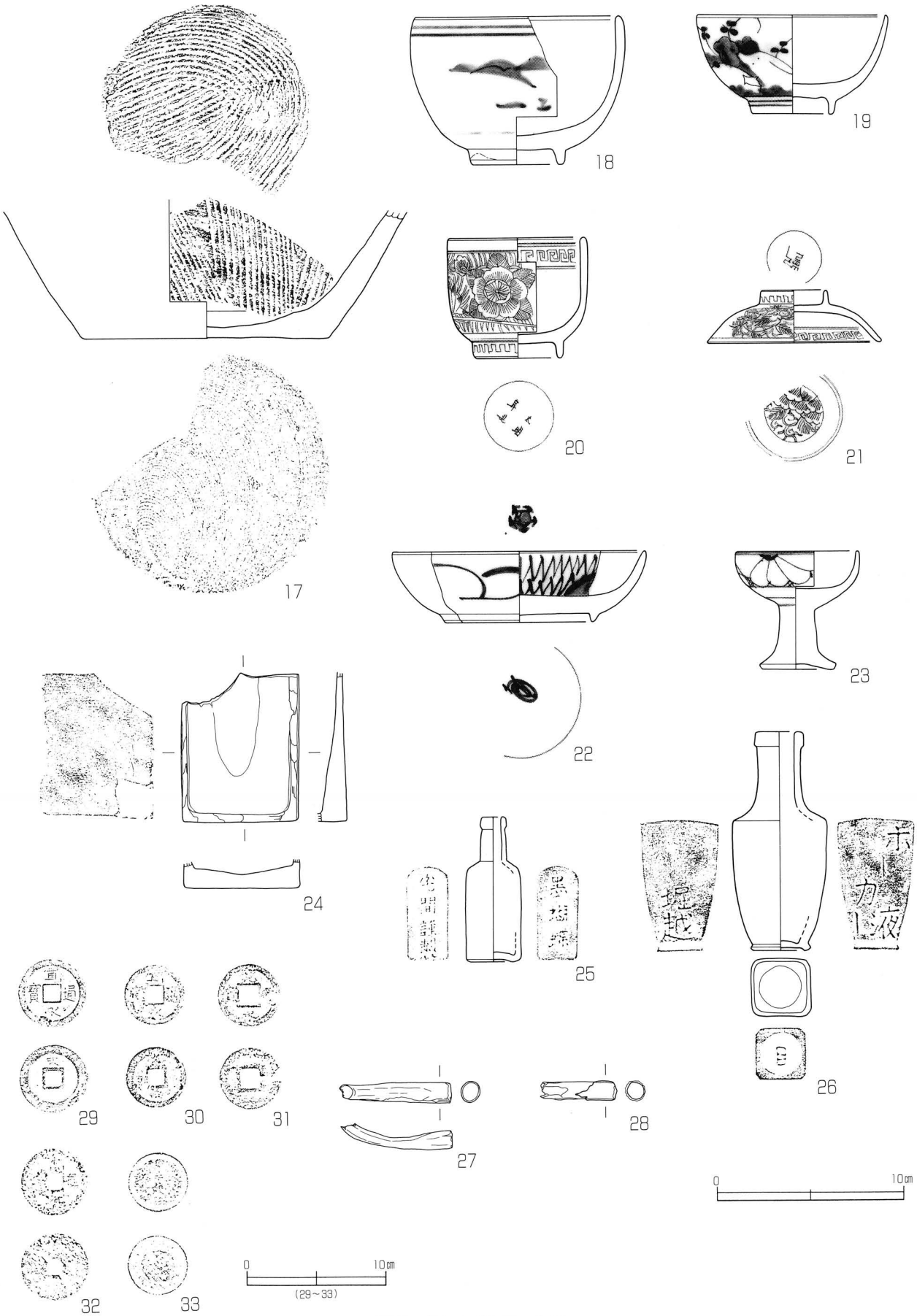


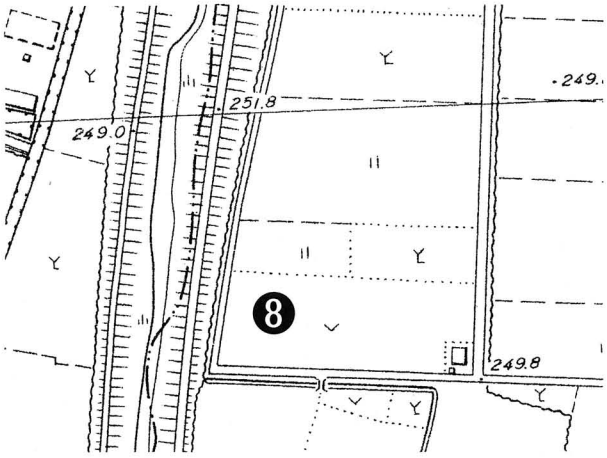
図3　出土遺物（2）

表１　寿・宝区画整理予定地出土遺物観察表

（　）復元値、単位(cm)

番号	出土地点	種別 産地	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	C２	土器	かわらけ	(6.4)・(1.2)・(4.2)	口縁部～底部	ロクロ	金雲母・長石・黒色粒子	良	にぶい黄橙 10YR 6/3	
2	B２	土器	かわらけ	(5.8)・(1.5)・(3.8)	口縁部～底部	ロクロ 底部回転糸切り	金雲母・長石	良	にぶい橙 5YR 6/4	
3	B２	土器	かわらけ	10.2・2.3・6.6	ほぼ完形	ロクロ 底部回転糸切り	金雲母・長石	良	灰白 10YR 7/2	
4	B２	土器	かわらけ	(10.8)・(2.0)・(7.0)	口縁部～底部	ロクロ 底部回転糸切り	金雲母・長石・石英	良	黒褐 10YR 3/1	熱による黒変
5	一括	瀬戸美濃	鉢	(13.0)・－・－	口縁部～体部	ロクロ 施釉	密	良	灰白 2.5Y 8/2	
6	H２	土器	内耳鍋	(29.0)・－・－	口縁部～底部	ロクロ	金雲母・長石・石英	良	内)黒褐 10YR 3/1 外)にぶい橙 7.5YR 6/4	
7	H２	土器	内耳鍋	(31.4)・(5.8)・(28.8)	口縁部～底部	ロクロ	金雲母・長石、石英	良	にぶい橙 7.5YR 6/4	
8	H２	土器	内耳鍋	(34.0)・(5.2)・(30.4)	口縁部～底部	ロクロ	金雲母	良	にぶい橙 7.5YR 6/4	
9	一括	陶器	碗	(10.0)・－・－	口縁部～体部	鉄釉	密	良	－	
10	一括	陶器	碗	－・－・(5.6)	底部	施釉	密	良	－	
11	一括	陶器	灯明受皿	7.4・1.3・3.5	口縁部～底部	鉄釉	密	良	－	
12	一括	陶器	油注し？	－・－・5.4	底部	鉄釉	密	良	－	
13	H２	唐津	鉢	(32.0)・－・－	口縁部～体部	施釉	密	良	－	
14	C２	陶器	擂鉢	(24.0)・－・－	口縁部	鉄釉	密	良	－	
15	B２	陶器	擂鉢	(38.0)・－・－	口縁部～体部	鉄釉	密	良	－	
16	B２	陶器	擂鉢	－・－・(13.0)	底部	鉄釉	密	良	－	
17	H２	陶器	擂鉢	－・－・13.5	底部	鉄釉	密	良	－	
18	B１	肥前系	碗	(11.1)・(8.0)・5.0	口縁部～底部	高台畳付無釉	緻密	良好	－	
19	B２	陶器	碗	(10.2)・(5.35)・4.4	口縁部～底部	－	緻密	良好	－	高台畳付に砂目
20	D１	磁器	碗	7.3・6.5・(4.6)	口縁部～底部	－	緻密	良好	－	焼き継痕あり 21の蓋とセットか
21	C２	磁器	蓋	(9.4)・(2.85)・(3.5)	口縁部～底部	－	緻密	良好	－	
22	一括	磁器	皿	(13.6)・(3.8)・(8.0)	口縁部～底部	－	緻密	良好	－	高台畳付に砂目
23	一括	磁器	仏飯器	(6.5)・(6.4)・3.8	口縁部～底部	底部無釉	緻密	良好	－	
24	H２	石製品	硯	幅 6.3・長さ (8.0)・厚さ 1.3	－	－	－	－	－	裏面に刻印あり
25	G１	ガラス製品	白髪染瓶	1.4・7.8・3.0	完形	－	－	－	－	「宅間謹製」「黒胡蝶」の銘あり
26	G１	ガラス製品	化粧品瓶	2.6・11.8・3.2	完形	－	－	－	－	大正時代 堀越嘉太郎商店
27	D２	銅製品	キセル	最大幅 1.2・長さ (6.0)・厚さ 1.0	雁首部	－	－	－	－	
28	B２	銅製品	キセル	最大幅 1.1・長さ (4.1)・厚さ 1.1	吸口部	－	－	－	－	
29	B２	銭貨	寛永通宝	直径 2.52・穿径 0.58・重量 3.6	－	－	－	－	－	
30	C２	銭貨	寛永通宝	直径 2.23・穿径 0.57・重量 2.1	－	－	－	－	－	
31	C２	銭貨	寛永通宝	直径 2.51・穿径 0.57・重量 2.9	－	－	－	－	－	
32	一括	銭貨	寛永通宝	直径 2.29・穿径 0.69・重量 2.2	－	－	－	－	－	
33	H２	銭貨	半銭	直径 2.22・－・重量 3.3	－	－	－	－	－	

技能開発センター予定地

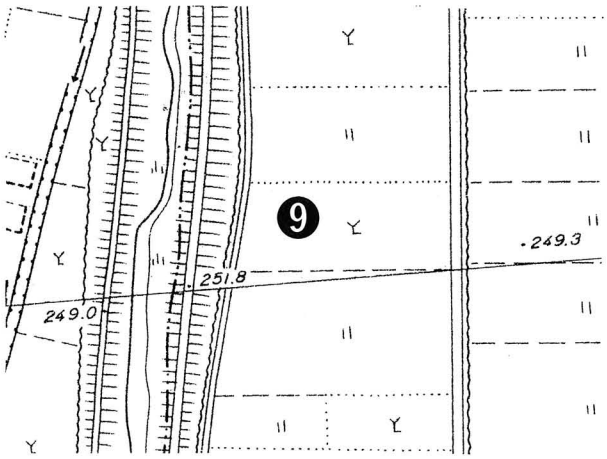


調 査 位 置　甲府市大津町2130番地他３筆
調査原因者　山梨県
調 査 原 因　中小企業技能開発センター建設工事
調 査 面 積　8.0㎡
調 査 期 間　昭和63年12月21日
調査担当者　信藤祐仁

調査の概要

開発予定地内に２ｍ×２ｍの大きさの試掘坑を２箇所設定し、埋蔵文化財の有無を確認したが、遺構・遺物とも検出できなかった。　（信藤祐仁）

工業技術センター予定地



調 査 位 置　甲府市大津町2094番地他37筆
調査原因者　山梨県
調 査 原 因　工業技術センター建設工事
調 査 面 積　22.0㎡
調 査 期 間　平成元年５月10日～５月12日
調査担当者　信藤祐仁

調査の概要

山梨県が進めるサイエンスパークの工業技術センター及びテクノプラザ建設にあたり、埋蔵文化財の確認調査を実施した。調査は1.5ｍ×１ｍの大きさの試掘坑ＡからＬまで12箇所を設定し、遺構や遺物の有無とともに土層の堆積状況を手掘りにより確認した。予定地はすべてが水田であり、地表面の耕作土中には磨耗した土師質土器の細片や陶磁器片をわずかながらに確認することができた。

基本土層の堆積状況は、以下のとおりである。第１層　暗褐色土層　10～20cm　水田の耕作土。第２層　褐色土層　10～20cm　第３層　褐色砂質土層　15～30cm　第４層　灰褐色砂質土層　40～60cm　第５層　灰色シルト層　地表下100cm前後以下。

ま と め

調査対象区の東北側に設けた試掘坑Ｊから、集石の一部が確認された。集石全体の範囲を確認するため、調査区を5.5㎡に拡大したところ、集石の範囲は東西140cm×115cmの隅丸方形で、４層中に掘り込まれ、深さは確認面から約20cmであった。石は拳大から人頭大の石が入れられており、中央部に凹をもつ石が１点含まれていた。また、馬歯２本が石の上面から発見されている。　（信藤祐仁）

写真１　調査対象地遠景

写真２　試堀坑堀削状況

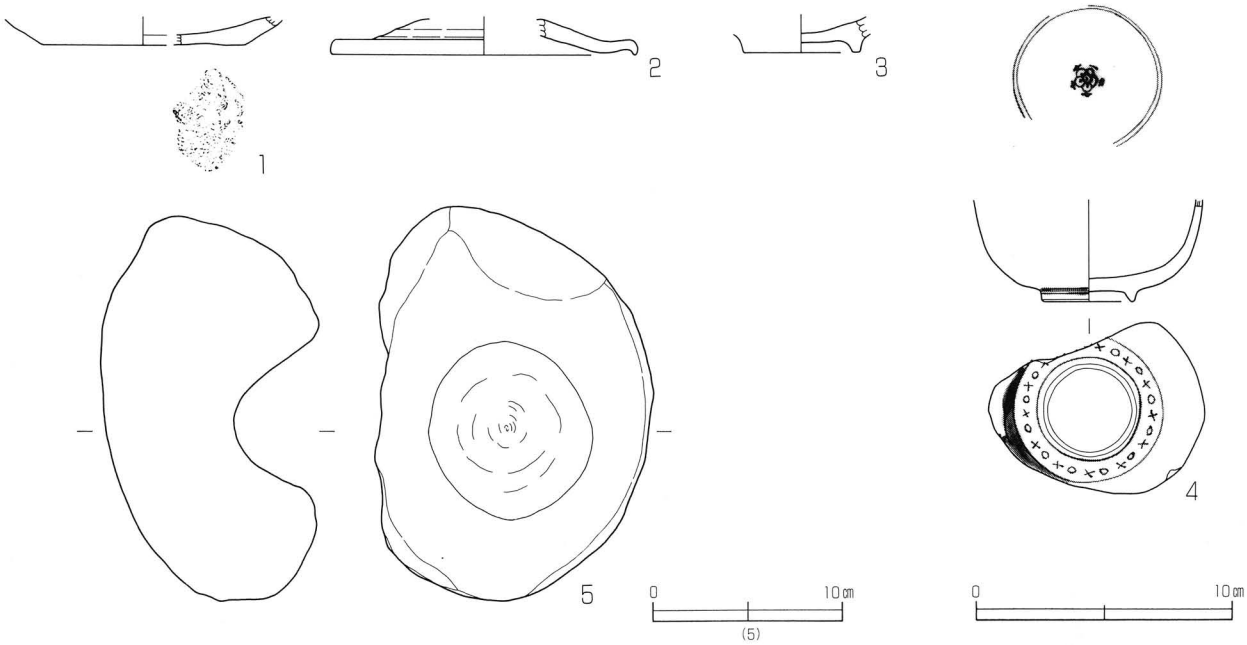


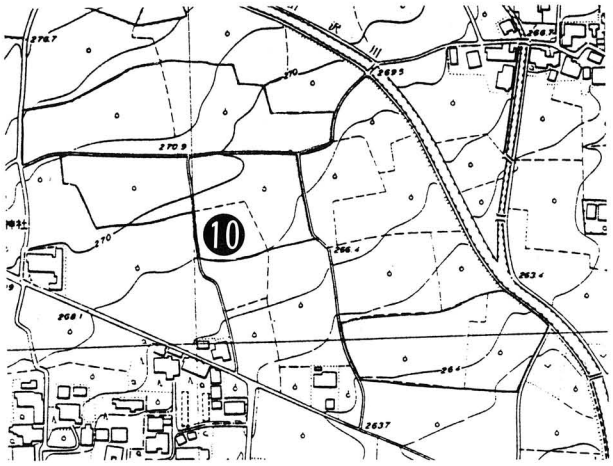
図１　出　土　遺　物

表１　工業技術センター予定地出土遺物観察表

（　）復元値、単位(cm)

番号	種別 産地	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	土器	皿か	－・－・(8.0)	底部	ナデ 底部回転糸切り	長石・石英・赤色粒子	良	橙 7.5YR 6/6	
2	土器	蓋	(12.0)・・－	口縁部～体部	ナデ	密	良	橙 7.5YR 6/6	
3	陶器	不明	－・－・(4.6)	底部	外面鉄釉	密	良好	－	
4	凹石	－	－・－・－	－	－	－	－	－	
5	磁器	碗	－・－・3.6	体部～底部	－	緻密	良好	－	

八木沢遺跡



調 査 位 置　甲府市横根町字八木沢・東畑地内
調査原因者　英和短期大学
調 査 原 因　大学キャンパス移転
調 査 面 積　148㎡
調 査 期 間　平成元年11月20日～11月30日
調査担当者　伊藤正幸

調査の概要

八人山と大蔵経寺山に挟まれた南向きの緩斜面上に位置し、標高270ｍを測る。古墳時代から平安時代の遺物の散布が顕著で、背後の山中には積石塚古墳群が分布する。

試掘調査時点で葡萄の栽培が行われていたこと及び、調査対象面積が37,000㎡と広大なことから、特に遺物の散布が顕著に認められる地域を中心に２ｍ×２ｍの試掘坑を37箇所設定し、地山まで掘り下げ遺構・遺物の包含状況及び土の堆積状況を確認した。また、遺物の表面採集調査を２日間に渡り実施した。

ま　と　め

設定した37箇所の試掘坑のうち遺構が確認された試掘坑はなく、４つの試掘坑から古墳時代の土器の小破片が検出された。器形については言及するに及ばない。

遺物の表面採集調査は、キャンパス計画区域全体を対象として２日間行った。その結果、大山沢川上流部分ではほとんど遺物の散布が認められなかった。

一方、大山沢川の中・下流部分は、いくらか古墳時代を中心に遺物の散布が顕著で、古墳時代の高坏・縄文時代の打製石斧等も昭和60年度の遺跡詳細分布調査の際に報告されている。

（伊藤正幸）

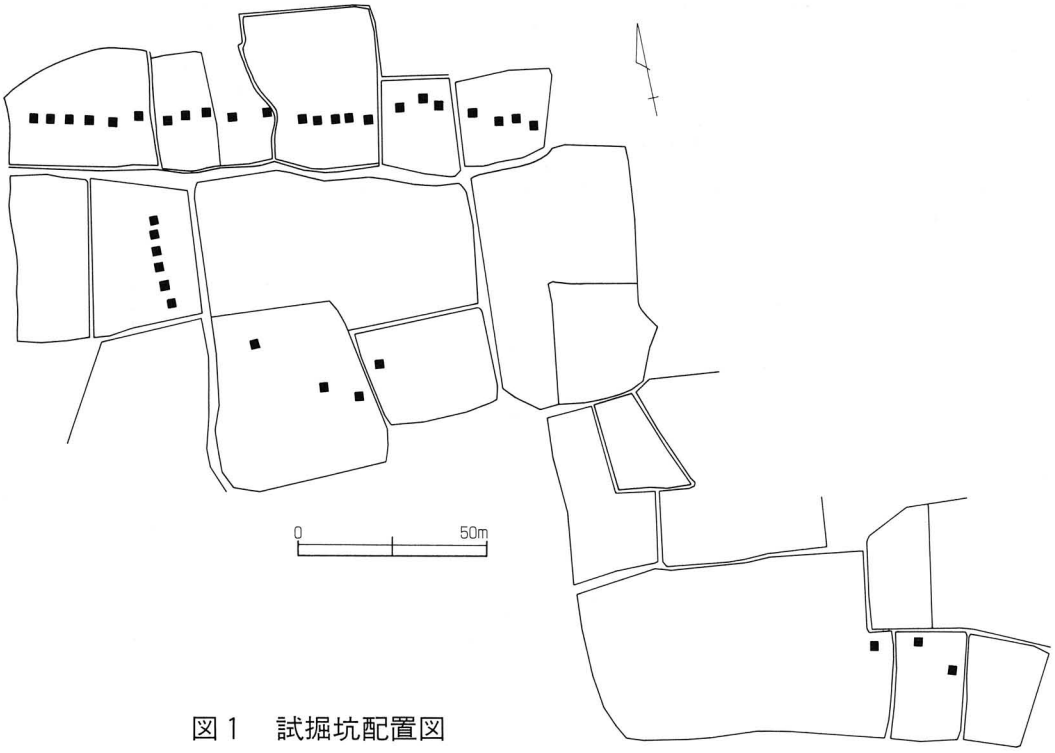


図１　試掘坑配置図

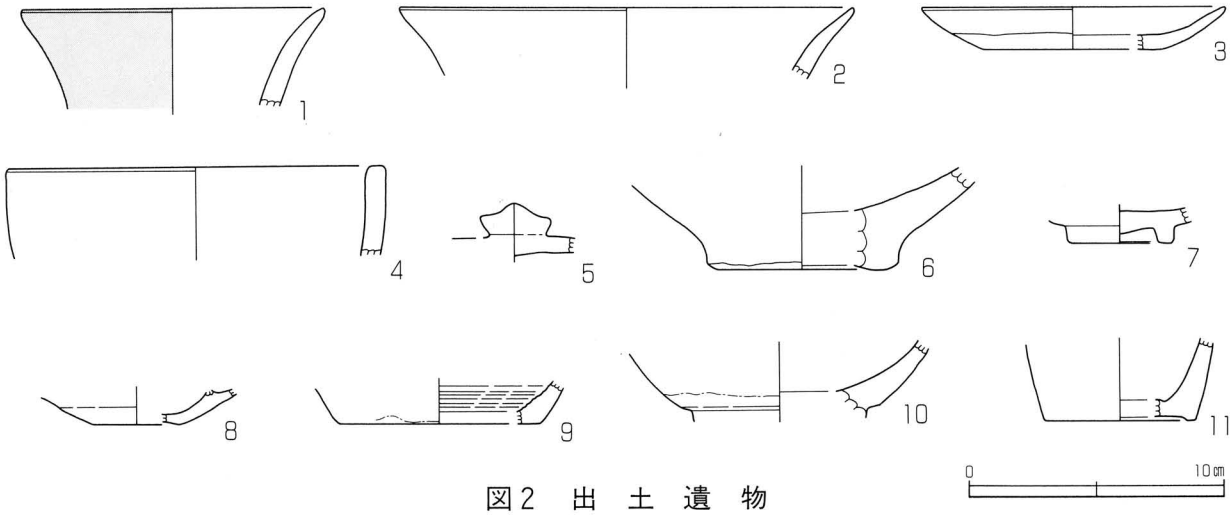


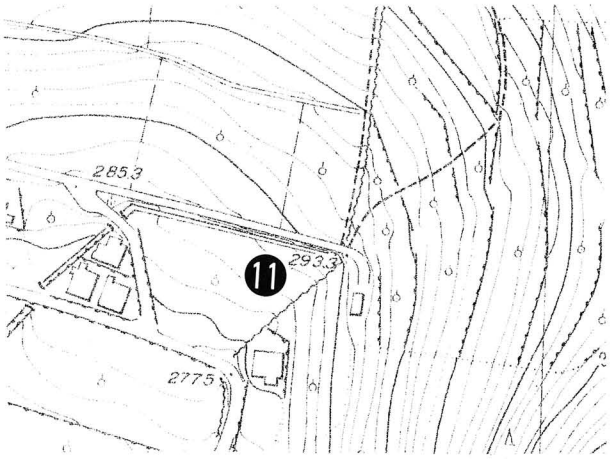
図2　出　土　遺　物

表1　八木沢遺跡出土遺物観察表

( )復元値、単位(cm)

番号	種別 産地	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	土器	壺	(12.0)・－・－	口縁部	内面ミガキ 外面赤色塗彩	金雲母・長石・石英	良	橙 7.5YR 6/6	
2	土器	甕	(18.0)・－・－	口縁部	ナデ	金雲母・長石・石英	良	橙 5YR 6/6	
3	土器	皿	(12.0)・－・－	口縁部～体部	ヘラナデ 外面体部にヘラ削り	金雲母・長石・赤色粒子	良	にぶい褐 7.5YR 7/4	
4	土器	鉢	(15.0)・－・－	口縁部	ロクロ	金雲母・長石・石英	良	橙 5YR 6/6	
5	土器	蓋	－・－・－	つまみ	ナデ	金雲母・赤色粒子	良	橙 5YR 6/6	
6	土器	甕	－・－・(7.6)	底部	ナデ	金雲母・長石・石英	良	橙 7.5YR 6/6	
7	陶器	碗か皿	－・－・(4.2)	底部	鉄釉	密	良	－	
8	陶器	灯明受皿	・・(3.4)	底部	施釉	密	良	－	
9	陶器	壺か	－・－・(8.0)	底部	施釉	密	良	－	
10	陶器	碗	－・－・－	体部	施釉	密	良	－	
11	陶器	不明	－・－・(6.0)	底部	外面灰釉	密	良	－	

酒折ワイナリー予定地



調 査 位 置　甲府市酒折町1338-60他15筆
調査原因者　㈱上矢酒造店
調 査 原 因　ワイナリー建設工事
調 査 面 積　10.0㎡
調 査 期 間　平成元年４月24日～４月26日
調査担当者　信藤祐仁

調査の概要

ワイナリー建設予定地は酒折町集落の東北側にあたり、東南に面する急傾斜地に小規模な段々畑が広がっており、西南側の一部のみがやや緩やかになっている。

計画地そのものは埋蔵文化財包蔵地になっていないが、西南には縄文時代の酒折縄文遺跡、南には中世の在地武士である酒依氏館跡、東南には近世の寺跡を含む酒折遺跡が存在する。東南に続く尾根上は現在採石場で掘削されているが、武田時代には山崎の烽火台が存在しており、西南の尾根を下ると「古事記」「日本書紀」に登場する酒折宮が存在する。

予定地の内、東斜面が急傾斜地で地表面に１ｍを超える大きな石が所々に露呈していたが、現地の状況から古墳が存在する可能性は認められなかった。西南側の緩やかな部分は、表面に土器等の散布が認められたので、この部分のみを試掘調査対象とした。東西２ｍ×南北１ｍの調査区を５箇所設定し、手掘りによって埋蔵文化財の有無及び土層の堆積状況を確認した。

土層の堆積状況は、以下のとおりである。

第１層	暗褐色土層	10～20cm	畑の耕作土。
第２層	茶褐色土層	30～50cm	調査区から遺物の出土はなかったが、包含層と推定される。
第３層	茶褐色土層	15～30cm	２層より粘性しまりがあり、拳大礫が混じる。
第４層	茶褐色土層	30～50cm	３層に近いが礫が大きく、しまりがあって硬い。
第５層	茶褐色礫層	地表下120cm～150cm以下の粘質で硬い小礫層。	

ま　と　め

遺構　各試掘坑とも遺構は検出されなかった。
遺物　各試掘坑とも遺物の出土はなかった。

開発予定地における事前の表面採集において、次の遺物が発見された。縄文土器小片３点、黒曜石小砕片６点、平安時代後期の土師器皿及び坏の小片９点、中近世の皿形の土師質土器片22点、近世以降の土製碁石５点・土鈴１点、透明な水晶破片７点である。いずれも小片であるが、縄文時代、平安時代、室町時代、江戸時代及びそれ以降の遺物である。水晶は、近世末期以降の数珠や玉の製作工程で出た剝片である。これらが本来属する遺跡の中心は、予定地の南側にあると推定される。　（信藤祐仁）

朝気遺跡（VI次調査）

調査位置　甲府市朝気一丁目
調査原因者　甲府市
調査原因　市道拡幅工事
調査面積　180㎡
調査期間　平成２年11月19日～12月６日
調査担当者　伊藤正幸

調査の概要

東小学校の東に隣接し、市道の拡幅工事に先立って発掘調査を実施した。東西８ｍ、南北26ｍの細長い調査地で廃土置き場を考慮し、調査は南北それぞれ半分ずつで実施せざるを得なかった。そのため表土剝ぎには重機を使用し、その後人力により精査しながら遺構・遺物を検出した。

遺　　構

住居跡１軒と溝跡２本（ＳＤ－１，ＳＤ－２）及び柱穴２基が確認できた。

住居跡は一片が4.5ｍ程の方形のプランを呈し、北壁中央部分にカマドを持つ。壁高は35cmほどで、カマドは攪乱され、焼土及び粘土が集中していたのでそう判断した。出土遺物から、古墳時代中期から後期に至る住居跡と思われる。

溝跡はＳＤ－１が幅60～80cmで、Ｎ－41°－Ｗに主軸方向を持つ。調査地東端部分で若干攪乱されているが、深さ25cm～30cmを測る。一方、ＳＤ－２は幅が30cmほどで調査区を横切るように確認され、Ｎ－64°－Ｗに主軸方向を持つ。西端で若干攪乱されていた。深さは30cmを測る。

柱穴２基には規則性は認められなかった。

遺　　物

遺物は１号住居跡内北西隅及びカマド周辺から、まとまって検出され、27点を図示した。25～27までは鉄釉陶器であるが、それ以外はいずれも土器である。

土器の器形は坏、高坏、甕、壺、甑等様々であり、いずれも古墳時代中期、５世紀第２四半紀から第３四半紀に位置づけられよう。

１～６の坏はいずれも丸底を呈し、口唇部は、１が屈曲して外反しているが４および５は直立し、その他のものは内湾する。６の土器には明確なヘラ削り跡が認められる他、４の土器にもヘラ削りの跡にミガキをかけた形跡が認められる。

７から11は高坏である。大型の口縁部及び脚部で、それぞれに有段が確認できる。９の高坏は柱状の脚部でヘラ削り痕が確認できるが、他の高坏はミガキにより調整がなされている。

20は甑であるが、大型の取っ手を持ち、寸胴タイプである。概期の特徴をよく示している。17の坩は口縁部のみであるが、よく磨かれ、同様の器形はこれまでの朝気遺跡の発掘調査により、完形品を含めて複数確認されている。

14及び16の小型壺は外面にヘラ削り痕が、内面には指頭痕が明瞭に認められる。16の小型壺は口縁部が欠損しているが、14同様、大きく外反する口縁部がつけられていたものと

思われる。

ま と め

調査面積は限られていたが、住居跡に伴い古墳時代中期の遺物がまとまった形で検出できたことは一応の成果である。これまでの調査で、縄文時代をも含み、弥生時代から平安時代に至る長期にわたり遺跡が営まれてきたことが明らかになっているが、特に古墳時代以降、平安時代に至る遺構・遺物の検出が顕著であり、今後の調査報告を待って再度検証していきたい。

（伊藤正幸）

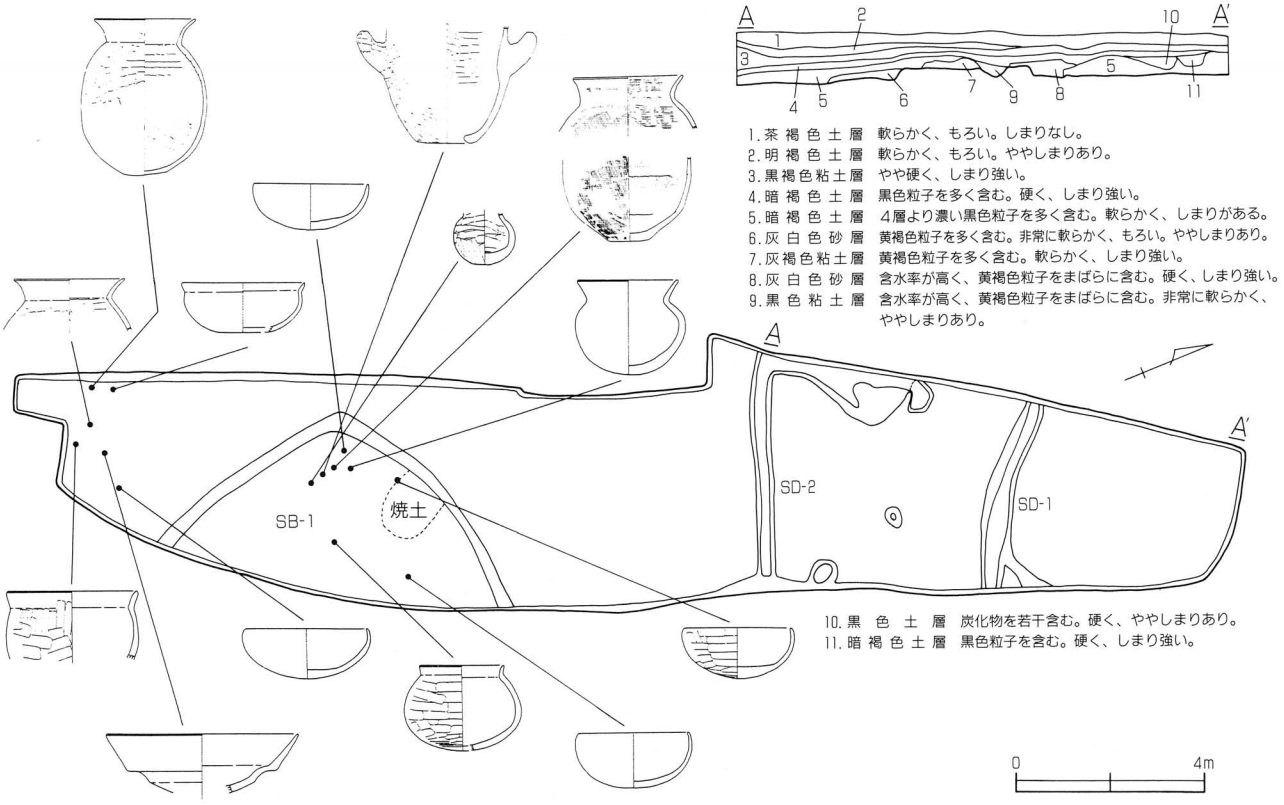


図１　朝気遺跡（VI次調査）全体図・セクション

写真１　調査区北部

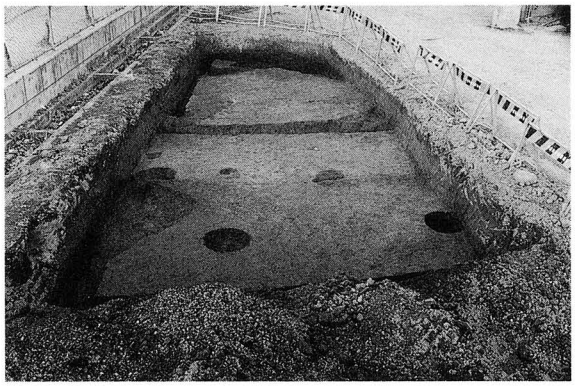


写真２　調査区南部

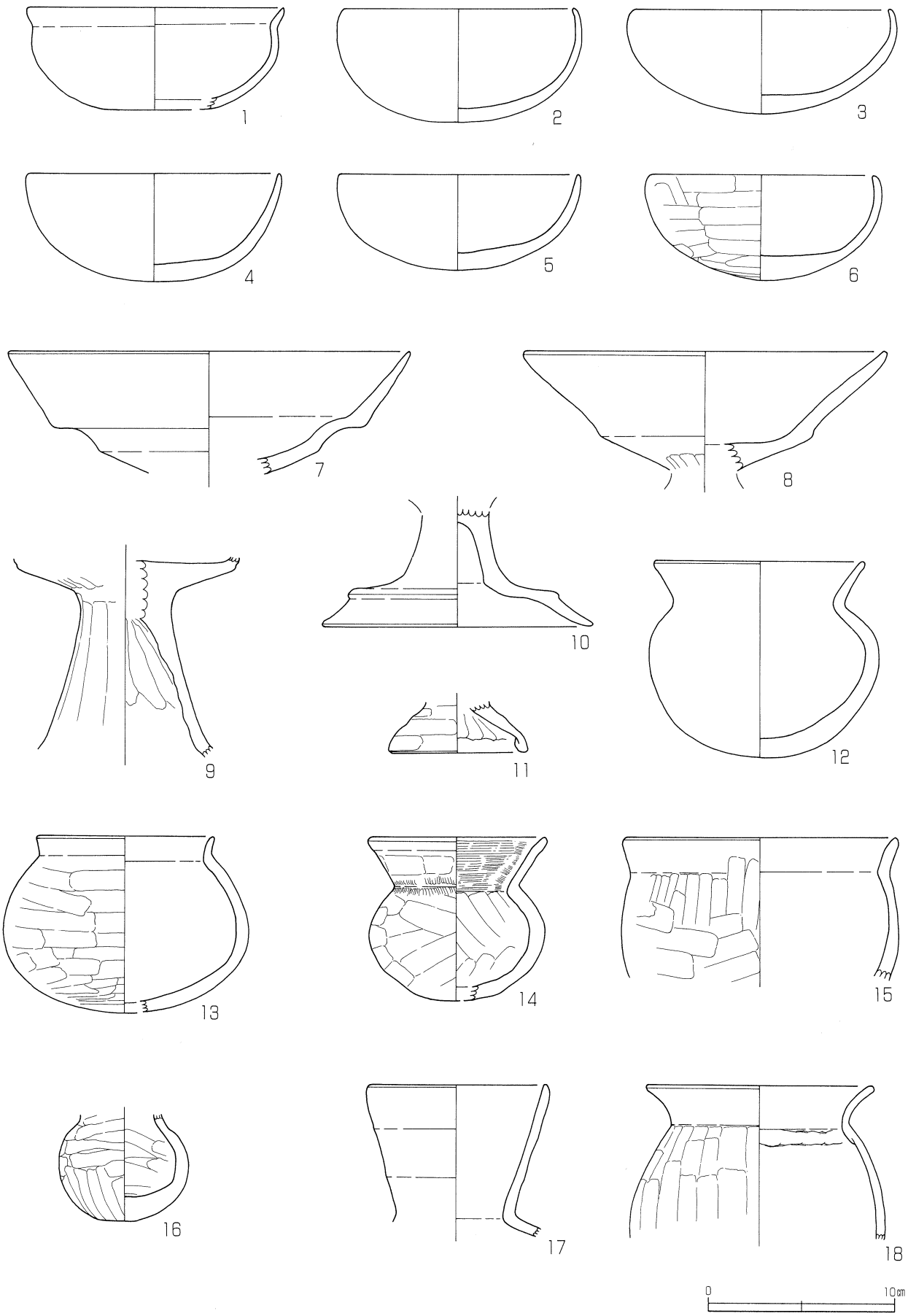


図2　出土遺物（1）

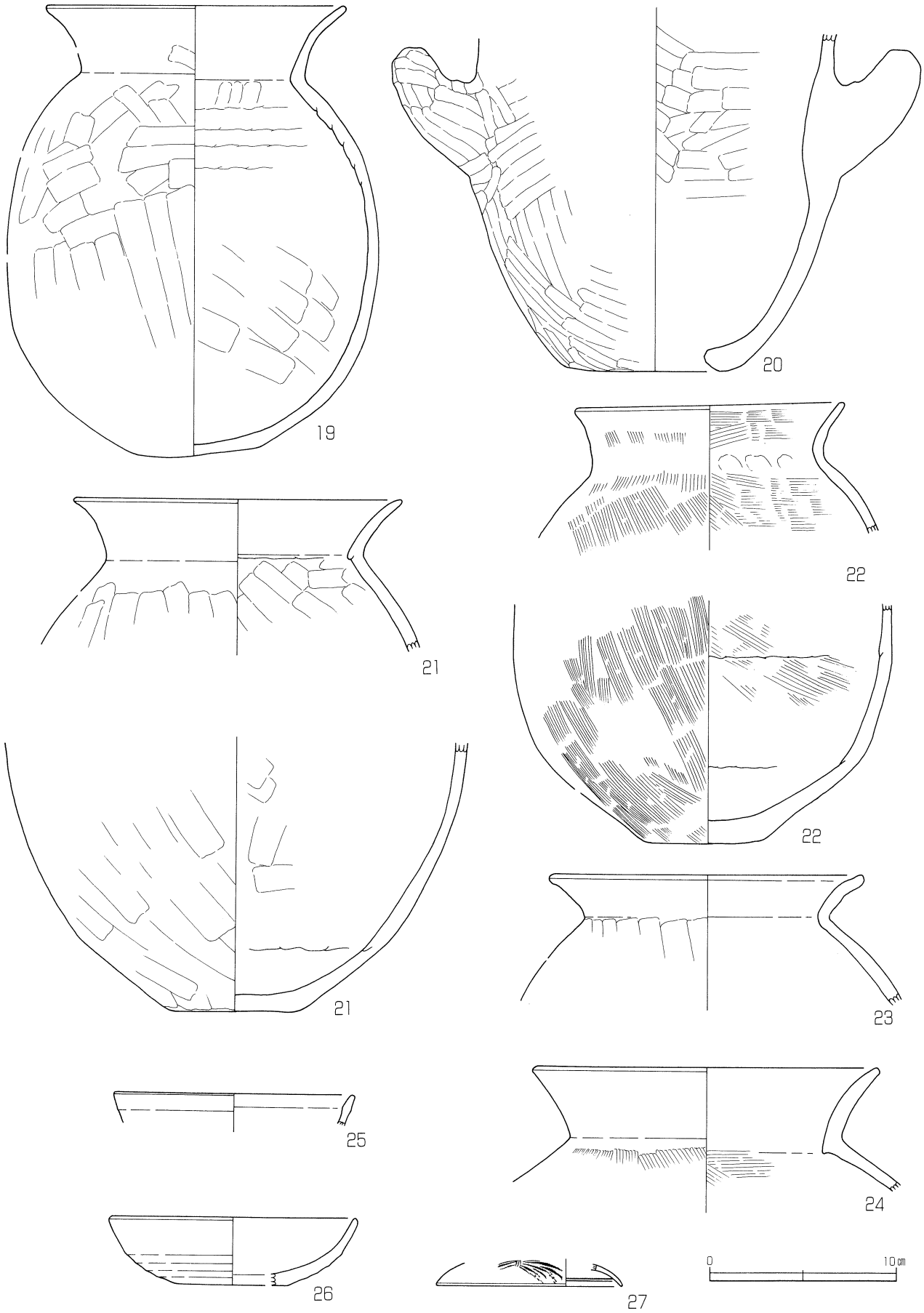


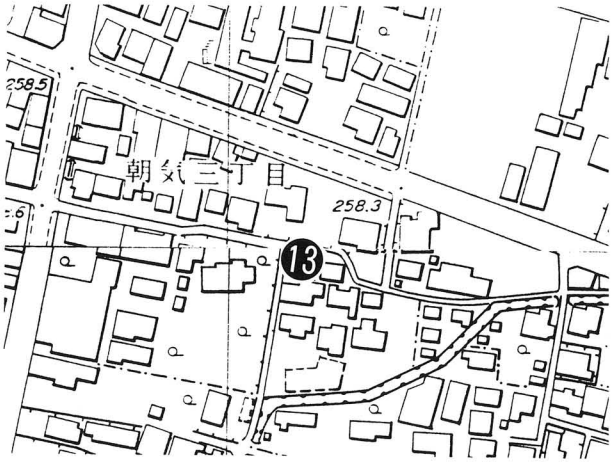
図3　出土遺物（2）

表１　朝気遺跡（Ⅵ次調査）出土遺物観察表

（　）復元値、単位(cm)

番号	種別 産地	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	土器	坏	(14.0)・(5.5)・(6.0)	口縁部～底部	ミガキ	金雲母・長石・赤色粒子	良	橙 5YR 6/6	
2	土器	坏	12.6・ 6.1・13.3	口縁部～底部	ミガキ 赤色塗彩	金雲母・長石・石英	良	にぶい橙 7.5YR 7/4	
3	土器	坏	(14.0)・(5.6)・(14.6)	口縁部～底部	ミガキ	金雲母・長石	良	橙 5YR 6/6	
4	土器	坏	13.8・ 5.8・13.8	口縁部～底部	内面ミガキ 外面ヘラ削りの上をミガキ	金雲母・長石・赤色粒子	良	にぶい橙 7.5YR 7/4	
5	土器	坏	13.0・ 5.2・13.0	口縁部～底部	ミガキ	金雲母	良	橙 7.5YR 7/6	
6	土器	坏	12.4・ 5.7・12.8	口縁部～底部	内面ナデ 外面ヘラ削り	金雲母	良	橙 5YR 6/6	
7	土器	高坏	(22.0)・ －・ －	口縁部～頸部	ミガキ	金雲母・長石・赤色粒子	良	橙 5YR 6/6	
8	土器	高坏	19.8・ －・ －	口縁部～頸部	ミガキ	金雲母・長石他赤色粒子	良	にぶい赤褐 2.5YR 5/4	
9	土器	高坏	－・ －・ －	脚部	ヘラ削り	金雲母・長石・赤色粒子	良	にぶい褐 7.5YR 5/4	
10	土器	高坏	－・ －・14.6	脚部	ミガキ	金雲母・長石	良	橙 7.5YR 6/6	
11	土器	高坏	－・ －・(7.6)	脚部	ナデ 指頭痕	金雲母・長石・赤色粒子	良	明赤褐 2.5YR 5/6	
12	土器	小型甕	11.4・10.7・12.4	口縁部～底部	ミガキ	金雲母・長石・赤色粒子	良	にぶい橙 5YR 6/4	
13	土器	小型甕	(9.6)・(9.6)・(13.2)	口縁部～底部	ヘラ削り	金雲母・長石・赤色粒子	良	橙 5YR 6/6	
14	土器	小型甕	(9.8)・(8.8)・(9.6)	口縁部～底部	内面口縁部ハケ 胴部ヘラ削り 見込指頭痕	金雲母・長石・赤色粒子	良	にぶい赤褐 5YR 5/4	
15	土器	甕	(15.0)・ －・ －	口縁部～胴部	ヘラ削り	金雲母・長石	良	橙 7.5YR 7/6	
16	土器	小型壺	－・ －・ 7.1	口縁部～底部	内面指頭痕 外面ヘラ削り	金雲母・長石・赤色粒子	良	にぶい橙 5YR 6/4	
17	土器	坩	9.9・ －・ －	口縁部	ミガキ	金雲母・長石	良	橙 2.5YR 6/6	
18	土器	小型甕	12.3・ －・ －	口縁部～胴部	ヘラ削り 輪積痕	金雲母・長石	良	内)にぶい黄橙 10YR 7/2 外)黒褐 10YR 3/1	
19	土器	甕	(16.1)・24.4・ 6.8	口縁部～底部	ヘラ削り 輪積痕	金雲母・長石・石英	良	にぶい黄橙 10YR 7/4 明赤褐 2.5YR 5/8	
20	土器	甑	－・ －・(9.6)	胴部～底部	ヘラ削り	金雲母	良	橙 7.5YR 7/6	
21	土器	甕	17.6・ －・(7.0)	口縁部と底部	ヘラ削り	金雲母・長石	良	にぶい黄橙 10YR 7/3	
22	土器	甕	14.1・ －・ 6.5	口縁部と底部	ハケ 指頭・輪積痕	金雲母・長石・石英	良	橙 7.5YR 7/6	
23	土器	甕	17.0・ －・ －	口縁部～頸部	ヘラ削り	金雲母・長石・石英	良	橙 5YR 6/8	
24	土器	甕か壺	18.3・ －・ －	口縁部～頸部	ハケ	金雲母・長石・石英	良	にぶい橙 7.5YR 6/4	
25	陶器	碗	(12.8)・ －・ －	口縁部	鉄釉	密	良	－	
26	陶器	碗	(13.0)・(3.45)・(6.0)	口縁部～底部	鉄釉	密	良好	－	
27	磁器	碗	(10.0)・ －・ －	口縁部～体部	－	緻密	良好	－	

朝気遺跡



調 査 位 置　甲府市朝気三丁目６番地
調査原因者　甲府市
調 査 原 因　集合住宅建設
調 査 面 積　100㎡
調 査 期 間　平成２年11月26日～12月６日
調査担当者　伊藤正幸

調査の概要

東小学校の西側、距離にして150ｍ程の住宅地の中に位置する。東小学校西方での調査例はこの時点ではあまりなく、市道善光寺敷島線の朝気遺跡Ｖ次調査以来のことである。

今回は集合住宅建設に伴う調査であったが、朝気遺跡の範囲の把握ということもあり、建築部分を対象に客土を除去し、その後試掘坑設定、必要に応じて拡張した。

遺　　構

焼土集中箇所を３箇所及び、柱穴を確認した。焼土集中箇所はいずれも住居跡に伴うカマドの可能性が強いが、土層堆積状況等を精査しても明確な痕跡は確認できなかった。

遺　　物

小破片も含めると調査地全体に散布していたが、器形及び部位の明確な遺物18点を図示した。器種としては甕・坏・鉢及び置カマドに分類でき、鉢は片口鉢１個体が確認できる。

坏及び鉢はヘラ削り跡が残り、口唇部が肥大し外反する。いわゆる甲斐型坏である。置きカマドは脚部のみが残存していた。

ま　と　め

調査地は若干攪乱されていたが、遺物は比較的出土した。朝気遺跡が営まれた最後の時期にあたり、今後資料の増加を待って検討することが必要である。　　（伊藤正幸）

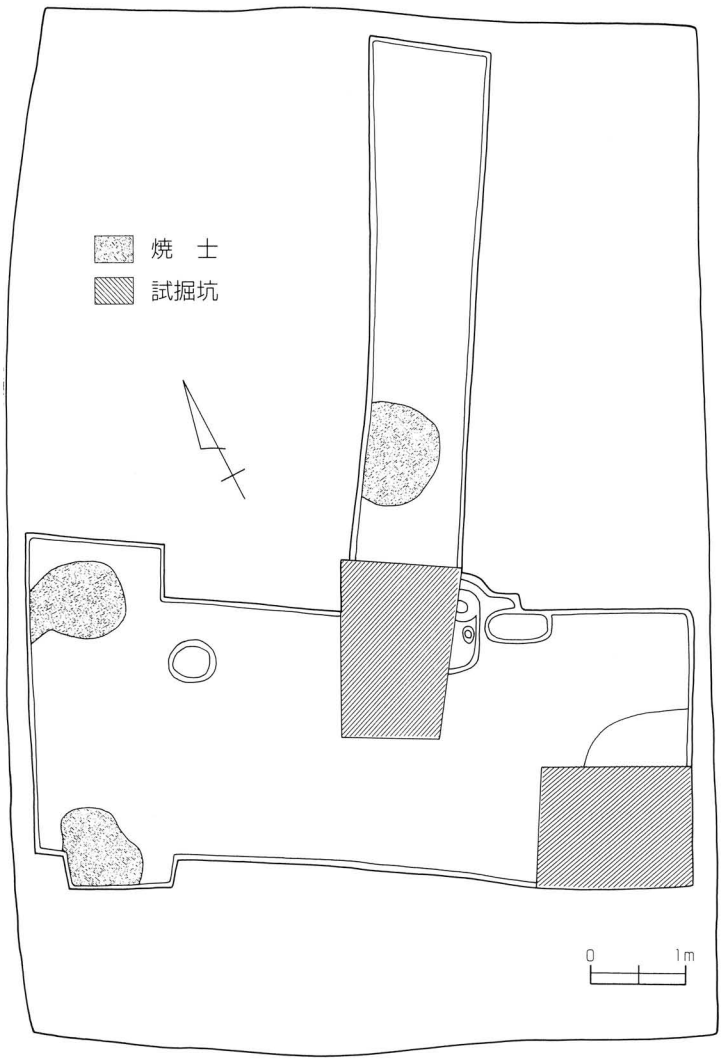


図１　調査区全体図

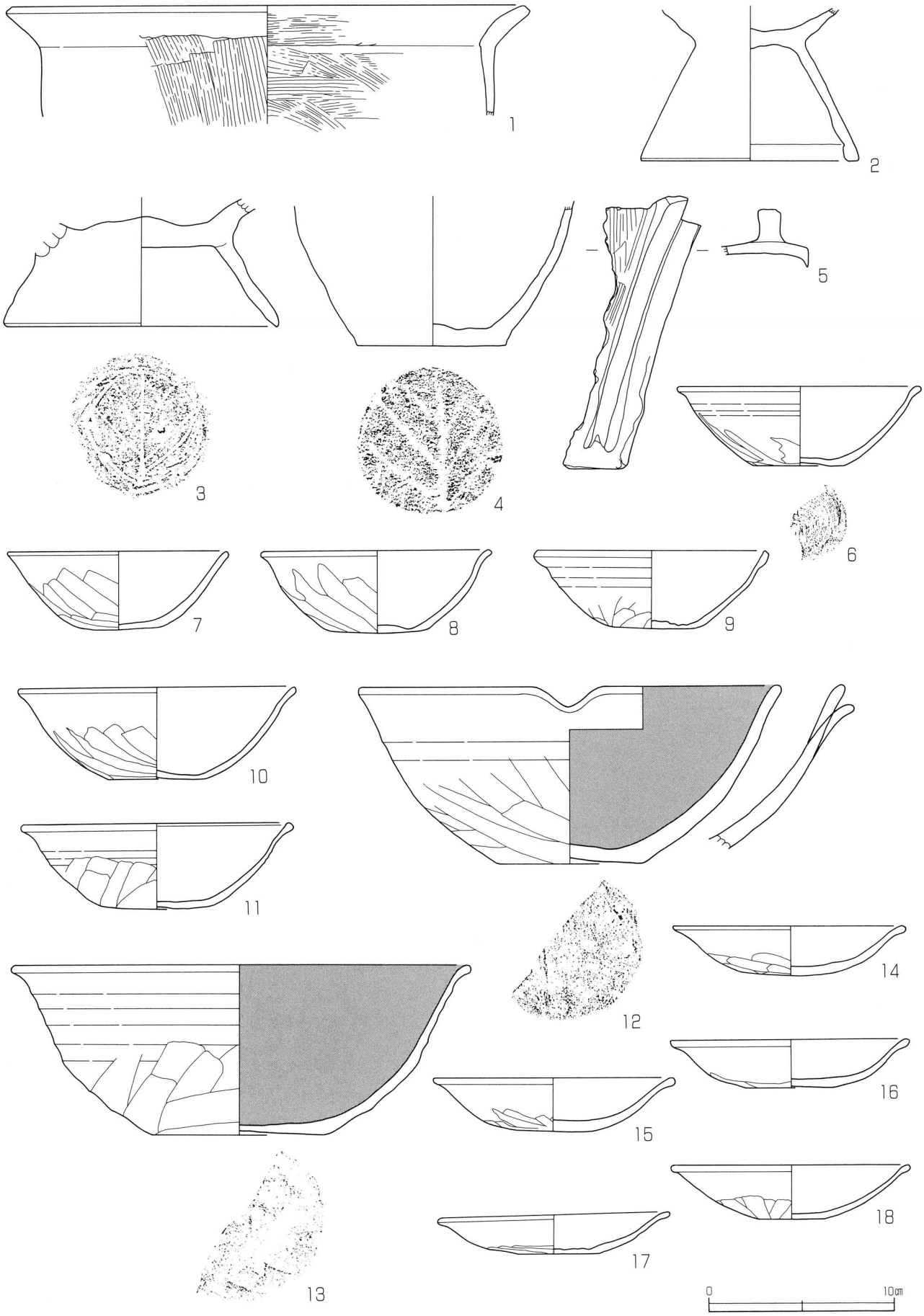


図2　出土遺物

表１　朝気遺跡出土遺物観察表

（　）復元値、単位(cm)

番号	種別 産地	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	土器	甕	(28.5)・－・－	口縁部	ハケ	金雲母・長石・石英	良	内)暗褐 7.5YR 3/4 外)にぶい赤褐 5YR 4/4	
2	土器	台付甕	－・－・11.7	脚部	ヘラナデ	金雲母・長石	良	内)橙 7.5YR 6/6 外)/明褐 7.5YR 5/6	
3	土器	台付甕	－・－・14.8	脚部	ハケ 木葉痕	金雲母・長石・石英	良	明赤褐 2.5YR 5/6	
4	土器	甕	－・－・8.1	底部	ナデ 木葉痕	金雲母・長石・石英	良	内)赤褐 2.5YR 4/8 外)赤褐 2.5YR 4/6	
5	土器	置カマド	－・－・－	上部	ハケ	金雲母・長石・石英	良	内)赤褐 2.5YR 4/8 外)赤褐 2.5YR 4/8	
6	土器	坏	(13.2)・(4.4)・(4.9)	口縁部～底部	ヘラ削り	金雲母・長石・赤色粒子	良	橙 5YR 6/6	
7	土器	坏	11.8・4.3・4.1	口縁部～底部	ヘラ削り	金雲母・長石・赤色粒子	良	内)橙 5YR 6/6 外)橙 7.5YR 6/6	
8	土器	坏	12.5・(4.6)・(5.1)	口縁部～底部	ロクロ	金雲母・長石・赤色粒子	良	内)明赤褐 5YR 6/6	
9	土器	坏	12.7・4.2・4.6	口縁部～底部	ヘラ削り	金雲母・長石・赤色粒子	良	内)浅黄橙 7.5YR 8/6 外)浅黄橙 7.5YR 8/4	
10	土器	坏	(15.0)・(4.0)・(5.2)	口縁部～底部	ヘラ削り	赤色粒子	良	橙 5YR 6/6	
11	土器	坏	(14.9)・(4.7)・(6.4)	口縁部～底部	ヘラ削り	金雲母・長石・赤色粒子	良	橙 5YR 6/6	
12	土器	片口鉢	(22.1)・(9.7)・(8.0)	口縁部～底部	ヘラ削り	金雲母・長石	良	内)黒 7.5YR 2/1 外)橙 7.5YR 7/6	内面黒色
13	土器	鉢	(25.0)・(9.3)・(9.4)	口縁部～底部	ヘラ削り	金雲母・長石・赤色粒子	良	内)黒褐 5YR 2/1 外)橙 5YR 7/6	内面黒色
14	土器	坏	12.5・2.7・5.0	口縁部～底部	ヘラ削り	金雲母・長石・赤色粒子	良	橙 5YR 7/6	
15	土器	坏	(13.0)・(2.9)・(4.2)	口縁部～胴部	ヘラ削り	長石・石英・金雲母	良	橙 5YR 6/6	
16	土器	坏	(12.8)・(2.65)・(4.65)	口縁部～底部	ロクロ	金雲母・赤色粒子	良	にぶい橙 7.5YR 7/4	
17	土器	坏	12.6・2.2・4.3	口縁部～底部	ヘラ削り	赤色粒子・金雲母	良	内)橙 5YR 6/6 外)明赤褐 5YR 5/6	
18	土器	坏	13.0・3.0・3.6	口縁部～底部	ヘラ削り	金雲母・長石・赤色粒子	良	内)橙 5YR 6/8 外)明赤褐 2.5YR 5/8	

写真１　北部トレンチ

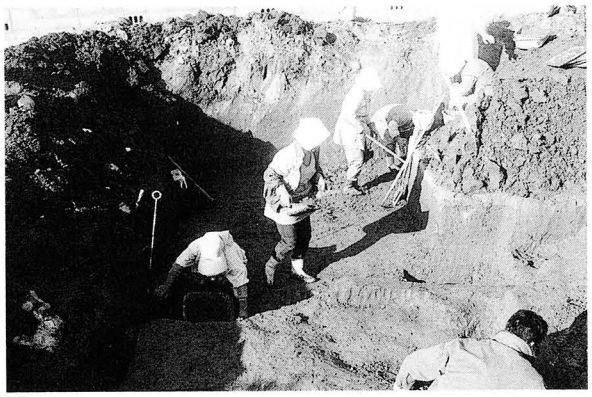
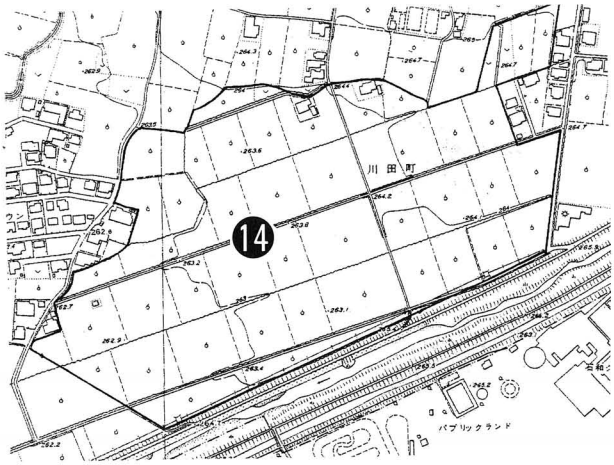


写真２　作業風景

川田工業団地予定地



調 査 位 置　甲府市川田町664番地他134筆
調査原因者　協同組合ファッションシティ甲府
調 査 原 因　川田ファッション工業団地造成工事
調 査 面 積　80.0㎡
調 査 期 間　平成３年２月12日～２月26日
調査担当者　信藤祐仁

調査の概要

川田工業団地予定地は、平等川（旧笛吹川）の右岸に位置し約85,000㎡の広さである。周知の埋蔵文化財包蔵地は存在しないものの、北側には桜井畑遺跡や外中代遺跡及び川田武田氏館跡が存在する歴史的に重要な地域である。開発の前に埋蔵文化財の有無を確認するため、予定地内にほぼ均等になるように、約2,500㎡に対して１箇所の試掘坑を設定して合計35箇所を調査した。試掘坑は、スコップが内部で動かすことができる1.5ｍ×1.5ｍの大きさを基本とし、1.5ｍ以上深くなるものについては２ｍ四方まで拡大して調査を行った。

試掘坑は、すべて作業員の手掘りによって掘削し、遺物の有無の確認とともに土層の堆積状況を観察し、写真と土層柱状図を作成した。

調査を実施した35箇所の試掘坑のうち33箇所において、明治40年と43年の平等川（旧笛吹川）の氾濫によって上流より運ばれてきた砂が厚く堆積していた。調査区からの遺物は皆無であったが、一部地表面で確認された古墳時代の土器片は、上流域の遺跡から流入したものであると推定される。対象地北西側の２地点は、砂層ではなく安定した土層が堆積しており、これより北側には埋蔵文化財の存在する可能性がある。

ま　と　め

遺構　各試掘坑とも遺構は検出されなかった。
遺物　各試掘坑とも遺物の出土はなかった。　（信藤祐仁）

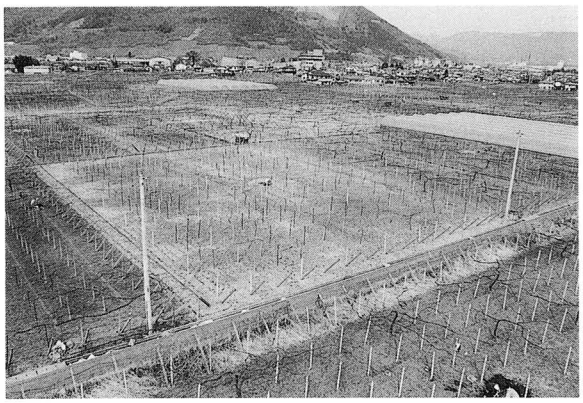


写真１　調査対象地遠景

写真２　試掘坑掘削状況

千代田湖ゴルフクラブ予定地

調査位置　甲府市平瀬町・下帯那町
調査原因者　株式会社 千代田湖ゴルフクラブ
調査原因　ゴルフ場造成工事
調査面積　200.0㎡
調査期間　平成３年３月10日～３月28日
調査担当者　信藤祐仁

調査の概要

千代田湖の西側、上帯那から流れる帯那川と荒川に挟まれた広葉樹を中心とする山の一帯に、18ホールのゴルフ場造成計画が持ち上がった。平瀬集落の東側にあたり標高は450ｍから613ｍで、山の中には果樹畑や水田も点在している地域である。

この区域の中には埋蔵文化財の存在は知られていないが、周辺には縄文時代から平安時代にまたがる千代田湖畔の丸山遺跡などがあり、中世の石造物も多数存在している。この予定区域には、平瀬地区の住民によって祭祀されている「金毘羅さん」「黒塚さん」と呼ぶ信仰の対象地が存在している。

計画地は広大で起伏に富んだ地形であるので、埋蔵文化財が存在する可能性のある平瀬地区の傾斜の緩やかな畑と水田に４箇所、下帯那地区の丘陵上の畑に９箇所の試掘坑を設定した。試掘坑は1.5ｍ×１ｍの大きさで、手掘りによって埋蔵文化財の有無及び土層の堆積状況を確認した。また、平瀬地区の「金毘羅さん」については、石祠３基がある部分の清掃発掘とその前面に存在していた拝殿の建物部分６ｍ×５ｍを調査した。「黒塚さん」においては、石壇状部分の清掃発掘とその前面の平坦部に１ｍ×3.5ｍのトレンチを設定し、遺構・遺物の有無と土層の堆積状況を確認した。

ま　と　め

遺構　「金毘羅さん」は、平瀬集落を見下ろす山頂に位置している。ここには石祠３基があり、それぞれの裏に角柱状の自然石の立石が存在し、石祠の北側にも石積みによる祭壇状の構築物があることを確認した。かつて拝殿が存在していたことを地元の人から聞いており、石祠の前にはそれに対応する平坦地がある。この部分の枯葉や腐葉土など表土をはぐと、長さ30cmほどの礎石６個が確認でき、南北３間×東西２間の大きさの拝殿であったと推定される。拝殿の周囲には白褐色の１cm以下の漆喰が検出され、南側には瓦の集積部分もあった。土壁に漆喰が塗られ、瓦葺の拝殿がかつては存在していたことが確認できた。

「黒塚さん」と呼ばれる部分は、山頂より少し下がった地点に大小の安山岩の自然石を石段状に配したものである。前面の平地には石製カマドがあり、この前面に注連縄が張られて今でも地元の平瀬地区では氏神様より厚い信仰を集めているという。石の祭壇は上部に立石を置き、両側を列状に集積した石で祭祀空間を形成している。平面形は下が広がる三角形を呈し、この間に数段の石段状の部分を構築している。石の間からは、「寛永通宝」が出土している。

平瀬地区の「金毘羅さん」と「黒塚さん」の間に、桑畑で２箇所、水田で２箇所試掘坑を設けたが、遺構はなかった。土層は斜面上の桑畑で、第１層　暗褐色土層、第２層　明褐色礫混土層　約70cm以下が白褐色の岩盤であった。下の水田部分は、第１層　明褐色粘

質土層、第２層　黄褐色粘質土層（水田床土）、第３層　暗茶褐色粘土層、第４層　茶褐色粘土層で50～60㎝以下が灰褐色礫混粘土層であった。

下帯那地区では、帯那川と下帯那集落の間で、県道より北側の丘陵上に試掘坑を設定した。この地区内の土層はほとんど同じで、第１層　暗褐色土層、第２層　茶褐色粘質土層第３層　明褐色岩盤であった。

遺物　「黒塚さん」地点で、寛永通宝34枚が出土した。銅銭17枚、鉄銭７枚である。同地点の石製カマドは、半円形の安山岩２石で構築したものである。下帯那地区の試掘坑周辺の畑で、土師質土器片を１点表面採集したが、調査区からの遺構、遺物の痕跡はなかった。

（信藤祐仁）

写真１　金毘羅さんの石祠

写真２　金毘羅さん調査風景

写真３　黒塚さん前の調査トレンチ

写真４　黒塚さん頂上部

写真５　黒塚さん祭壇部

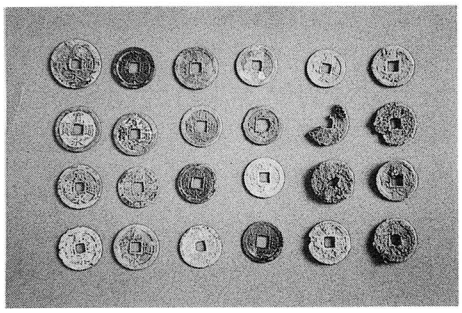
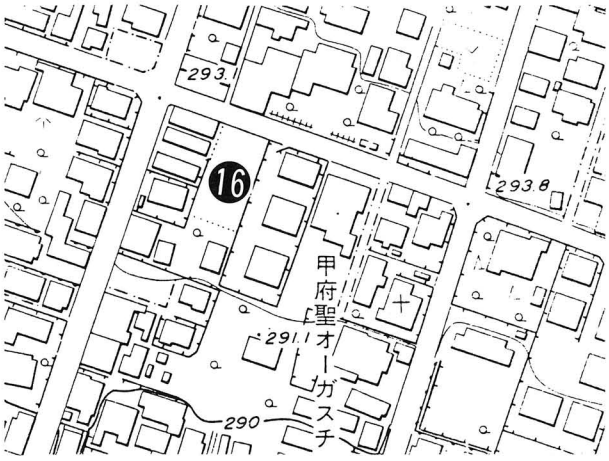


写真６　黒塚さん出土銭貨

北東部市民センター予定地



調 査 位 置　甲府市武田三丁目１番21他
調査原因者　甲府市
調 査 原 因　北東部市民センター建設工事
調 査 面 積　15.0㎡
調 査 期 間　平成３年３月29日～３月30日
調査担当者　信藤祐仁

調査の概要

甲府市北東部市民センター（北東公民館）の建設にあたり、埋蔵文化財の確認調査を実施した。予定地は武田時代城下町に含まれ、旧尊躰寺の南側、穴山小路の南に隣接する一帯である。江戸時代には三の堀の外側ではあるが甲府城下町の北縁部にあたり、元穴山町と畳町の町人居住地でもある。

調査は1.5ｍ×１ｍの大きさの試掘坑ＡからＪまで10箇所を設定し、遺構や遺物の有無とともに土層の堆積状況を手掘りにより確認した。

土層の堆積状況は、北・中・南と場所によって異なるが、中央部の元畑であった部分を基本土層とした。

第１層　明褐色土層　10～15cm　畑の耕作土。
第２層　灰褐色土層　10～25cm　砂が一部混じる。
第３層　茶褐色粘質土層　40～50cm　上位から漸移的に明るみを増す。
第４層　暗褐色粘質土層　30cm　拳大以下の礫が混じる。
第５層　暗褐色粘質土層　20cm以上

ま と め

遺構　調査区から、遺構は検出されなかった。
遺物　調査区から、遺物の出土はなかった。　（信藤祐仁）

写真１　調査区南半部

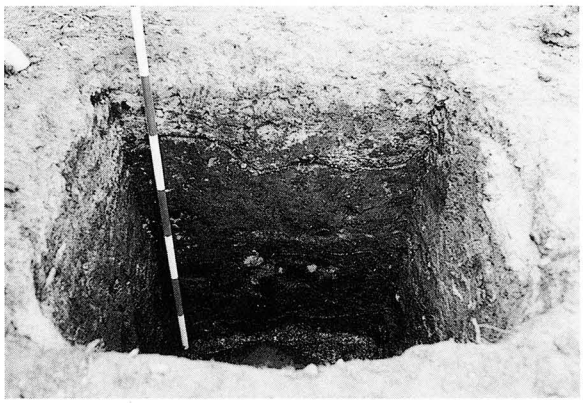
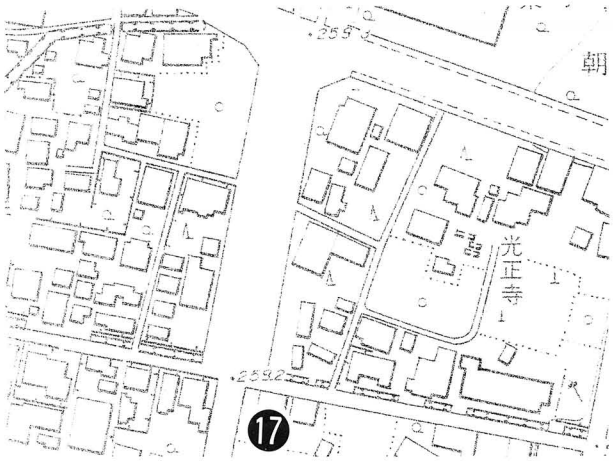


写真２　試堀坑堀削状況

朝気遺跡（Ⅶ次調査）



所　在　地　朝気三丁目156－２番地他
調査原因　市道拡幅工事
調査面積　625㎡
調査期間　平成３年11月16日～12月19日
調査担当者　鈴木俊雄

調査の概要

本遺跡は甲府市南東部に位置し、標高約260ｍを測る。西側約1.3㎞に荒川が緩やかに南流し、市内最南端で笛吹川に合流する。すでに周辺は住宅地となるが、縄文時代から平安時代に至る遺跡が点在し、朝気遺跡は過去７次に及ぶ調査が行われている。

調査に際し、工事対象地の全長約125ｍ、幅約５ｍに対して全長約90ｍ、幅約３ｍのトレンチを２箇所に設定した。表土を重機で除去した後、人力による掘り下げを行った。

遺　　構

幅約60㎝の畦畔が６条検出された。３号畦畔以外は、東西方向に延びるものと思われる。さらに地表下約100㎝で平安時代の水田跡が、地表下約145㎝で弥生時代終末期～古墳時代初頭の水田跡が確認された。

遺　　物

弥生時代終末期から古墳時代初頭の壺、甕、高坏、平安時代の壺、甕、坏、皿が出土し、その内８点を図化した。１は表面の摩耗が激しく、全体のハケの様子は不鮮明である。２の甕は外面縦方向に、内面横方向にヘラケズリが見られるが、これも摩耗により不鮮明である。３は鉢、４～８は坏である。１～３は古墳時代初頭、４～８が平安時代に属す（図２）。

ま　と　め

これまでの調査で集落跡が確認されているが、本調査で水田跡が確認されたことにより、居住域と生産域が存在していたことが明らかとなった。

現在、盆地周辺において弥生時代の水田跡の検出事例は増加している。前期では韮崎市宮ノ前遺跡、中期から後期前半では甲西町向河原遺跡、後期では甲西町大師東丹保遺跡、櫛形町村前東遺跡、八代町身洗沢遺跡、一宮町中尾条里遺跡が確認され、すでに弥生時代前期より盆地周辺において水稲耕作が行われていたことが判明している。

甲府市では、これまで弥生時代の遺跡の確認事例は少なく、今回の調査で確認された水田跡の存在によって市内における水稲耕作の様相を探る上で貴重な遺跡となった。また、畦畔についても古代の条里制との関連も考えられることから、今後の周辺調査の成果を待って検討していく必要があろう。（鈴木由香）

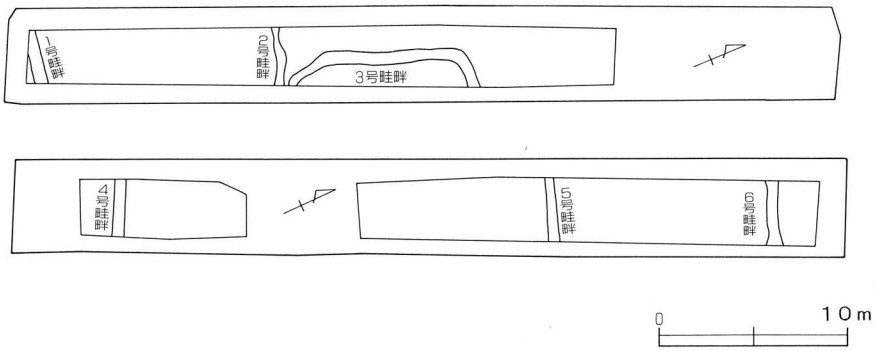


図１　朝気遺跡（Ⅶ次調査）トレンチ配置図

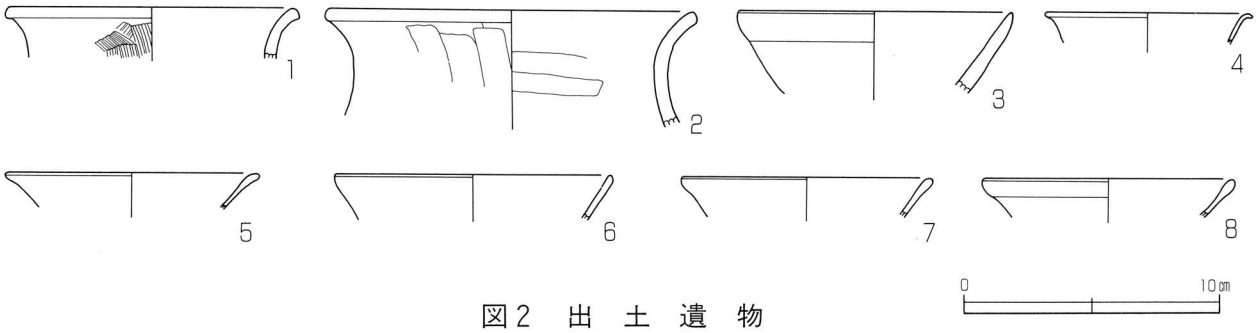


図２　出　土　遺　物

表１　朝気遺跡（Ⅶ次調査）出土遺物観察表

（　）復元値、単位(cm)

番号	種別 産地	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	土器	甕	(7.5)・－・－	口縁部～頸部	口縁部ナデ 外面ハケ	長石・石英・雲母	良	灰褐 7.5YR 6/2	
2	土器	甕	(9.6)・－・－	口縁部～頸部	口縁部ナデ 内外面ヘラ削り	石英	良	暗褐 7.5YR 3/4	
3	土器	鉢	(10.8)・－・－	口縁部～体部	ロクロ	石英・赤色粒子	良	明赤褐 5YR 5/8	
4	土器	坏	(8.0)・－・－	口縁部～体部	ロクロ	赤色粒子	良	赤褐 5YR 4/8	
5	土器	坏	(10.0)・－・－	口縁部～体部	ロクロ	石英・赤色粒子	良	橙 7.5YR 6/6	
6	土器	坏	(10.8)・－・－	口縁部～体部	ロクロ	石英・赤色粒子	良	赤褐 5YR 4/8	
7	土器	坏	(9.8)・－・－	口縁部～体部	ロクロ	石英・赤色粒子	良	赤褐 5YR 4/8	
8	土器	坏	(9.8)・－・－	口縁部～体部	ロクロ	石英・赤色粒子	良	赤褐 5YR 4/8	

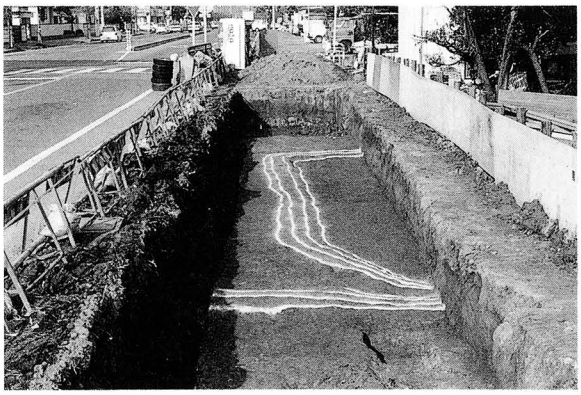


写真１　２・３号畦畔検出状況

写真２　作業風景

朝気遺跡におけるプラント・オパール分析

皇學館大学教授　外　山　秀　一

ここでは、朝気遺跡第Ⅶ次発掘調査において得られた試料のプラント・オパール定量分析の結果を簡単に報告する。

1．プラント・オパール分析

イネ科植物は、多量の珪酸を体内に吸収することで知られる。これらの珪酸は、特定の組織の細胞壁に集中して蓄積され、植物珪酸体（silica body）とよばれている。またこうした組織細胞のうち、機動細胞はイネ科植物の葉身にのみ存在し、植物種によりそれぞれ固有の大きさや形状を有する。これらの植物珪酸体はSio_2を主成分とする非晶質ガラス体であるため、土粒子の一部となって土壌中に長期間残存する。かかる植物起源の土粒子を、プラント・オパールとよんでいる。

こうしたプラント・オパールは、花粉化石にくらべて比重が高くその移動範囲も限られることから、分析の結果は、狭域の植生復原に適している。また、イネをはじめとする栽培植物の検出により、水田層や水田域あるいは畠地層や畠地域を認定することができ、農耕の起源およびその波及、農耕様式の解明といった農耕の諸問題が解明できる。そして、これらの結果と考古学の調査や地形分析、その他の植物化石の分析の成果を総合しかつ比較検討することで、土地の利用状況が明らかになる。

2．地層の堆積状況と試料の採取

試料採取地点の地層の堆積は、１ａ層～15ｂ層に細分される。各層の特徴は、右表のとおりである。

当遺跡は、濁川の支流のつくる自然堤防状の微高地から後背低地にあたり、全般的にはシルトや砂質シルトといった細粒物質で構成されている。また各層とも土壌化は顕著で、地表面として安定していた時間は比較的長かったものと考えられ、発掘調査では７ａ層上面において畦畔状の遺構が検出されている。

従って、ここでは旧地表面や旧耕地面を認定し、また土地条件の変化を検討するために、３ａ層～15ｂ層においてプラント・オパール定量分析用の試料を採取した。

なお、土壌層であるａ層ではその上部より、また非土壌層であるｂ層については、その下部より試料を採取した。

地　層	試料番号	層　　相	
1		暗茶灰色	シルト質細砂
2		暗茶灰色	シルト質細砂
3 a	1・2	暗茶灰色	シルト
4 a	3	暗 灰 色	シルト
5 a	4	黒 灰 色	砂質シルト
6 a	5	暗 灰 色	シルト質細砂
7 a	6	暗 灰 色	砂質シルト
8 b		暗 灰 色	細砂
9 a	7	暗 灰 色	砂質シルト
10 a	8	暗 灰 色	シルト質細砂
11 a	9	暗 灰 色	砂質シルト
12 a	10	暗 灰 色	砂質シルト
13 a	11	暗 灰 色	シルト
14 b	12	褐 灰 色	砂質シルト
15 b	13	暗 灰 色	シルト

3．分析の方法

定量分析法による試料の処理は、絶対乾燥－重量測定・仮比重測定－ガラス・ビーズの混入－ホモジナイザーによる分散－ストークス法による細粒物質の除去－乾燥の順序でおこない、オイキット液によりプレパラートを作成した。プラント・オパールの分類学的検

討は、400倍ないし600倍の偏光顕微鏡下で、主にイネ科の機動細胞プラント・オパールの形態分類に基づいておこなった。

検鏡の結果、検出されたガラス・ビーズ（約300個）とプラント・オパールとの比率により、試料１ｇあたりの各プラント・オパールの個数ならびに総数が求められる。さらに、イネ、ヨシ属、ウシクサ属ならびにタケ亜科の機動細胞プラント・オパールについては、地上部全ての重さ（乾物重）を層厚１cm・面積10ａあたりの検出量で示すことができる。

４．結果

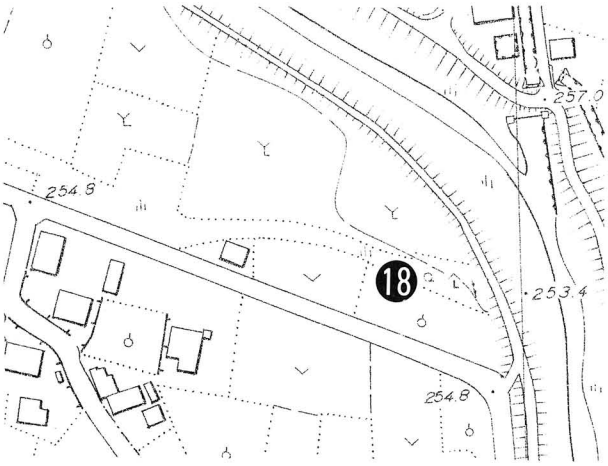
全般的に、プラント・オパールの検出数と量は多く、上位の層準になるに従い増加傾向を示す。また、それらの出現傾向は地層の堆積状況に対応し、シルト質細砂ではやや少ないが、シルトや砂質シルトになると検出量が増す傾向にある。そして、プラント・オパール分析の結果から、当遺跡の土地条件は細かな変化を経てきている。また、イネの機動細胞プラント・オパールの検出量も多く、畦畔状の遺構が検出された７ａ層層準においても安定した出現傾向を示す。

なお、同層上面や同層準からの遺物の検出をみていないが、畦畔状の遺構は約10ｍの間隔で並行して検出されている。当遺跡の現地裏面には条里型土地割が残存し、かかる結果は、甲府盆地における条里制の施工とその初源を検討する上においても、非常に重要である。条里区画内をさらに細分するようなこうした遺構は、高松市や東大阪市ですでに中世以前において検出されており、かかる遺構の詳細な時期の決定が今後注目される。さらに、畠としての土地利用も併せて考えねばならず、土地利用の時間的・空間的変化とその違いを検討する必要がある。

また、当遺跡は濁川支流のつくる自然堤防状の微高地から後背低地にかけて位置することから、小規模ではあるが河川による洪水の影響を幾度となく受けていたとみられる。その後は、比較的安定した土地条件のもとで、稲作の営まれたことが考えられる。

なお、今回の調査では出土土器が限られ、甲府盆地の稲作の開始期に迫ることはできなかった。しかしながら、濁川流域の遺跡の発掘調査では後背湿地から多量の弥生土器の出土をみていることから、盆地内でももっとも安定した土地条件を示す当遺跡の周辺地域は、水稲農耕を積極的に取り入れたところとみられ、初期水田址の発掘調査が今後大いに期待される。

外河原ヂクヤ遺跡



所　在　地　増坪町710－３番地
調査原因者　甲府市
調 査 原 因　最終処分場建設
調 査 面 積　53㎡
調 査 期 間　平成４年２月５日～３月20日
調査担当者　鈴木俊雄

調査の概要

本遺跡は甲府市南西部に位置し、標高約255ｍを測る低地部である。遺跡のすぐ東側を南流する濁川が市内南端で平等川と合流し、周辺は度重なる水害にみまわれた地域である。昭和60年度に甲府市教育委員会が実施した遺跡分布調査において、古墳時代から平安時代にかけての遺物が散布することが確認されている。

調査に際し、工事対象面積12.929㎡に対して試掘坑を５箇所設定した。その内４箇所を人力により１ｍ前後掘削し、簡易なボーリング調査を行った。

遺　　構

遺構は検出されなかったが、土層観察により低湿地独特の様相が確認できた。土質はシルト及び細砂を主として酸化鉄粒子を多く含んでいる。色調は青灰色、緑灰色、灰白色で含水率が高く、ＴＰ４からは激しい湧き水が見られた。

遺　　物

古墳時代初頭の土器、９世紀後半～10世紀後半に位置づけられる土師器、須恵器片、灰釉陶器片が出土した。図２に図化可能な遺物を掲載した。１は、口縁内面と櫛歯状の施文が施される壺である。２は、口縁部から胴部にかけてミガキ調整する壺である。３は高台坏で、４は口唇部が肥厚し、外面をケズリ調整する坏である。５は底部に「十」、６は外面に「物」の文字が記された墨書土器である。外面はケズリ、内面は放射状暗文が施される。

ま　と　め

遺構は確認されなかったが、平成13年度に実施した調査では古墳時代初頭の方形周溝墓、９世紀後半～10世紀の集落、12世紀～16世紀の水路・畝が検出された（甲府市教育委員会2003）。平安期の建物跡からは土錘が出土しており、周辺の河川で漁労生活を営んでいたことが推測される。

方形周溝墓については、これまで山梨県で確認されているものは微高地に形成されており、ヂクヤ遺跡のような低湿地帯での検出は、本県における方形周溝墓の様相を考える上で重要な成果が得られたといえる。確認された方形周溝墓は１基のみで、現段階では広範囲な墓域を形成していたか不明であるが、今後の周辺調査によって確認されることは予想される。

近年、東京都や埼玉県の低地部における方形周溝墓について再検討する動きが見られ、今後山梨県の低地部における事例が増加した場合、ヂクヤ遺跡を含めて再検討していきたい。

（鈴木由香）

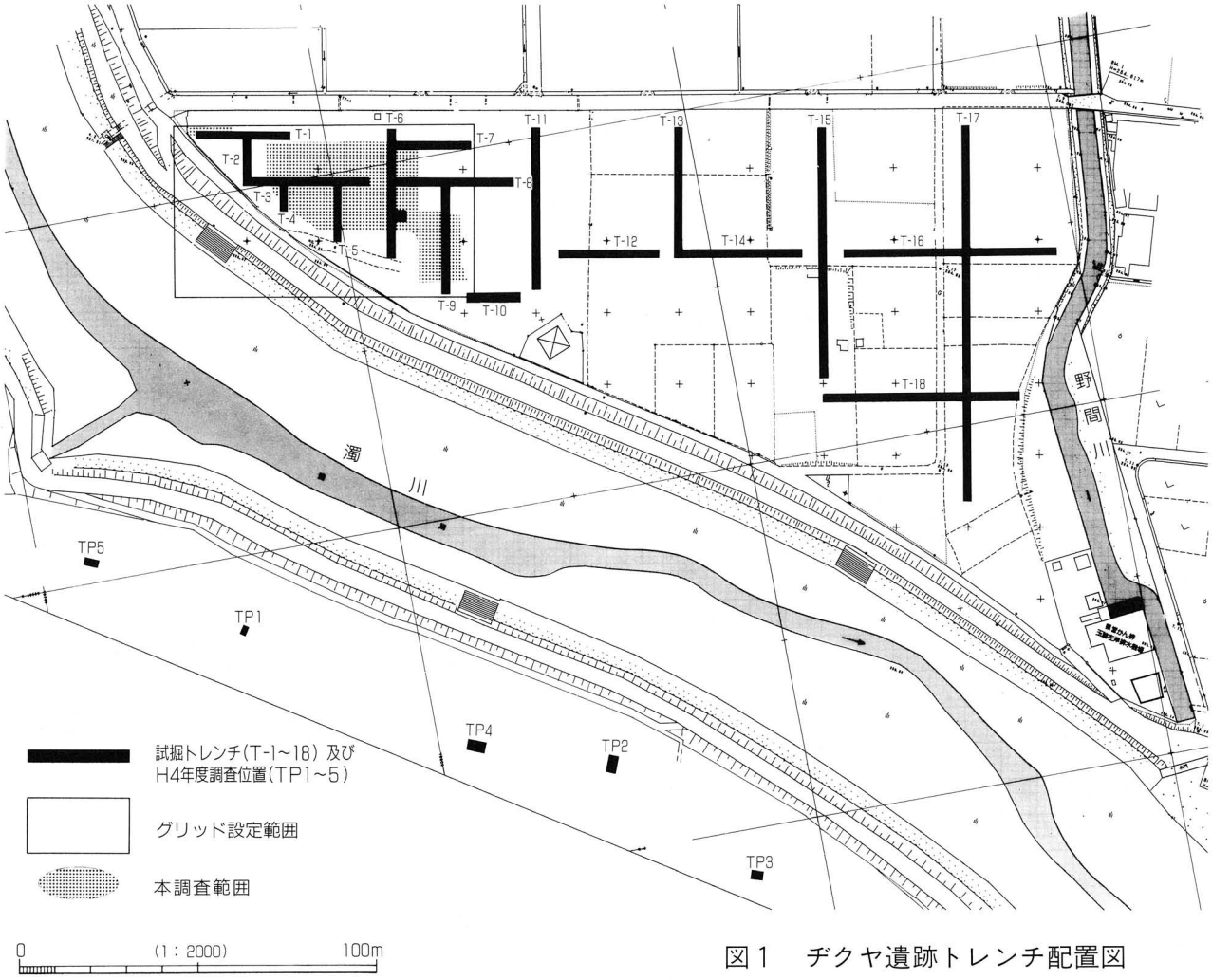


図1　ヂクヤ遺跡トレンチ配置図

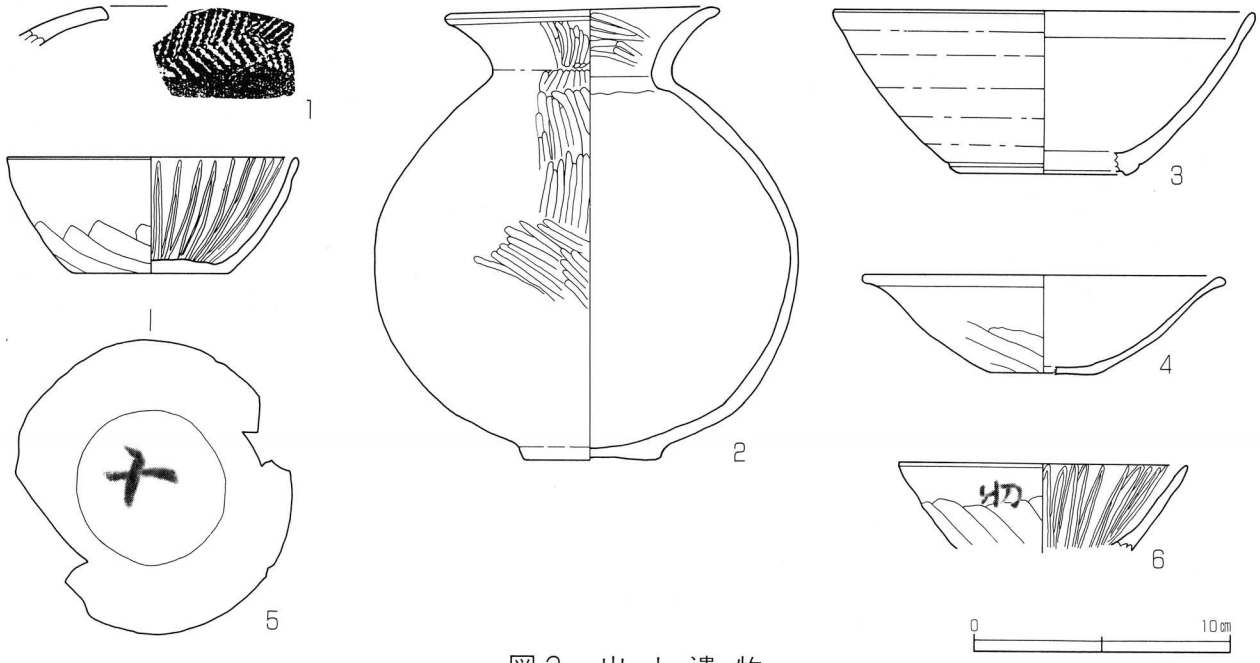


図2　出土遺物

表１　外河原ヂクヤ遺跡出土遺物観察表

（　）復元値、単位(cm)

番号	種別 産地	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	土器	壺	－・－・－	口縁部	櫛歯	長石・石英	良	－	弥生末～古墳初頭
2	土器	壺	10.8・17.8・5.4	完形	ミガキ	金雲母	良	にぶい橙 7.5YR 6/4	
3	土器	坏	(16.5)・(6.4)・(6.8)	口縁部～底部	ロクロ	密	良	にぶい橙 7.5YR 7/4	
4	土器	坏	14.0・3.8・4.1	口縁部～底部	ヘラ削り	密	良	にぶい橙 7.5YR 6/4	
5	土器	坏	11.4・4.6・6.1	口縁部～底部	内面暗文 外面ヘラ削り	密	良	にぶい橙 5YR 6/4	底部に「＋」の墨書
6	土器	坏	11.4・－・－	口縁部～体部	内面暗文 外面ヘラ削り	赤色粒子	良	にぶい橙 7.5YR 6/4	外面に「物」の墨書

写真１　試掘坑遠景

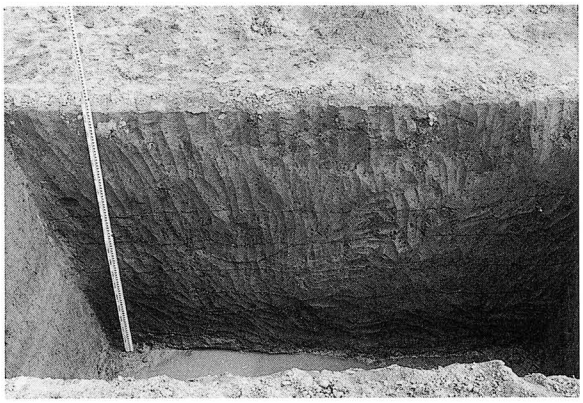


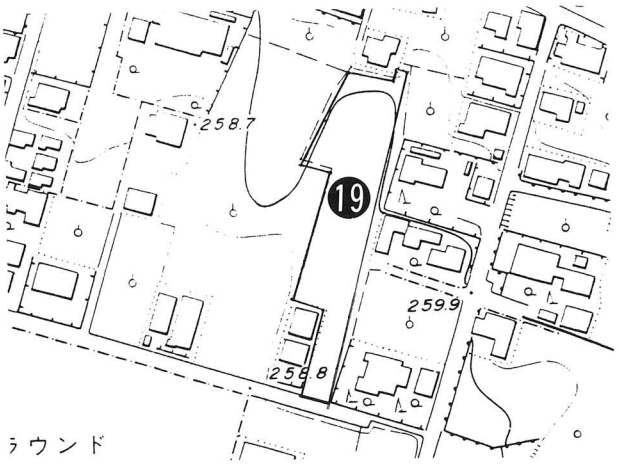
写真２　試掘坑セクション

写真３　墨書土器出土状況

写真４　作　業　風　景

亥の兎遺跡

調 査 位 置　甲府市東光寺三丁目３番地
調査原因者　甲府市
調 査 原 因　宅地造成
調 査 面 積　54㎡
調 査 期 間　平成４年６月５日～６月22日
調査担当者　伊藤正幸



調査の概要

亥の兎遺跡は、広義の高倉川扇状地上に位置し、標高258ｍを測る。南に向いた緩斜面にあり、葡萄の耕作が行われている。また、この地域には古墳時代から平安時代に至る遺跡が多く、本遺跡の東側約30ｍの場所にある東光寺東部公会堂の建設に際し、古墳時代後期の高坏が採集されている。また、北方約100ｍにある東光寺は、甲府五山として武田信玄から手厚い加護を受け、また武田信玄の長男義信を幽閉した寺として知られる。

今回この地に宅地造成の計画が出され、甲府市教育委員会では遺跡の保護のため試掘調査を実施した。

調査は２ｍ四方の試掘坑８個を基本とし、必要に応じて試掘坑を拡張しながら調査を実施した。

遺構・遺物

いずれの試掘坑からも遺構・遺物とも確認できなかった。

ま　と　め

本地点における遺構の確認面（地山）までが浅く、葡萄畑の耕作により削平された可能性が高い。　（伊藤正幸）

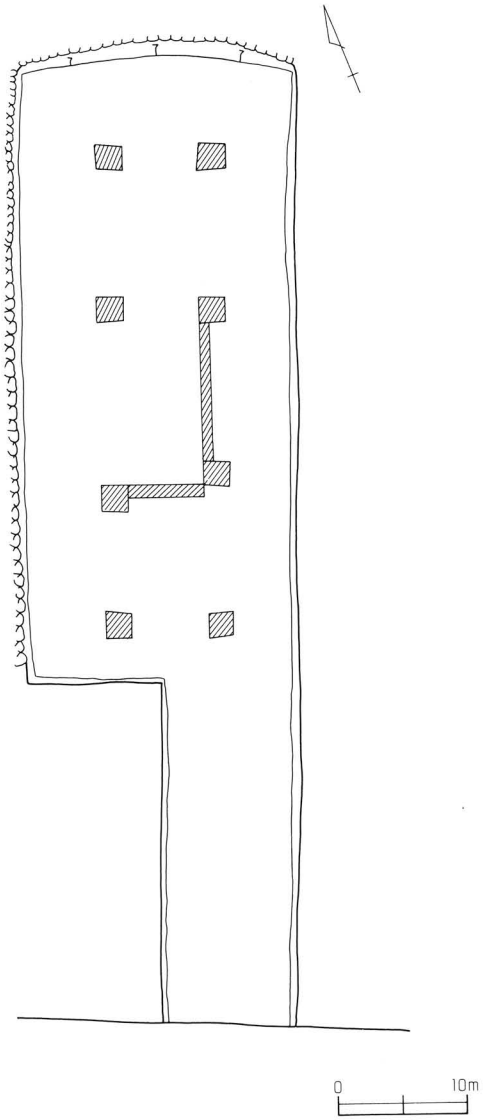
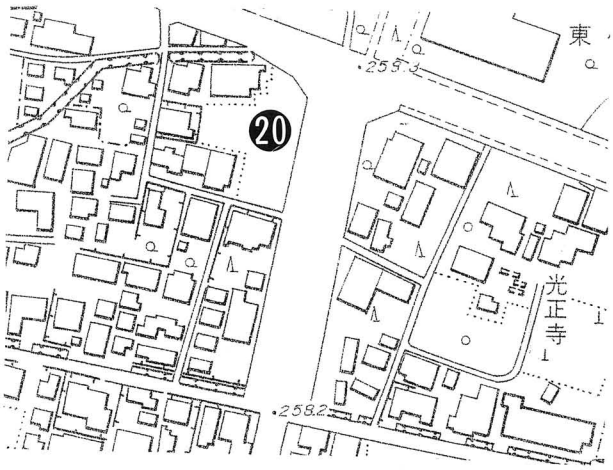


図１　亥の兎遺跡トレンチ配置図

朝気遺跡（Ⅷ次調査）



調 査 位 置　甲府市朝気三丁目4-16番地
調査原因者　個人
調 査 原 因　店舗建設
調 査 面 積　23.3㎡
調 査 期 間　平成４年７月29日～８月28日
調査担当者　伊藤正幸

調査の概要

朝気遺跡は、弥生時代から平安時代に至るまで、長期間にわたり営まれた遺跡である。これまでに東小学校の校舎増築や市道の拡幅工事に伴い７次の調査を繰り返しており、それらの調査によって低地における遺跡の造営に対し多くの資料を提供している。

今回の調査地は東小学校の南西側、標高258ｍ程に位置する。申請地は空き地になっており２ｍ四方の試掘坑を６箇所設定し、必要に応じて拡張しながら調査を実施した。

層　　序

客土の厚さが地点により35～80㎝と大きく異なる。これは植木畑として利用されていたため、かなりの攪乱がなされ、表土の厚さの違いに現れたものであろう。客土以下は比較的安定しているもの、平安時代の遺物を若干含んだ第５及び第６試掘坑は、１ｍ近くまで攪乱されている可能性が強い。

第２試掘坑において古墳時代の遺物は、黒色シルト層中から検出され、現地表面からの深さは２～2.2ｍを測る。

遺構・遺物

各試掘坑とも遺構は検出されなかった。

遺物としては、第２試掘坑から古墳時代前期の遺物がまとまって検出された。検出された遺物は壺・台付甕・高坏などで、このうち壺１点と台付甕はほぼ完形品で、他は壺の上半部のみ残存が２点、頸部以下残存が２点となっている。また高坏はすべて脚部のみが検出された。いずれも地表下２～2.2ｍの深い位置からである。

一方、第３試掘坑から検出された坏の口縁部は平安時代後期に位置付けられるが、同層中には古墳時代前期の土器も混ざっていたため、流れ込みと思われる。

（伊藤正幸）

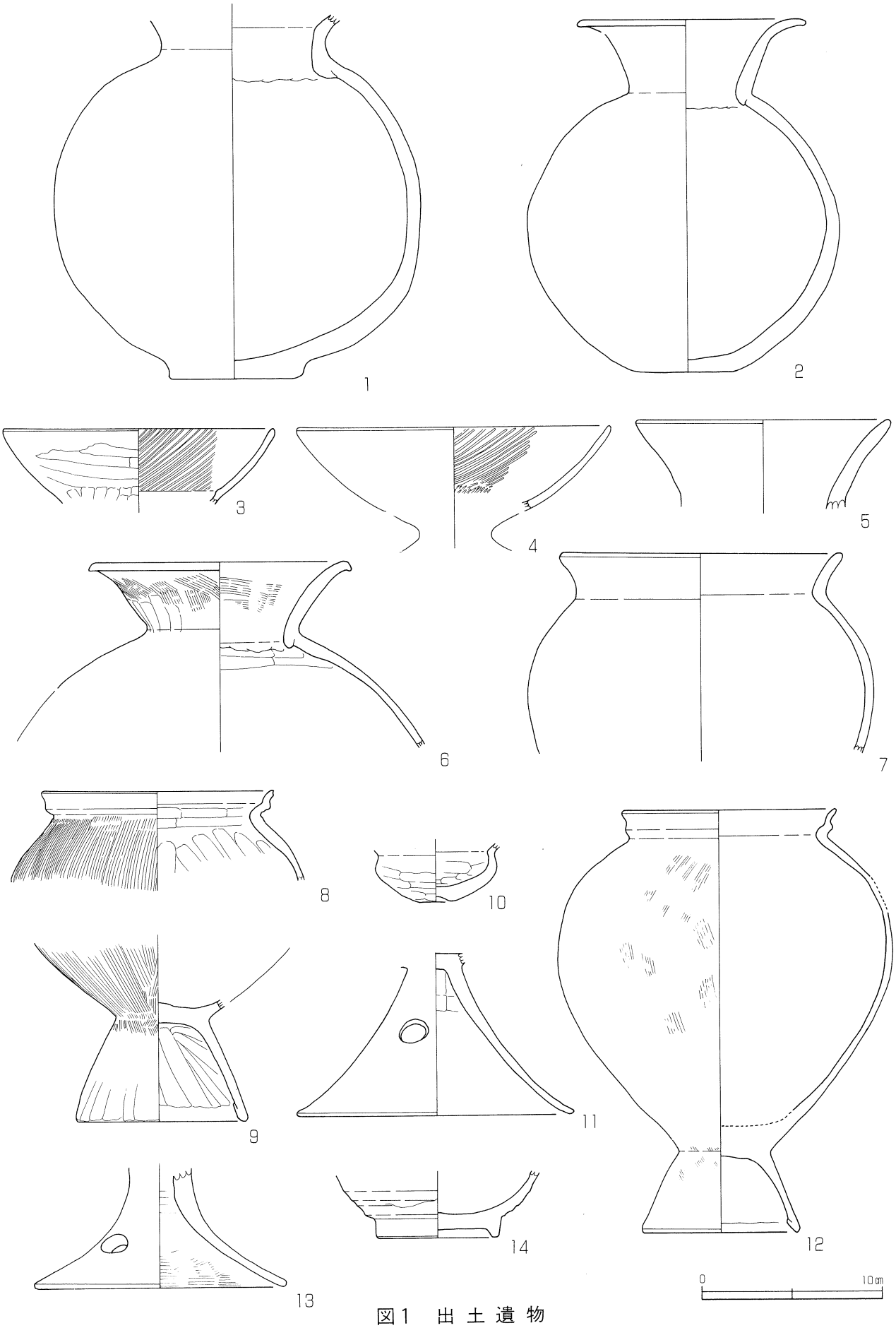


図1　出土遺物

表１　朝気遺跡（Ⅷ次調査）出土遺物観察表

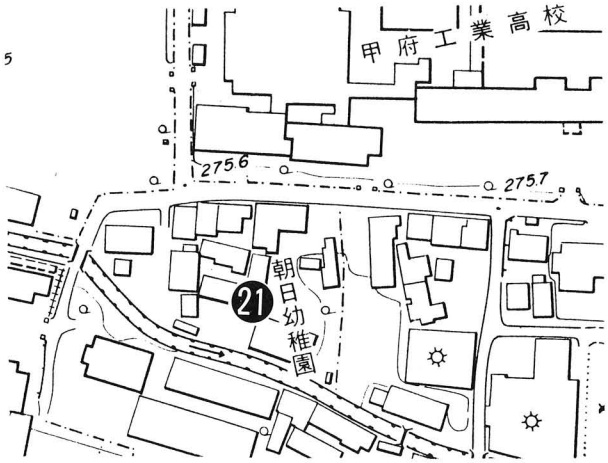
（　）復元値、単位(cm)

番号	種別 産地	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	土器	壺	－・－・7.7	頸部～底部	内外面ミガキ	長石・石英	良	橙 5YR 6/6	
2	土器	壺	(12.2)・(19.7)・5.7	口縁部～底部	内外面ミガキ	長石・石英	良	橙 5YR 6/6	
3	土器	高坏	(15.2)・－・－	口縁部	内面暗文 外面ヘラ削り	金雲母	良	にぶい褐 7.5YR 6/3	
4	土器	坏	(17.6)・－・－	口縁部	内面暗文 外面ナデ	金雲母	良	橙 7.5YR 7/6	
5	土器	壺	(14.0)・－・－	口縁部	ナデ	長石・金雲母	良	内)灰黄褐 10YR 6/2 外)にぶい黄橙 10YR 6/4	
6	土器	壺	(14.6)・－・－	口縁部	ハケ	長石・石英・金雲母	良	にぶい橙 5YR 6/4	
7	土器	壺	(15.9)・－・－	口縁部～胴部	ナデ	長石・石英	良	橙 5YR 6/6	
8	土器	S字甕	(12.9)・－・－	口縁部～胴部	内面指頭痕 外面ハケ	金雲母・長石	良	内)にぶい橙 7.5YR 6/4 外)にぶい黄橙 10YR 7/3	
9	土器	S字甕	－・－・9.8	底部	ハケ・ヘラナデ 脚部内面指頭痕	金雲母・長石	良	内)橙 5YR 6/6 外)灰褐 7.5YR 5/2	
10	土器	小型碗	－・－・(1.6)	胴部～底部	内面指頭痕 外面ヘラ削り	長石・金雲母	良	橙 5YR 6/6	
11	土器	高坏	－・－・(15.6)	脚部	内面ヘラナデ 外面ミガキ	金雲母	良	橙 5YR 6/6	
12	土器	S字甕	11.9・23.7・8.7	口縁部～底部	外面ハケ	長石・石英・金雲母	良	内)灰褐 7.5YR 4/2 外)橙 5YR 6/6	
13	土器	高坏	－・－・(14.2)	脚部	内面ハケ 外面ミガキ	金雲母・長石	良	橙 7.5YR 6/6	
14	陶器	碗	－・－・(7.0)	底部	施釉	密	良好	－	

写真１　調査区遠景

写真２　遺物出土状況

塩部遺跡



調 査 位 置　甲府市塩部一丁目431番地他
調査原因者　学校法人朝日幼稚園
調 査 原 因　朝日幼稚園建設工事
調 査 面 積　60.0m²
調 査 期 間　平成４年９月７日～９月９日
調査担当者　信藤祐仁

調査の概要

工事予定地に、東西方向12ｍ×２ｍ、南北方向20ｍ×２ｍの東南部でＬ字型に交差する２本の試掘トレンチを設定した。重機により掘削した後、人力によって埋蔵文化財の有無を確認した。

ま　と　め

調査区の中からは、１点の土器も発見されなかった。広い範囲を占める塩部遺跡は、南北２個所の遺跡に分けられる可能性が高いと思われる。　（信藤祐仁）

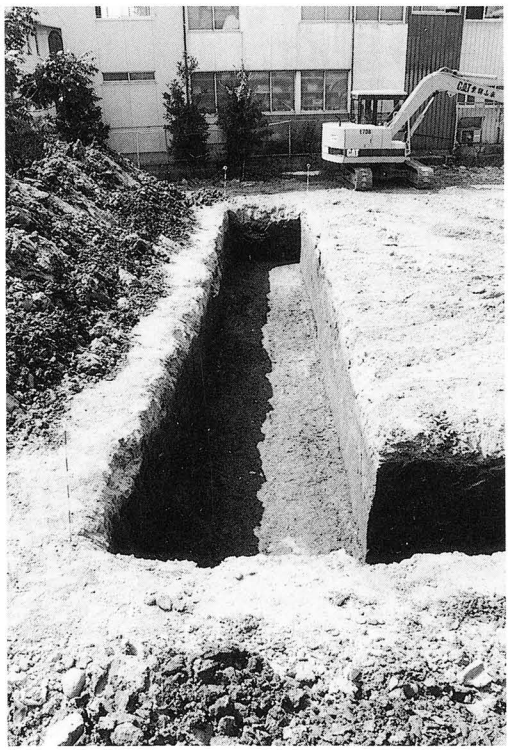


写真１　南北トレンチ

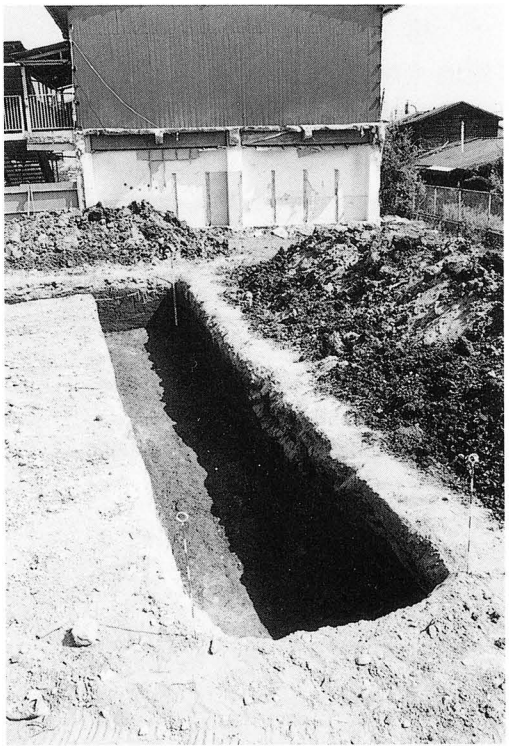
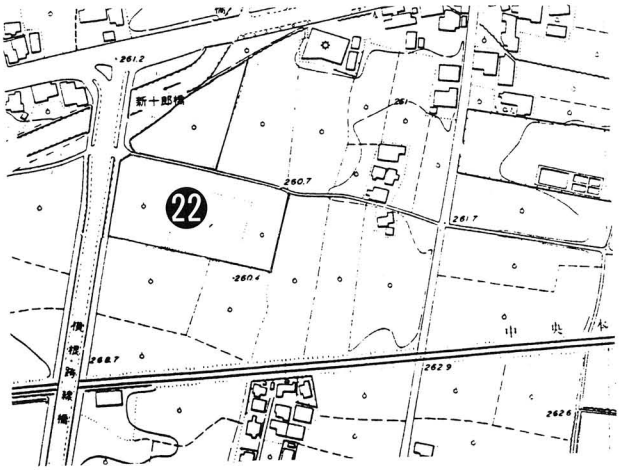


写真２　東西トレンチ

大坪遺跡



調査位置　甲府市横根町字大橋、桜井町字角田
調査原因　老人保健施設建設
調査面積　232㎡
調査期間　平成４年９月16日～10月14日
調査担当者　伊藤正幸

調査の概要

昭和50年３月、国道140号線の改修工事の際に、工事現場から多量の土器が発見された。山梨県遺跡調査団は、この工事及び旧国道20号線を結ぶ跨線橋建設工事に伴い、発掘調査を実施したが、この調査によって溝状遺構、土器集中遺構及び焼土等を検出し、同時に平安時代を中心とする多量の土師器を確認した。この調査を契機に周辺の広範囲を大坪遺跡とし、周知の埋蔵文化財として登録した。

今回この地に老人保健施設の建設計画が示され、計画地域が大坪遺跡の範囲内であることから、甲府市教育委員会では遺跡の規模、包蔵地までの深さ、発掘調査の期間及び経費の算出を目的に確認調査を実施した。

調査対象地7470㎡と広大であったが、葡萄畑として使用されていたため、２ｍ×２ｍの試掘坑58箇所を設定し、ミニバックボウで荒掘りを行った後、人力で精査した。

層　　序

調査地全域にわたり表土（耕作土）の堆積は比較的薄く、15～20㎝程度である。したがって、葡萄の植付けあるいは葡萄棚の設置の際に、遺物が表面に現れている地点が多い。

耕作土以下の層序は、褐色土層、黄褐色土層、黒褐色土層、茶褐色土層の順に堆積し、このうち褐色土層が遺物の包含層にあたる。また、北側の調査区では茶褐色土を掘り込んで溝状遺構が確認でき、また黄褐色土層の上部にしまりの強い赤褐色土層が認められる箇所もある。対象地東側では、耕作土以下が砂層になり、湧水が激しい。

遺　　構

壁面のセクションにより、住居跡及び溝跡を確認した。

住居跡は調査区内北側に２軒確認され、１軒はカマドにより、また１軒は貼床により判断した。またこれら２軒の住居跡の西側には断面がＶあるいはＵ字を示す溝跡が確認できた。いずれの溝跡も茶褐色土層を掘り込み、黒色の有機質土が落ち込んでいる。

遺　　物

古墳時代から平安時代にいたる土師器及び須恵器並びに奈良時代の平瓦が出土した。土師器は坏、皿、高坏に、また須恵器は高台付坏、甕、壺にそれぞれ器形を分類することができる。

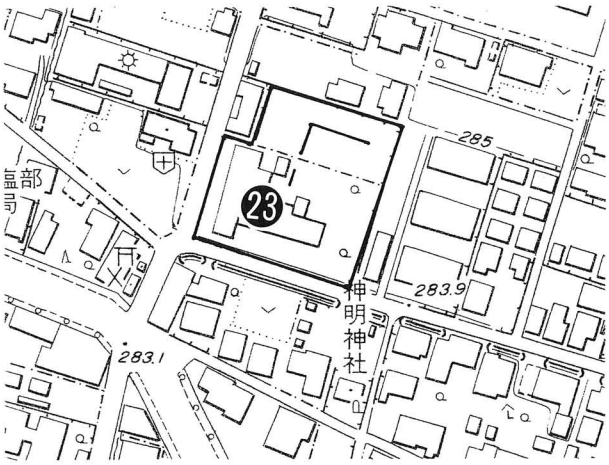
出土遺物の大半は溝跡の北東側から検出されていて、それ以外の地点では小破片が認められる程度で、散布も散漫であった。

ま　と　め

市内東部一帯は弥生時代から平安時代に至る遺跡の分布が顕著である。今回の調査では対象地東部と西部とで遺構・遺物の散布に差異が確認でき、また土層にも違いが現れた。このことは、複雑な微地形の変化と捉えることができる。本遺跡の北方に位置する積石塚古墳群の存在とも合わせて、空間的な土地利用を検討する際にも微地形を読み取る事が必要で、今後の調査の増加に期待したい。　（伊藤正幸）

図1　試掘坑配置図

緑が丘一丁目遺跡



調 査 位 置　甲府市緑が丘一丁目114、112-2
調査原因者　甲府市
調 査 原 因　東京電力独身寮改築工事
調 査 面 積　63.5㎡
調 査 期 間　平成４年12月10日～12月14日
調査担当者　信藤祐仁

調査の概要

寮の建物北東側にあるテニスコートの長軸に沿って、東西方向20ｍ×幅２ｍの試掘坑Ａトレンチを設定した。このＡトレンチ西端から南に直交させて「Ｌ」字形になるように幅２ｍのＢトレンチを設定し、テニスコートの外の延長上に、長さ５ｍ×幅1.5ｍのＣトレンチを設定した。

重機によって表土とその下のアスファルトを取り除いた後、人力によって埋蔵文化財の有無及び土層の堆積状況を確認した。

Ａトレンチ内は、表土10cmがテニスコート面となる山桂を固めた層で、その下は10cmのアスファルト舗装になっていた。この下が本来の土層で、Ｂトレンチと交差する４㎡部分に深掘りをかけて、層序を観察した。第３層は、灰色砂層で拳大の川原石が混じる。第４層は褐色土層で、第５層が不透水層であるために３層との間にできた鉄分堆積層である。第５層は暗灰褐色シルト層で、上面には煉瓦も含まれる。第６層は灰褐色シルト層で、第７層が黄褐色の粗い砂層である。Ｃトレンチは、５層までほぼＡ・Ｂトレンチと同じであるが、６層は暗褐色の粘質土層で縄文土器の包含層となっており、７層は黒褐色の礫混土層である。

ま　と　め

遺構　各試掘坑とも遺構は検出されなかった。

遺物　Ｃトレンチ６層から、縄文時代の遺物が確認された。２は縄文土器の底部であり、表面は磨耗が激しいが、胎土に長石、石英とともに金雲母を多量に含んでいる。図示できなかったが、この他に十数点同様の胎土をもつ小破片がある。このうちの一部に半載竹管の集合条線が観察され、胎土とともに考慮すると縄文中期初頭あるいは前葉のものと推測される。その他、黒曜石１点がある。

１はＡトレンチの５層上部から出土した硯である。同層中には煉瓦も見られるが、江戸中期の飴釉碗の小破片もあり、近世以降のものと推定される。

（信藤祐仁）

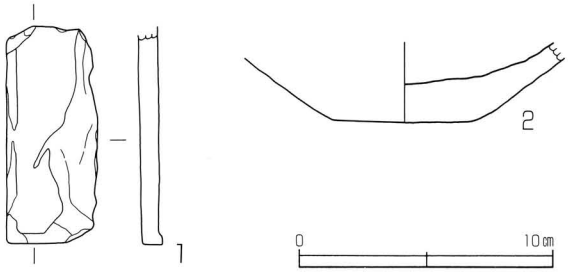


図１　出 土 遺 物

表1　緑が丘一丁目遺跡出土遺物観察表

( )復元値、単位(cm)

番号	種別 産地	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	石製品	硯	長さ　厚さ (8.0)・0.7・－	－	－	－	－	－	
2	土器	甕	－・－・(5.6)	底部	ナデ	長石・石英・金雲母	良	明黄褐 10YR 7/6	

写真1　調査風景

写真2　南北トレンチ北西端土層推積状況

写真3　東西トレンチ(西側)

写真4　南北トレンチ(北側)

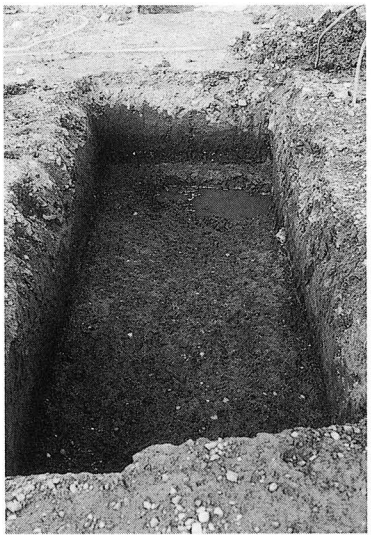
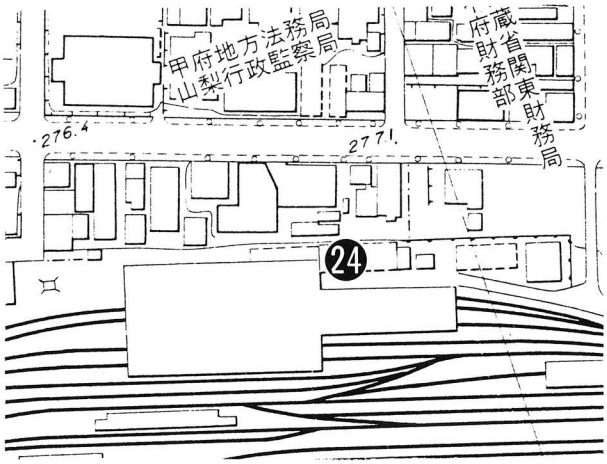


写真5　南北トレンチ(南側)

甲府城関係遺跡

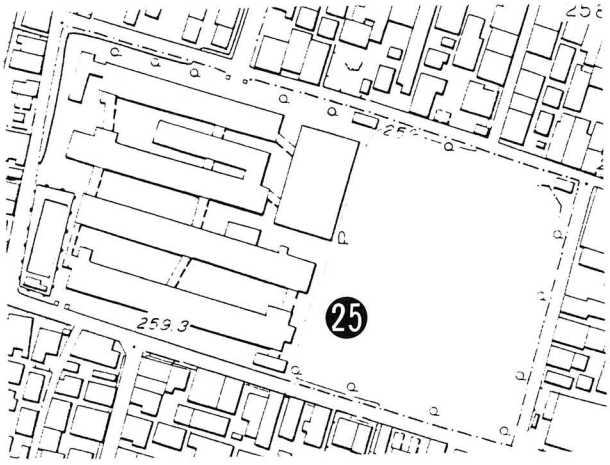


調 査 位 置　甲府市丸の内一丁目１番地内
調査原因者　甲府市
調 査 原 因　新都市拠点整備事業
調 査 面 積　1,447.0㎡
調 査 期 間　平成５年１月20日～３月27日
調査担当者　信藤祐仁

調査の概要

旧国鉄貨物ヤード地内は、江戸時代中期には家老柳沢保格等の屋敷地であった。この地域内に東西南北３本づつの調査トレンチを設定し調査したところ、武家屋敷に関係する遺構・遺物が確認されたので、平成５・６年度に本調査を実施した。　（信藤祐仁）

甲府市立図書館予定地



調 査 位 置　甲府市城東一丁目12番地
調査原因者　甲府市
調 査 原 因　甲府市立図書館建設工事
調 査 面 積　60.0㎡
調 査 期 間　平成５年４月12日～４月13日
調査担当者　信藤祐仁

調査の概要

予定地は旧琢美小学校東半の校庭部分にあたり、南北に長い長方形の敷地であるので、東と西に10ｍ×２ｍ、北と南に５ｍ×２ｍの試掘トレンチ各本を設定した。重機により掘削した後、人力によって埋蔵文化財の有無を確認した。

ま　と　め

調査区の中からは、南トレンチの第２層中から時代不明の土器小片２点が出土した。なお、東トレンチから、昭和20年７月６日に見舞われた甲府空襲時における、M69焼夷弾とそれを束ねていたＥ46集束焼夷弾が発見された。　（信藤祐仁）

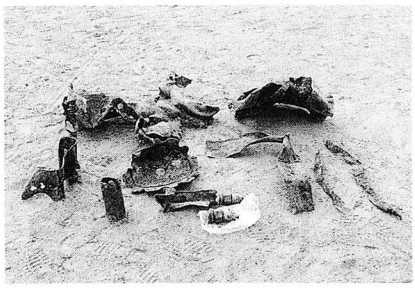


写真１　発見された焼夷弾等

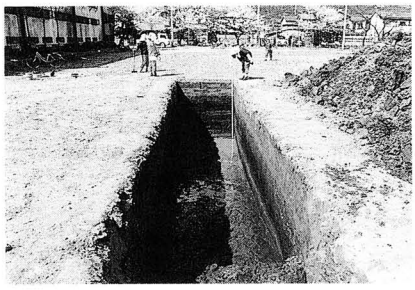
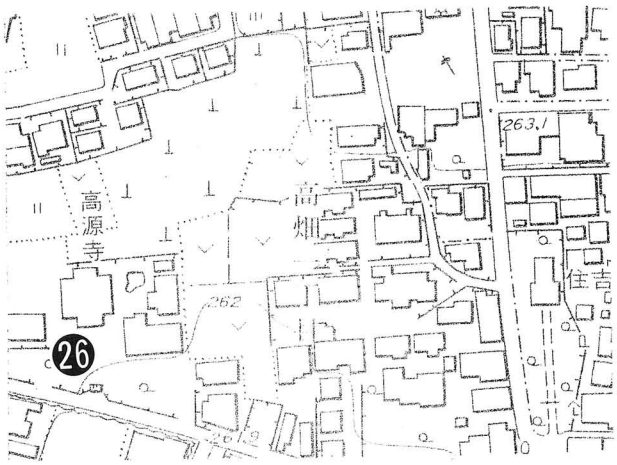


写真２　西側トレンチ

高源寺経塚



調査位置　甲府市高畑一丁目356-1番地
調査原因者　高源寺
調査原因　境内整備
調査面積　4.0㎡
調査期間　平成５年４月27日～５月13日
調査担当者　信藤祐仁

調査の概要

住職であった齋藤典男氏（当時甲府市文化財調査審議会会長）から、経塚の発掘調査依頼があり、齋藤氏の協力を得て調査を行った。石碑の移転に伴い、経碑の下を２ｍ×２ｍの範囲で発掘調査を実施した。

遺　　構

経碑の基台直下に、加工石を方形に組んだ区画があった。安山岩の上面を平らになるよう粗く加工し、死角となる下側の調整は粗略である。上面幅は25cm前後であるが、長さは一様でない。下層に80cm西にずれて、経石の埋納が検出された。外側に川原石を方形に配し、内側に経石を納める。外縁は東側で６石、南側で５石、北側で１石が確認できた。西側にも１石あるが、経石の上に乗り外縁石ではない。経石の集中部分は80cm×120cmの範囲で、約10cmの厚さであった。経石は５～10cm大の川原石であり、集中するものの土が混在する。経石埋納部分は、全体的に根の進入がみられ、特に西半が攪乱を受けていた。経碑はその下の経石埋納部分と位置的にずれがあり、調査時点の段階ですでに東側に移動させられていたことが判明した。

遺　　物

経石は約4,000点出土し、うち1,750点に墨書が認められた。墨書は平坦面に書かれるものが多いが、不定形な石の側面に書かれるものもある。「間」「頓」「出」などの一字一石経、一石の両面に「性」「之」を記したものや「○種」「如○」などの多字一石経もある。経碑の銘文から、宝暦七年（1757）法華経を書写して埋納したものと思われる。

埋納部分の上面と東側から、土師質皿型土器、鉄釉碗、草花文が描かれた染付碗が各１点づつ出土しているが、過去の経碑移転に際しての混入物である。

経　　碑

経碑の形態は、角柱の塔身に唐破風付の笠を置いたもので、笠の上に宝珠が乗せられる。塔身の下には３段の方形基台がある。最下段は５石で方形に組まれる。粗い調整で基台下の方形に区画した石と同じであり、上二段は塔身と同じ調整である。

塔身の正面（東面）には「南無日蓮大菩薩」と刻まれ、文字を赤色に塗布している。北面に「奉書寫石經全部成就」、南面に「後五百歳中廣宣流布」、背面(西面)に「寶暦七年丁丑稔八月十三日　光照山二十一世日住営建焉」と二行で刻される。第21代住職の日住上人が、妙法蓮華経（法華経）を書写し、後世まで法華経が広く流布することを祈願し、建立した石塔であることがわかる。

笠は入母屋造の屋根の正面に唐破風が付き、兎毛通の唐破風の懸魚は中央に星形、左右に唐草文を陽刻し赤彩される。鬼板部分は菊の花弁が半円形に８枚彫刻されている。

宝珠は５枚の蓮弁で構成される請花と、中央部に最大径を持つ宝珠一石で表現される。

（信藤祐仁）

図1　出土遺物

表１　高源寺経塚出土遺物観察表

（　）復元値、単位(cm)

番号	種別 産地	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
12	土器	かわらけ	(7.3)・(1.5)・(4.2)	口縁部～底部	ロクロ 底部回転糸切り	長石・石英・金雲母	良	にぶい橙 7.5YR 7/4	
13	陶器	碗	(11.6)・ －・ －	口縁部～底部	鉄釉	密	良	－	
14	磁器	碗	(8.0)・(4.5)・(2.8)	口縁部～底部	染付	緻密	良好	－	

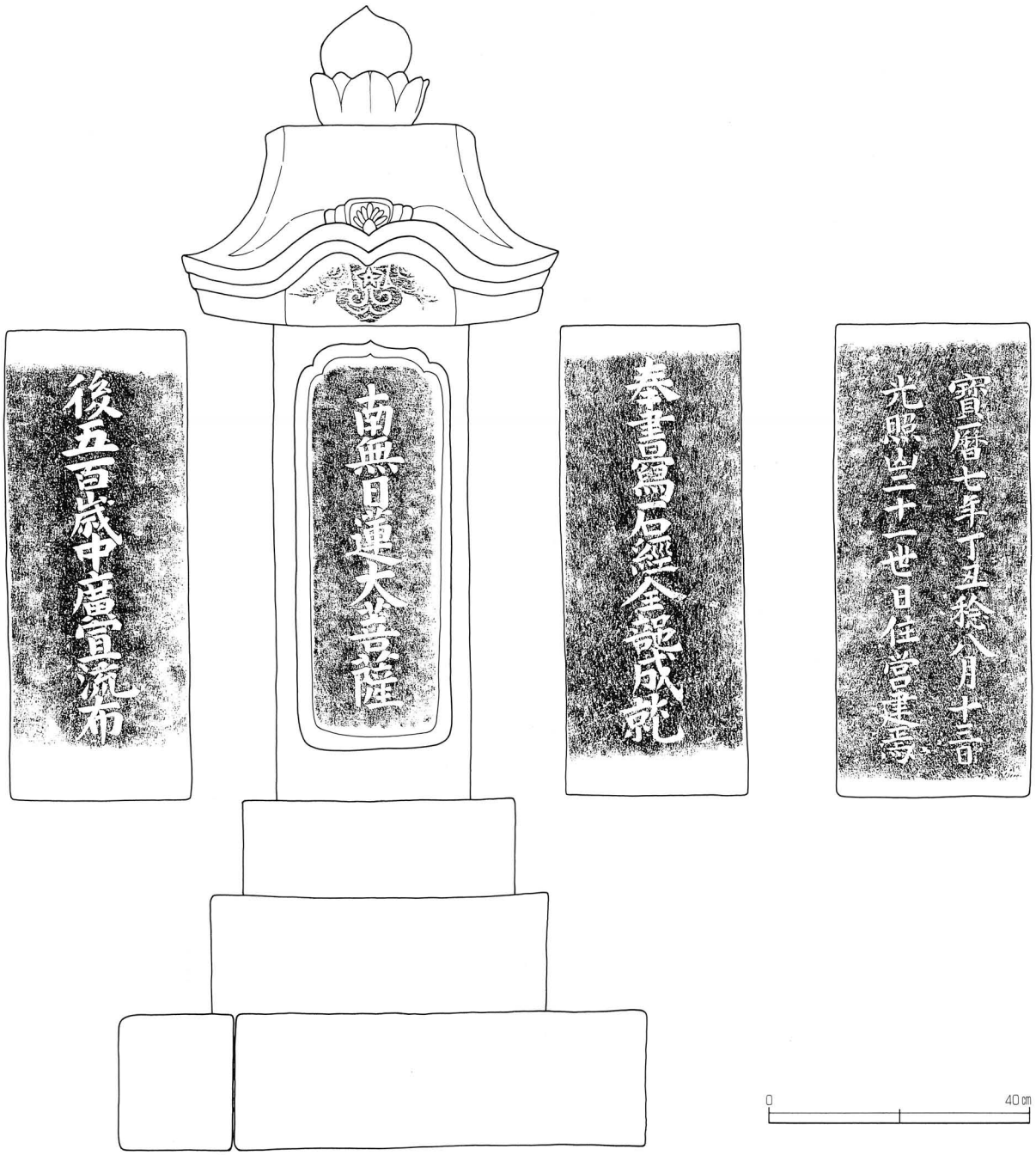


図２　供養塔実測図

写真１　経碑正面

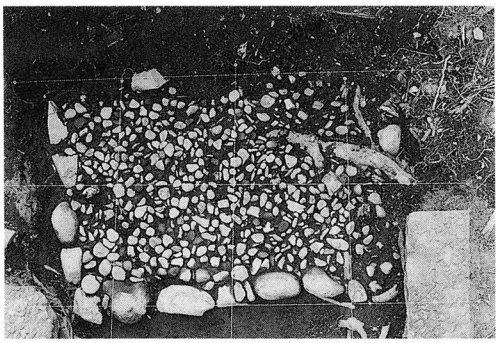


写真２　経石出土状況

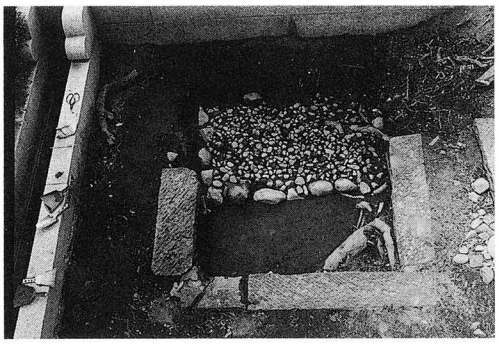


写真３　経石埋納遺構、上部

写真４　経石埋納遺構、下部

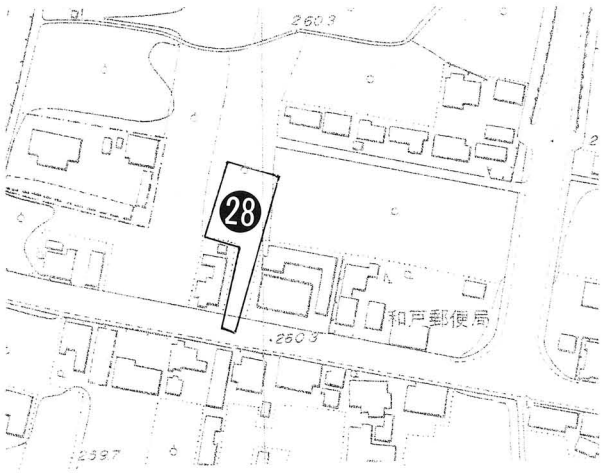
酒折縄文遺跡

調査位置　甲府市酒折三丁目1309番地
調査原因者　個人
調査原因　集合住宅建築工事
調査面積　12.0㎡
調査期間　平成５年９月28日
調査担当者　信藤祐仁

ま　と　め

集合住宅予定の北と南に４ｍ×1.5ｍの試掘トレンチ２本を設定し、重機により掘削した後人力で掘り下げたが、遺構・遺物ともに発見されなかった。　（信藤祐仁）

大坪遺跡



調 査 位 置　甲府市横根町反田451-3・4、453-2番地
調査原因者　個人
調 査 原 因　集合住宅建設工事
調 査 面 積　11.0m²
調 査 期 間　平成５年11月11日
調査担当者　信藤祐仁

調査の概要

大坪遺跡は、跨線橋建設地点の調査で土師器焼成遺構が検出され、十郎川改修工事地点の土器廃棄場所から「甲斐国山梨郡表門」の刻書土器が発見された平安時代の土器生産遺跡として著名である。

集合住宅調査予定地に、11ｍ×１ｍの南北方向の試掘トレンチを設定した。重機により掘削した後、人力で埋蔵文化財の有無を確認した。

写真１　調査トレンチ

ま　と　め

調査区は元水田であり、その後葡萄畑にかわっている。調査区の土層は第１層褐色粘質土層　耕作土12～15cm、第２層　黄褐色土層　２～７cm　水田の床土、第３層褐色砂質土層　20cm、第４層　黒褐色粘土層（黄褐色砂混在）20cm、第５層　黒褐色粘土層　10cm、第６層　黒色粘土層　地表下約75cm以下である。

調査区の北端から、弥生時代後期の壺破片が検出された。土器は幅広有段口縁壺の口縁部であり、内側には横方向、外側の有段口縁部は横方向、頸部上端部分は縦方向のハケ調整が施されている。口縁部には、縦に２本と３本の断面三角形の棒状浮文が貼り付けられている。

（信藤祐仁）

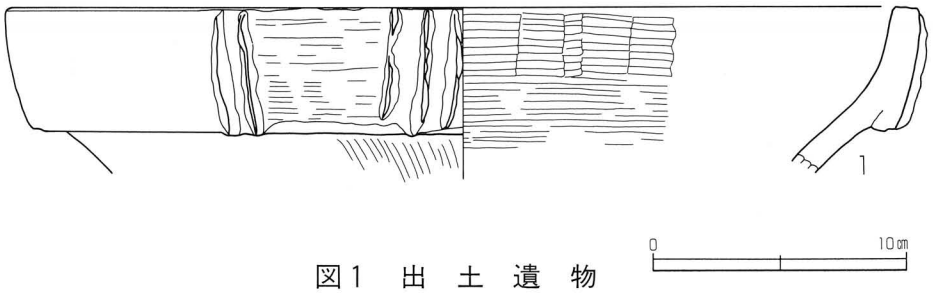


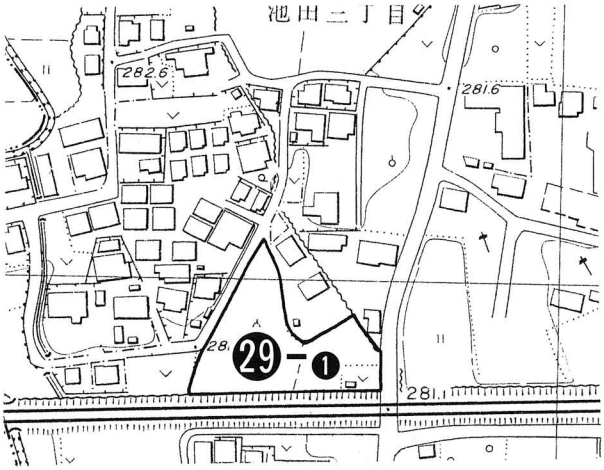
図１　出　土　遺　物

表１　大坪遺跡出土遺物観察表

（　）復元値、単位(cm)

番号	種別 産地	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	土器	壺	(36.0)・－・－	口縁部	ハケ 口縁部棒状浮文	長石・金雲母	良	にぶい黄橙 10YR 7/4	

豆田遺跡（1）



調 査 位 置　甲府市池田三丁目271-1番地他
調査原因者　個人
調 査 原 因　宅地造成
調 査 面 積　11.25㎡
調 査 期 間　平成５年12月８日～12月９日
調査担当者　信藤祐仁

調査の概要

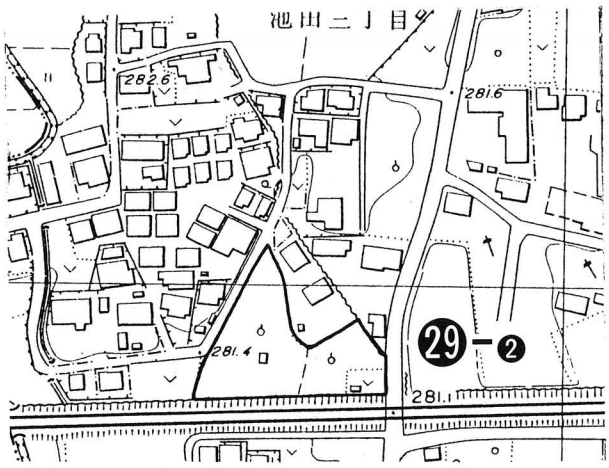
中央線の線路に面した葡萄園に宅地造成が計画されたので、1.5ｍ×1.5ｍの試掘坑５箇所を設定し、手掘りで埋蔵文化財の有無を確認した。

ま　と　め

５箇所の試掘坑は、地表下175㎝～195㎝まで掘り下げた。調査区内の土層はそのほとんどが、砂層または砂質土層で荒川の氾濫源であったと推定される。西端の試掘坑から、上流からの流れ込みと思われる平安時代の土師器小片と、近世以降の磁器底部各１点が発見されたのみである。

（信藤祐仁）

豆田遺跡（2）



調 査 位 置　甲府市池田三丁目199-1番地他
調査原因者　個人
調 査 原 因　集合住宅建設
調 査 面 積　4.5㎡
調 査 期 間　平成６年１月17日
調査担当者　信藤祐仁

調査の概要

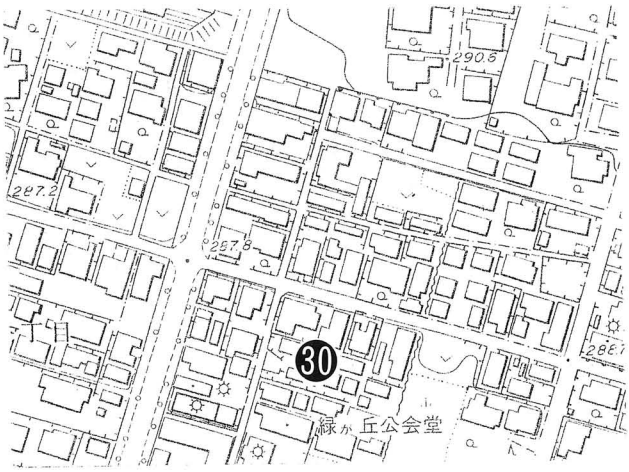
前記の宅地造成地の道路を挟んで東側、マンション建設工事予定地に1.5ｍ×1.5ｍの試掘坑２箇所を設定し、手掘りで埋蔵文化財の有無を確認した。

ま　と　め

試掘坑は２箇所とも地表下170㎝まで掘り下げたが、すべて砂層または砂礫層であった。東側の試掘坑、地表下50㎝の地点の第４層から、磨耗した時期不明の土器小片２点が発見されたのみであった。

（信藤祐仁）

緑が丘一丁目遺跡



調 査 位 置　甲府市緑が丘一丁目149番地他
調査原因者　個人
調 査 原 因　住宅宅地造成
調 査 面 積　13.5㎡
調 査 期 間　平成５年12月13日～12月21日
調査担当者　信藤祐仁

調査の概要

住宅の建設予定地内に東西方向の調査区を設定し、重機で表面のアスファルトを除去した後、手掘りで埋蔵文化財の有無を確認した。

ま と め

予定地は、かつて存在していた住宅が火災で焼失し、駐車場になっていた場所である。調査区の土層は、第１層　アスファルト　５cm、第２層　灰褐色砕石層　10cm、第３層　灰褐色土層　30～40cm　旧建物の火災の焦土や灰・瓦礫などが混ざる。第４層　黒褐色粘土層　30～40cm、第５層　黒褐色粘土層　30～40cm、第６層　黒褐色粘土層　地表下90cm以下で、西側では褐色味が強い。遺構は検出されず、遺物は第４・５層からの出土である。

（信藤祐仁）

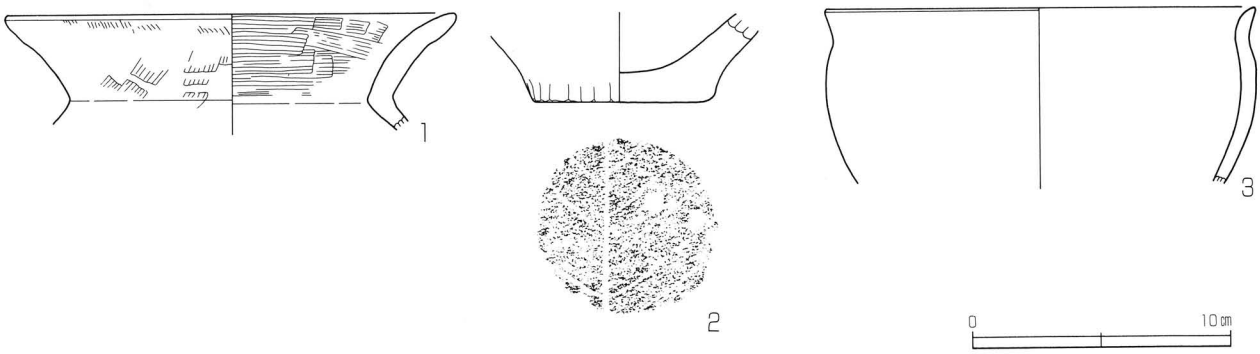


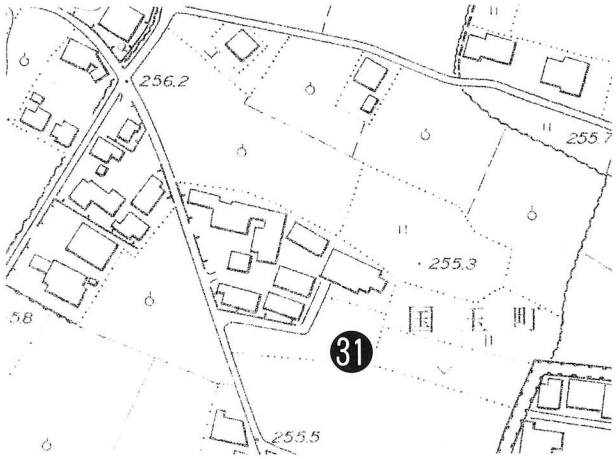
図１　出 土 遺 物

表１　緑ヶ丘一丁目遺跡出土遺物観察表

（　）復元値、単位(cm)

番号	種別 産地	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	土器	甕	(17.6)・－・－	甕	ハケ	長石・石英	良	にぶい橙 5YR 6/3	
2	土器	甕	－・－・7.0	底部	摩耗にて不鮮明	長石・金雲母	良	にぶい黄橙 10YR 7/3	
3	土器	甕	(17.0)・－・－	口縁部	ナデ	長石・石英・金雲母	良	橙 7.5YR 6/6	

深田遺跡



調 査 位 置　甲府市国玉町深田590-1番地
調査原因者　個人
調 査 原 因　個人住宅新築
調 査 面 積　14.5㎡
調 査 期 間　平成５年12月22・24日
調査担当者　信藤祐仁

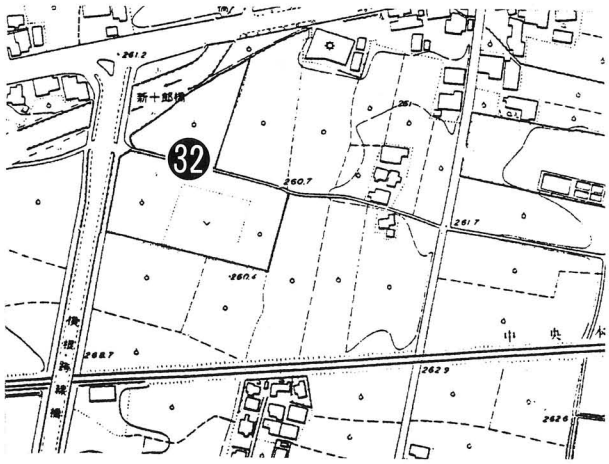
調査の概要

住宅の建設予定地内に、東西方向の調査トレンチ1.5ｍ×７ｍと２ｍ×２ｍの試掘坑を設定した。表土剝ぎ終了時点で調査区のほぼ全面に攪乱が及んでいたが、試掘坑の深掘り部分で自然堆積層を確認した。

ま　と　め

試掘トレンチ、試掘坑ともに、瓦や廃材の他泥炭質の黒褐色粘土層が混在しており、地下１ｍ以上攪乱が及んでいることが判明した。　（信藤祐仁）

大坪遺跡



調 査 位 置　甲府市桜井町606、610番地他
調査原因者　甲府市
調 査 原 因　市道改良工事
調 査 面 積　15.0㎡
調 査 期 間　平成６年２月23日
調査担当者　信藤祐仁

調査の概要

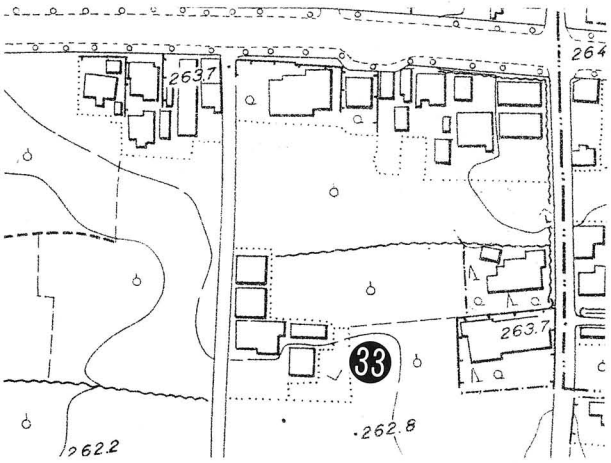
山梨県教育委員会が、昭和50年度に調査した跨線橋建設北地点の東側に位置する。既存の市道に側溝を建設する工事に先立ち、５ｍ×１ｍのトレンチ３本を設定した。重機で表土付近の土を除去した後、手掘りで埋蔵文化財の有無を確認した。

ま　と　め

調査区内から大きな破片はないものの、古墳時代から平安時代の土器が出土した。調査区の基本土層は、第１層　アスファルト　５㎝、第２層　灰褐色砕石層　10㎝、第３層　暗茶褐色粘質土層　10～15㎝　第４層　黒褐色砂質シルト層　10～15㎝、第５層　黒褐色粘土層　10㎝、第６層　黄褐色粘土層　10㎝、第７層　暗灰褐色粘土層10㎝、第８層　明黒褐色粘土層　35㎝以上で、上部には灰褐色の粘土が混じり、茶褐色の鉄分斑が入る。

明確な遺構は確認できなかったが、西トレンチの東側に遺構状の落ち込みが確認された。第６層を15～25㎝掘り込んでおり、部分的に見られることと、周辺に比べ炭化粒子や土器が多く混ざっていることから、なんらかの遺構覆土の可能性がある。　（信藤祐仁）

上土器遺跡



調 査 位 置　甲府市桜井町上土器272～282番地
調査原因者　個人
調 査 原 因　個人住宅新築工事
調 査 面 積　168.0㎡
調 査 期 間　平成５年３月７日～４月４日
調査担当者　信藤祐仁

調査の概要

上土器遺跡は甲斐国分寺跡と同笵の軒丸瓦が出土することから、甲斐国分寺に瓦を供給したとされてきた遺跡である。遺跡は1985年に発見され、1987年に甲府市史編さん委員会、1988年に山梨県教育委員会によって発掘調査が行われている。

対象地は元葡萄畑であり、宅地造成後、個人住宅が建設されるため試掘調査を実施した。約50ｍ×55ｍの敷地に10箇所の区画にそれぞれ調査区を設定し、北東から渦巻状に１，２，３，……10区とした。

すでに造成は終了し、道路や擁壁の設置後であったため、調査には制約が多く困難な部分もあった。

遺構と遺物

遺構は２区に不整形の粘土採掘坑、10区に掘り込みを伴う瓦類の集中する灰原状のものが検出された。遺物はすべての調査区から出土し、３区と10区には瓦類の集中が見られ、特に10区には壁体や焼土や炭化物が面的に存在している。

１　瓦類

瓦の種類は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦、塼がある。出土した瓦のほとんどが破損したり窯変したものであるため、製品として流通することなく窯出しの後に一括して廃棄されたものと推定される。

軒丸瓦①（Ａ１種）　素弁八葉蓮華文。中房に１＋８の蓮子を持つ。蓮弁は卵型で丸く膨らみ、やや突出した間弁を持つ。外区は隆起した二重の圏線が巡る。蓮子の表現は、やや潰れて広がる。色調は灰色～灰褐色で、焼成は概ね還元焔焼成である。（図４．１、２）

軒丸瓦②（Ａ２種）　素弁八葉蓮華文。中房に１＋８の蓮子を持つ。蓮弁は卵型で丸く膨らみ、やや突出した間弁を持つ。外区は隆起した二重の圏線が巡る。蓮子の表現は、Ａ１種に比べやや小振りでシャープな印象を受ける。色調は灰色～灰褐色で、焼成は概ね還元焔焼成である。（図４．３、図５．４）

軒平瓦①（Ｂ１種）　均整唐草文。中心飾は花頭を意識した円とその下に崩れたC字状の唐草を交差させる。唐草文はやや直線的に配され、先端は玉状である。顎部は曲線顎である。色調は灰色～灰褐色で、焼成は概ね還元焔焼成である。（図５．８）

軒平瓦②（Ｂ２種）　均整唐草文。中心飾は花頭を意識した円と、その下にC字状の唐草を交差させる。唐草文は曲線的に配され、先端は巻き込みを意識する。顎部は曲線顎である。色調は褐色～灰赤色のものと、灰色～灰褐色のものの２種類ある。焼成は、酸化還元焔焼成と酸化焔焼成の両方がある。（図５．９～13、図６.14、図６.16～19）

軒平瓦③（Ｂ３種）　おそらく均整唐草文。破片資料であり、全体像、大きさは不明で

ある。笵幅の縮小のためか、両端の跳ね上がる唐草文の表現が省略される。色調は灰色～灰褐色で、焼成は概ね還元焔焼成である。(図６.15)

軒平瓦④（Ｂ４種）　おそらく均整唐草文。破片資料であり、全体像、大きさは不明である。唐草文の表現はやや肉細で、全体的に小さな印象を受ける。また、下外区の表現も二重である（図７.22)

軒平瓦⑤（Ｂ５種）　おそらく均整唐草文。破片資料であり、全体像、大きさは不明である。外区に珠文帯を持つ。(図７.25)

軒平瓦⑥（Ｂ６種）　四重弧文。弧線は笵による施文である。顎部は曲線顎である。色調は灰色～灰褐色で、焼成は概ね還元焔焼成である。(図７.26～29)

丸瓦①　玉縁式丸瓦。凸面はヘラ削りが施され、縄目があまり残らない。凹面は布目が明瞭に残る。幅広面の長径は約15cm、玉縁部を除く全長は約28cmである。胎土は緻密で還元焔で焼成される。(図８.30、図９.32)

丸瓦②　玉縁式丸瓦。凸面の調整は不明瞭であるが、縄目がやや残るものの軽くナデ調整が施されたものと思われる。凹面は布目が明瞭に残る。幅広面の長径は約17cm、玉縁部を除く全長は約29cmである。胎土に石英、長石、赤色スコリアを多く含み、酸化焔で焼成される。(図９.31)

丸瓦③　玉縁式丸瓦。凸面の調整は行われず、縄目が強く残る。玉縁部を欠損するため全長は不明である。残存する側の長径は17cmであるが、厚みが約４cmとかなり肉厚な作りである。側面も片側を欠損するものの、残存する側には指頭を一本ずつ押し当てたような痕跡が残る。他の丸瓦に比べ、縦方向に扁平印象を受ける。胎土に石英、長石、赤色スコリアを多く含み酸化焔で焼成される。道具瓦の可能性も否定できない。(図10.35)

平瓦①　一枚造りである。広端と狭端の差が少ない台形を呈する。凸面に縄叩き目を残し、凹面は布目が残されるもの、布目の上に筋状の圧痕が残るもの、その圧痕を調整したものがある。色調は黒褐色で、焼成は還元焔焼成である。(図11.36、図12.38、39、図13.41、図14.42、43)

平瓦②　一枚造りである。広端と狭端の差が少ない台形を呈する。凸面に縄叩き目を残し、凹面は調整され無文である。胎土に石英、長石、赤色スコリアを多く含む。二種類の粘土を混ぜて作っているようであるが、混ざりが弱く灰白色の粘土が部分的にやや残るものもある。酸化焔で焼成される。(図11.37、図13.40)

塼　全て破片であり、全体の形が分かるものはない。長方形の端部を横長に置くと、その上面と下面には縄目が強く残されるが、端部と両側面はナデ調整が施される。酸化焔焼成のものと還元焔焼成の２種類がある。(図15.44～47)

用途不明瓦　２点出土している。ほぼ平板に造成される。残りが良い方の短辺は約37.5cm、長辺のうち残存する最大で約47cm、厚さ約5.5cmが計測できる。縄叩きの後、全面にナデ調整が施される。残存するほぼ中央に、1.8×1.0cmの方形の孔が両面から穿孔される。(図15.48、図16.49)

鬼瓦　鬼面文鬼瓦が１点出土している。眉間の突起の一部から左目の半分にかけての破片資料である。周縁は素文であり、全体的に彫が浅く平面的である。灰黄色を呈し、還元焔焼成である。(図16.50) なお、図版には甲斐国分寺の鬼瓦を利用させていただいた。

２　土器類

瓦類に比べると、その出土量は圧倒的に少ない。土師器が大半を占め、須恵器は坏蓋２点（図17.12、13）が出土しているのみである。

古墳時代　図４.１～３、７は、扁平な半球形の底部の上に稜を持ち、口縁部がやや外反気味に直立する坏である。調整はヘラ削りを施す。図17.５、６は高坏である。坏、高坏と

も精製した緻密な胎土を持つ。図17.8、9、20～22は甕の底部である。図17.10は手捏ね土器である。『山梨県史』による古墳時代土器編年でⅧ期に該当する。

平安時代　図17.14～19、23～26は坏である。外面にヘラ削り、内面に暗文を施す。図17.11は宝珠型ツマミを持つ坏蓋である。『山梨県史』による奈良・平安時代土器編年でⅤ～Ⅵ期に該当する。

ま と め

先学の指摘の通り、甲斐国分寺出土のものとほぼ同笵、同種類の瓦類が出土した。前述のとおり出土した瓦類のほとんどが破損したり、窯変したものであることから、窯出しの後製品として使用に堪えないものを一括して廃棄したものと考えられる。また、須恵器がほとんど出土していないことから、上土器窯跡は瓦陶兼業窯ではなく、瓦専用の窯だったと考えられる。

本窯跡は、市史編さん室で調査した本地点東側に位置する１基と、県教委が調査した本調査地点の１区南側にあたる１基と、今回調査した10区の１基の合計３基が想定される。それぞれすべてが灰原と推定される部分のみであるため、窯本体がかつて存在した微高地は土取りによって削平されてしまったものと想定される。　（信藤祐仁・平塚洋一）

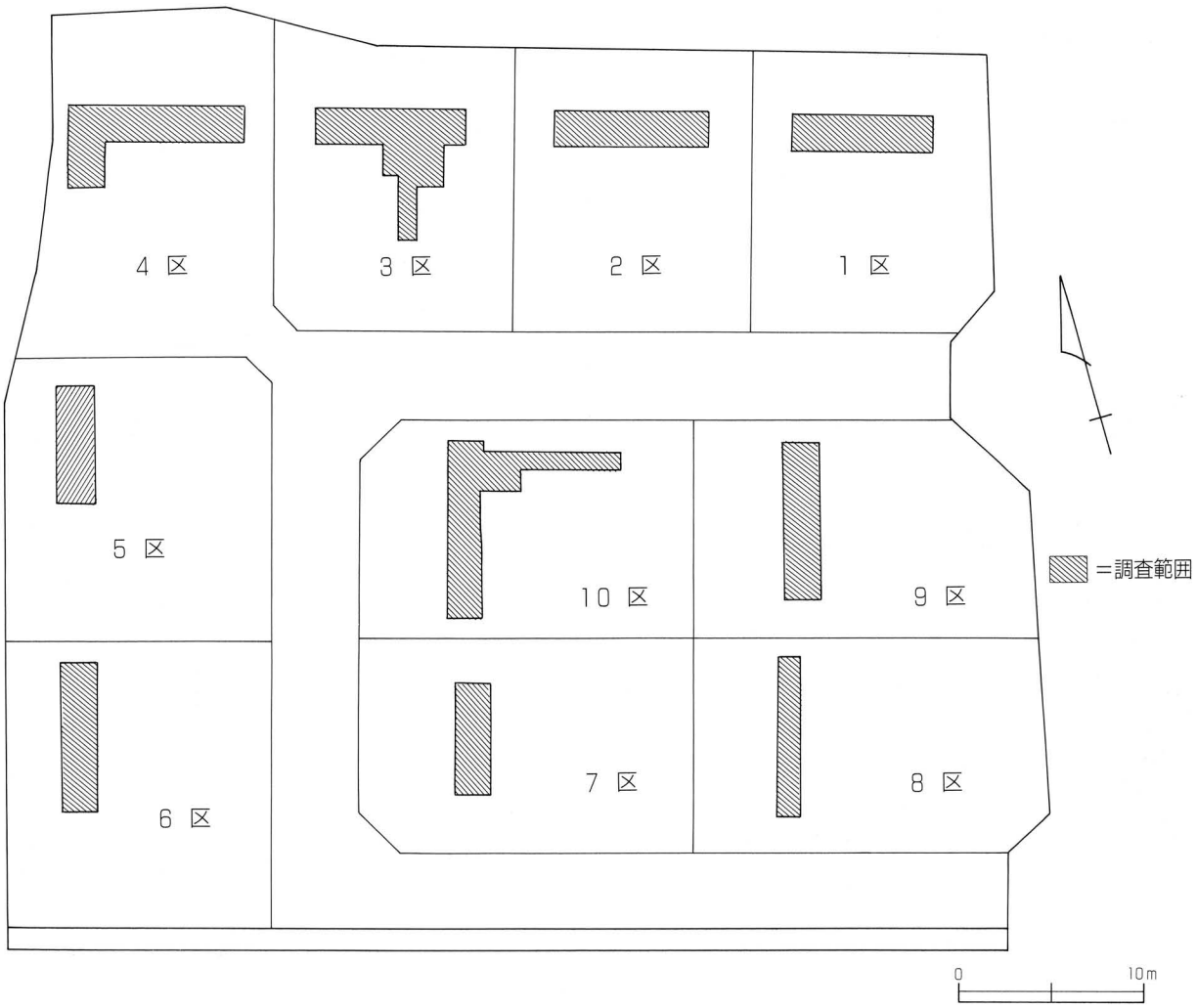


図１　上土器遺跡トレンチ配置図

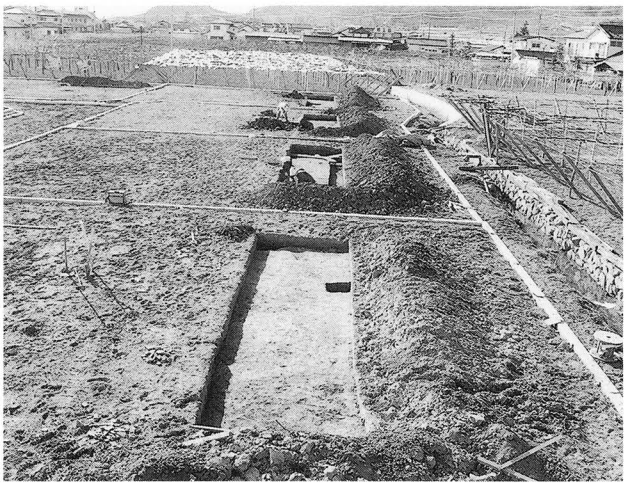


写真１　調査区１～４区

写真２　調査区４～６区

写真３　３区瓦出土状況

写真４　３区瓦出土状況

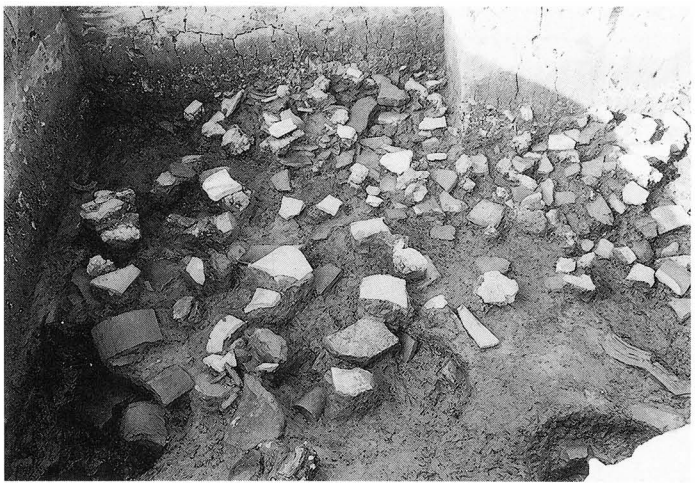


写真５　10区瓦出土状況

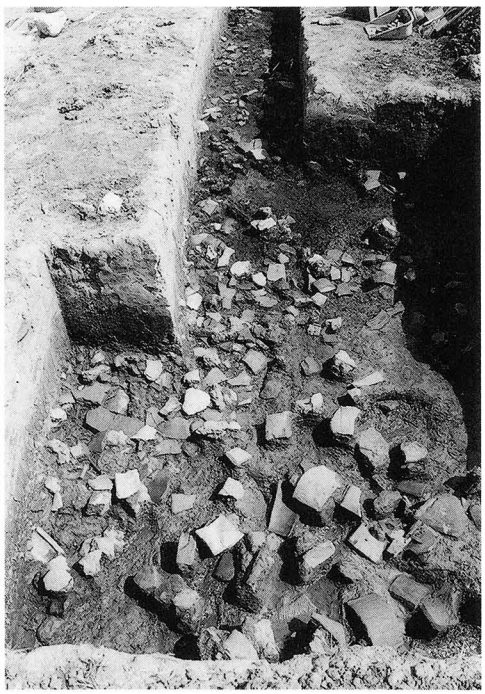


写真６　10区瓦出土状況

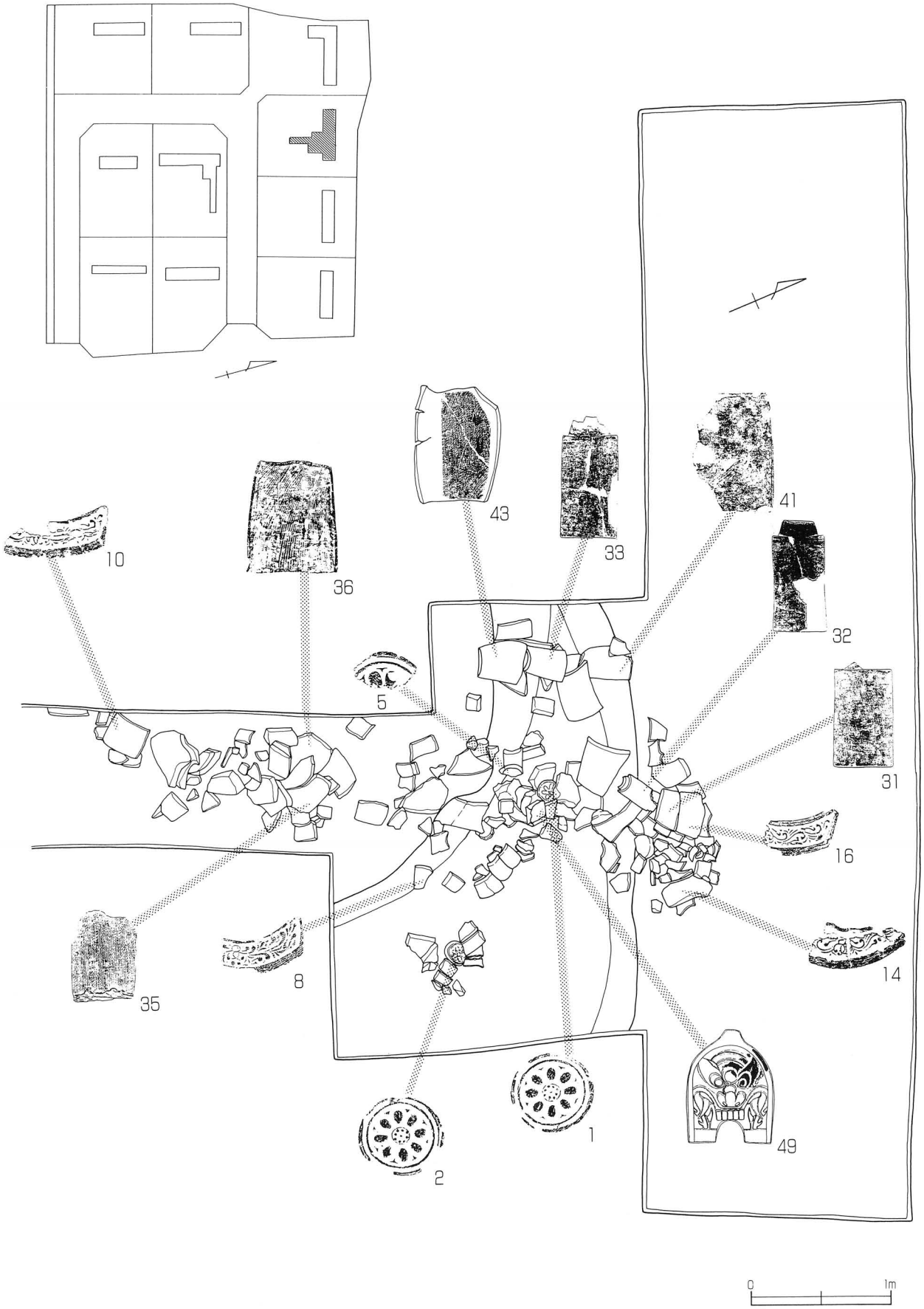


図2　3区瓦集中状況

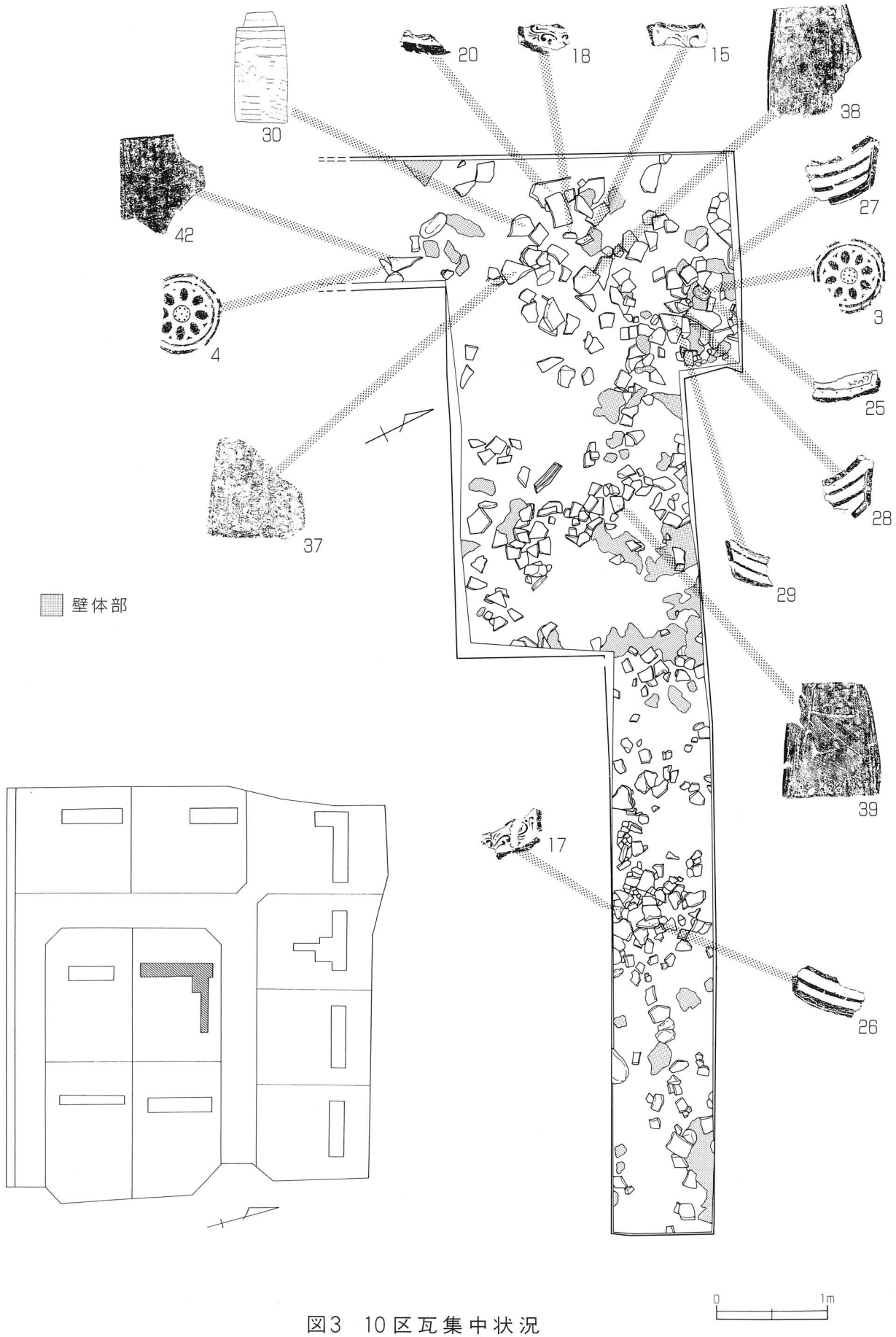


図3　10区瓦集中状況

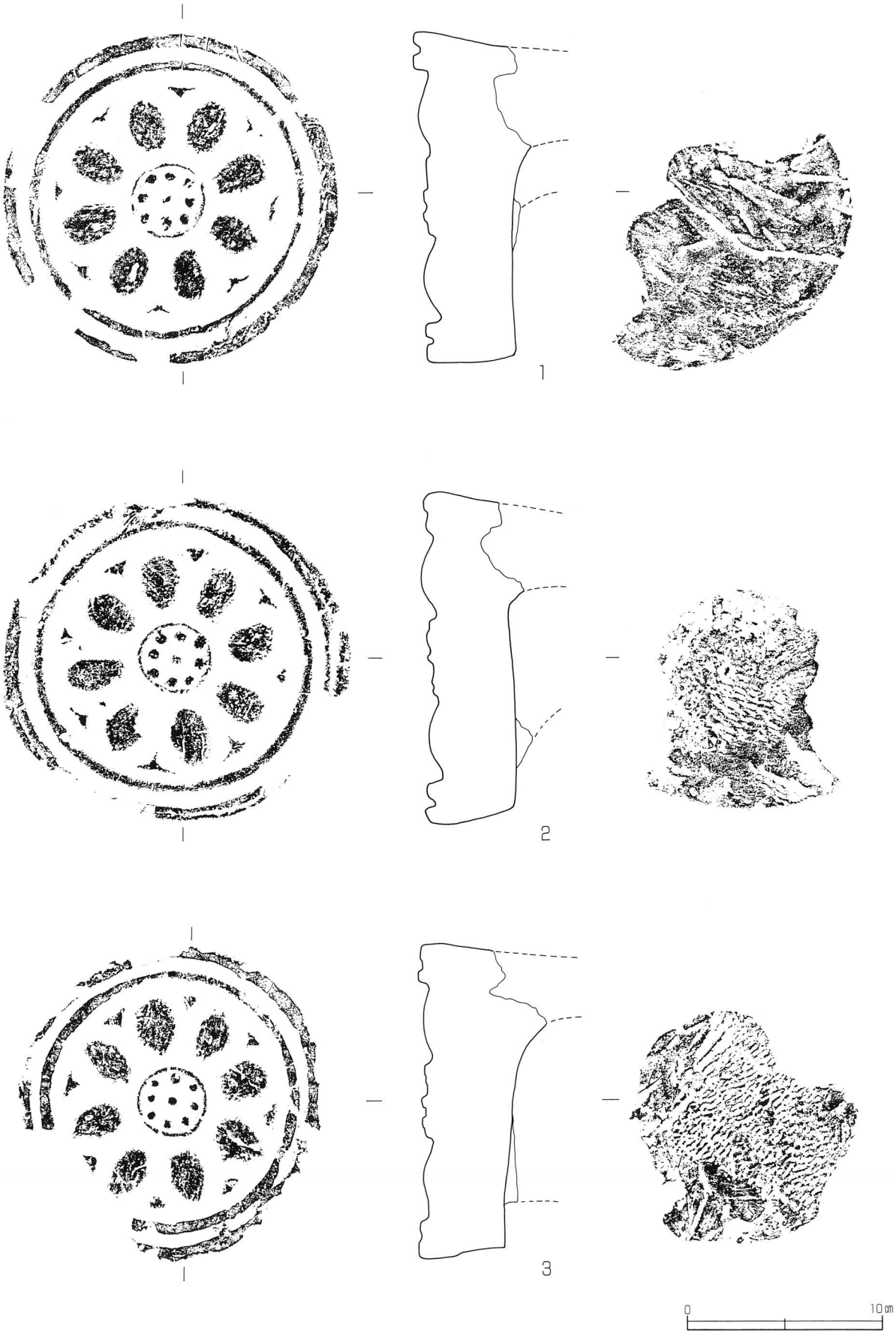


図 4 軒 丸 瓦

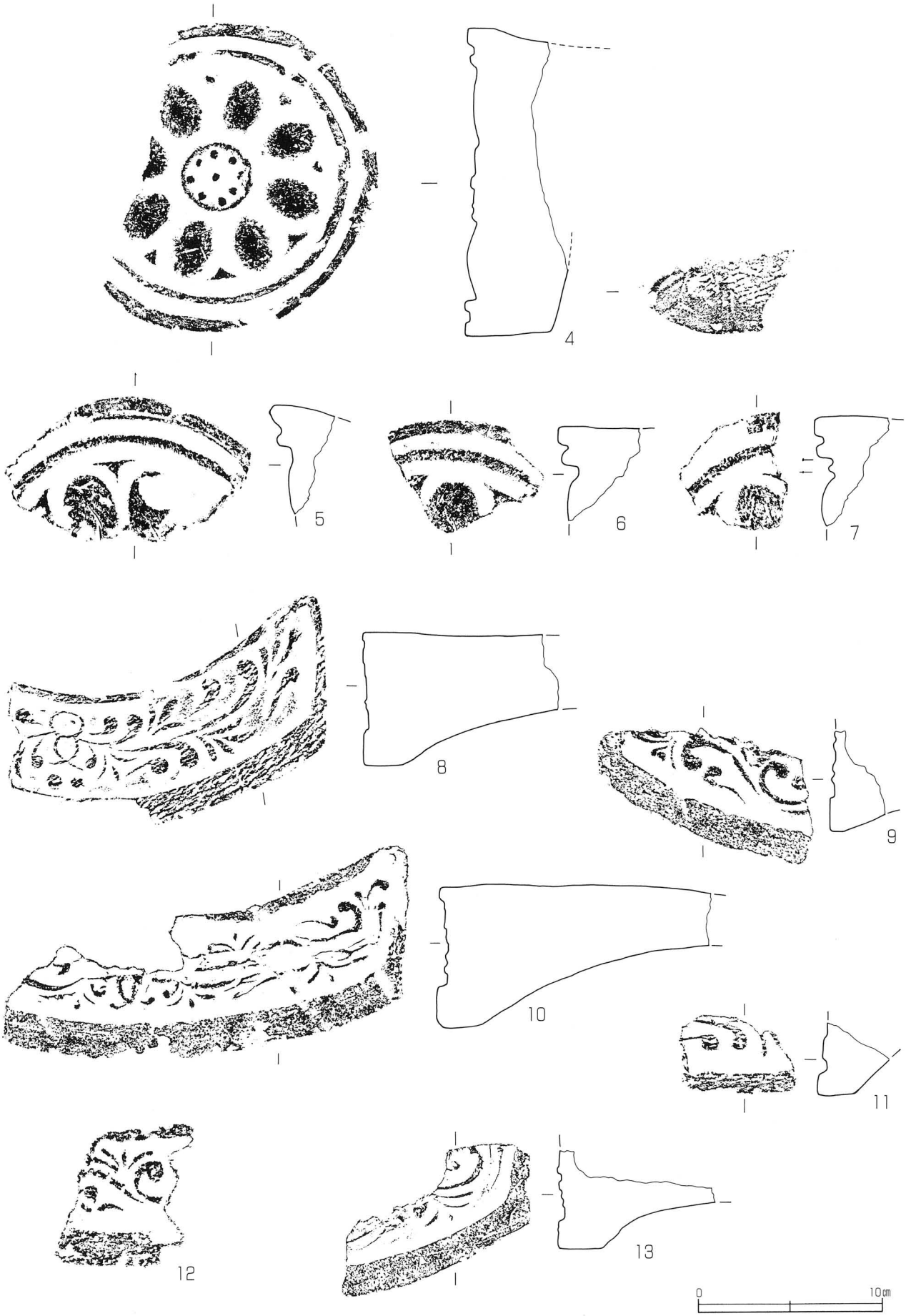


図 5　軒丸・軒平瓦

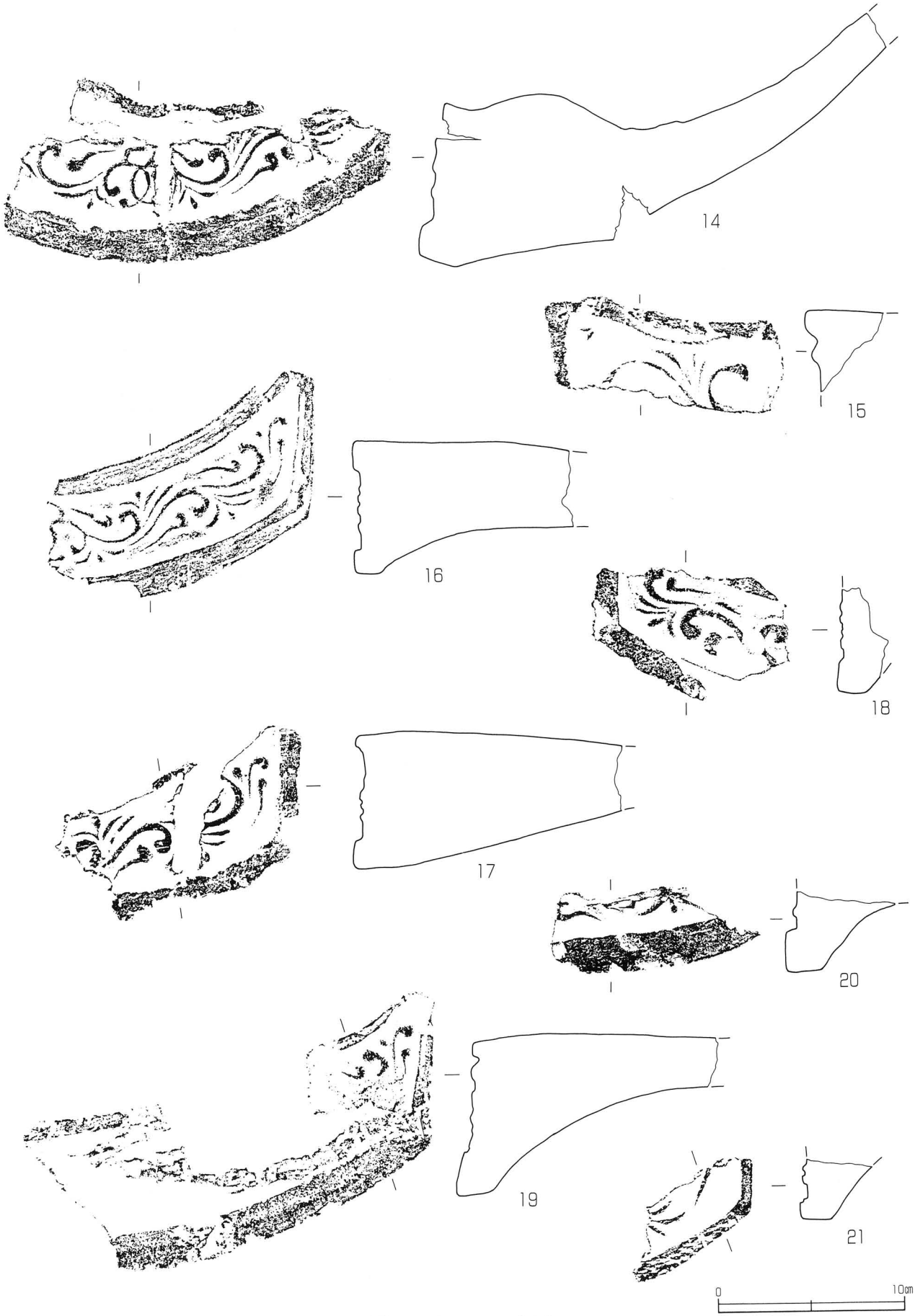


図 6　軒平瓦（1）

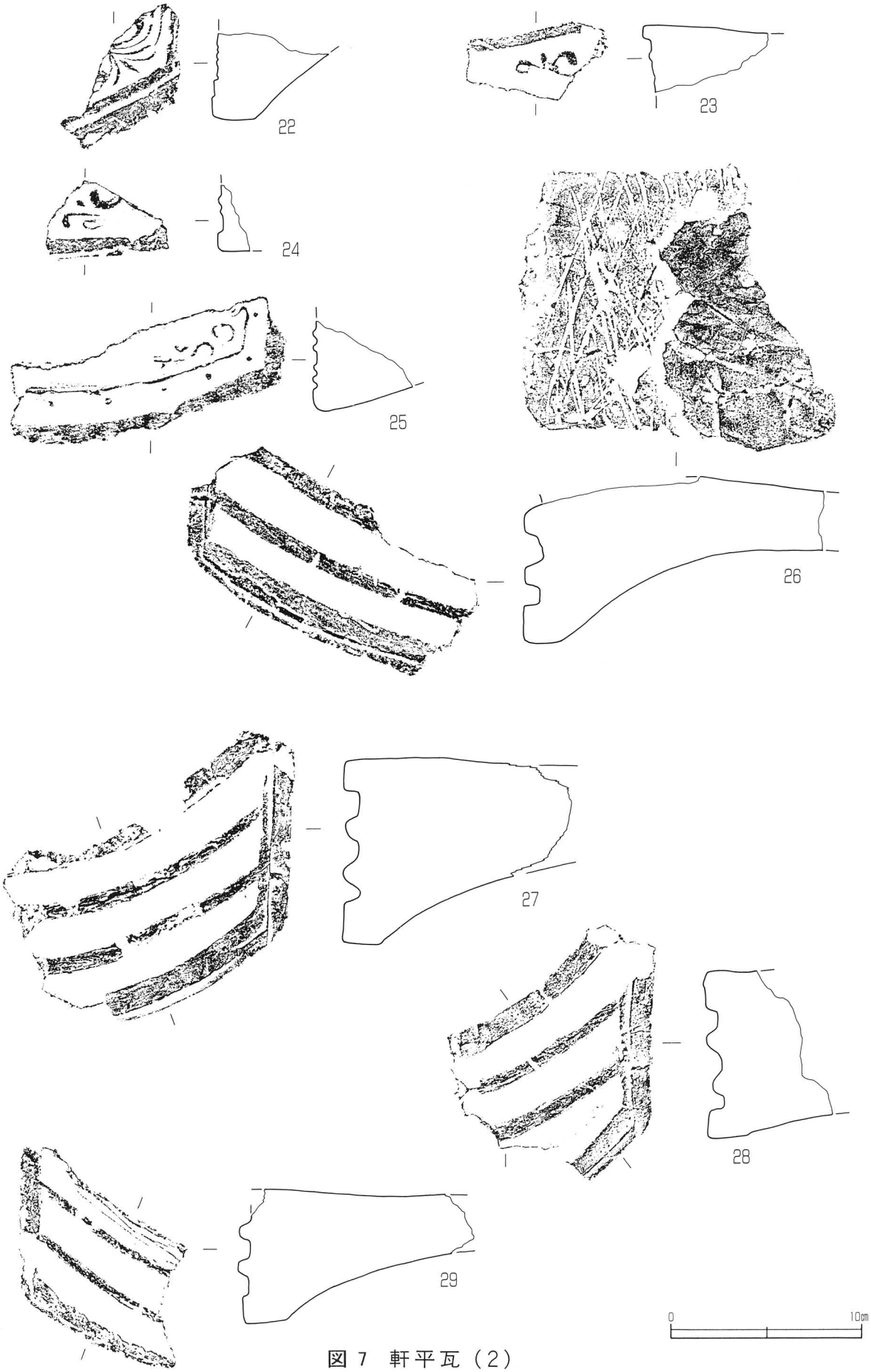
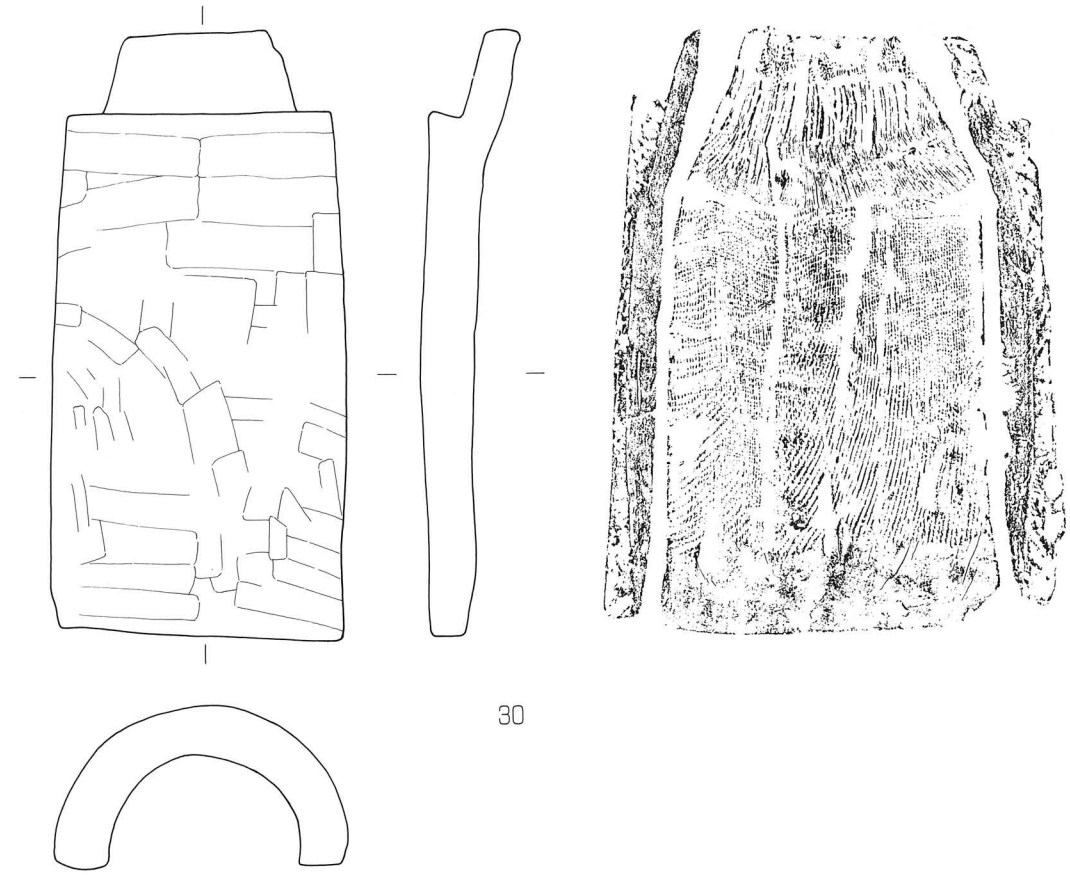


図 7　軒平瓦（2）



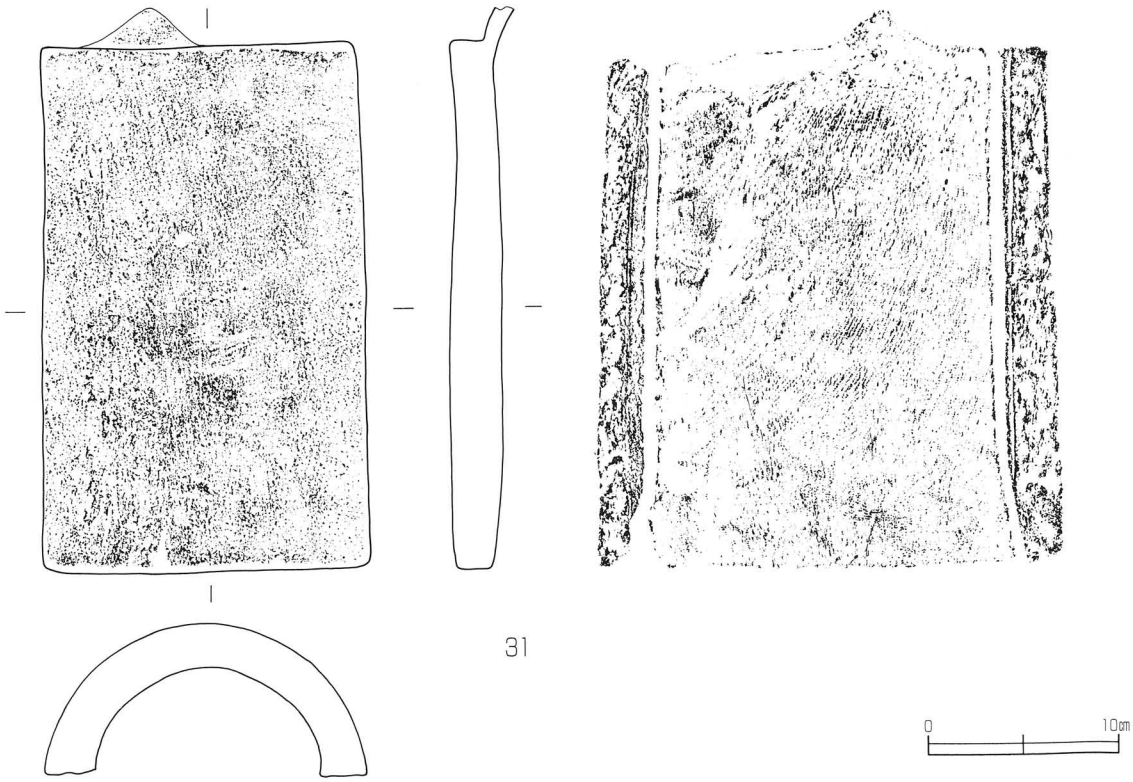
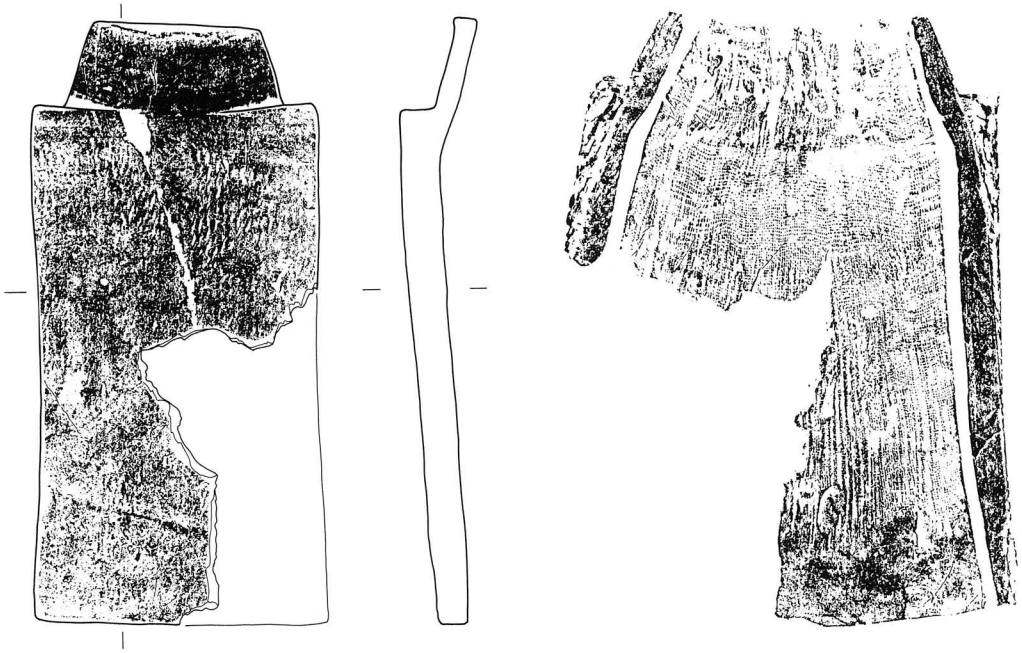
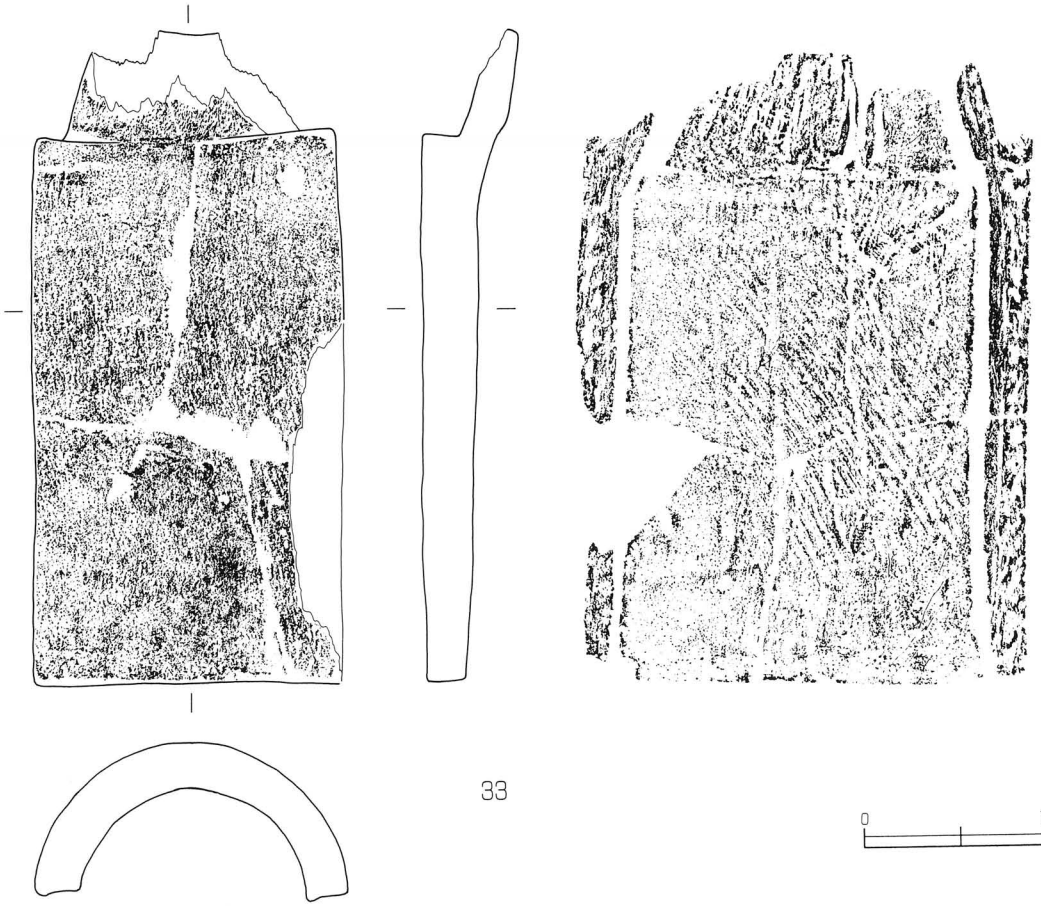


図 8　丸　瓦（1）



32



33

0　10cm

図 9　丸　瓦（2）

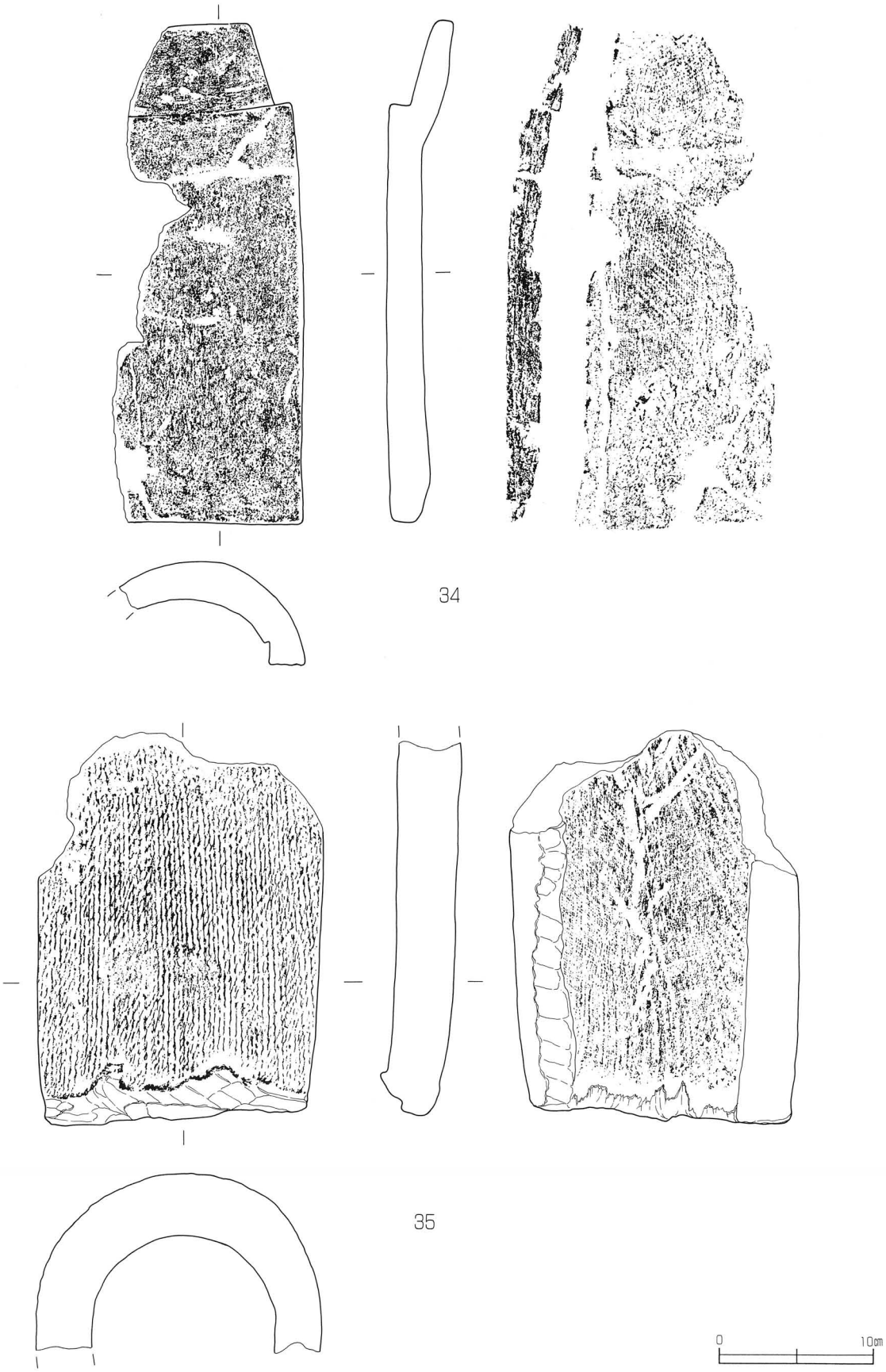
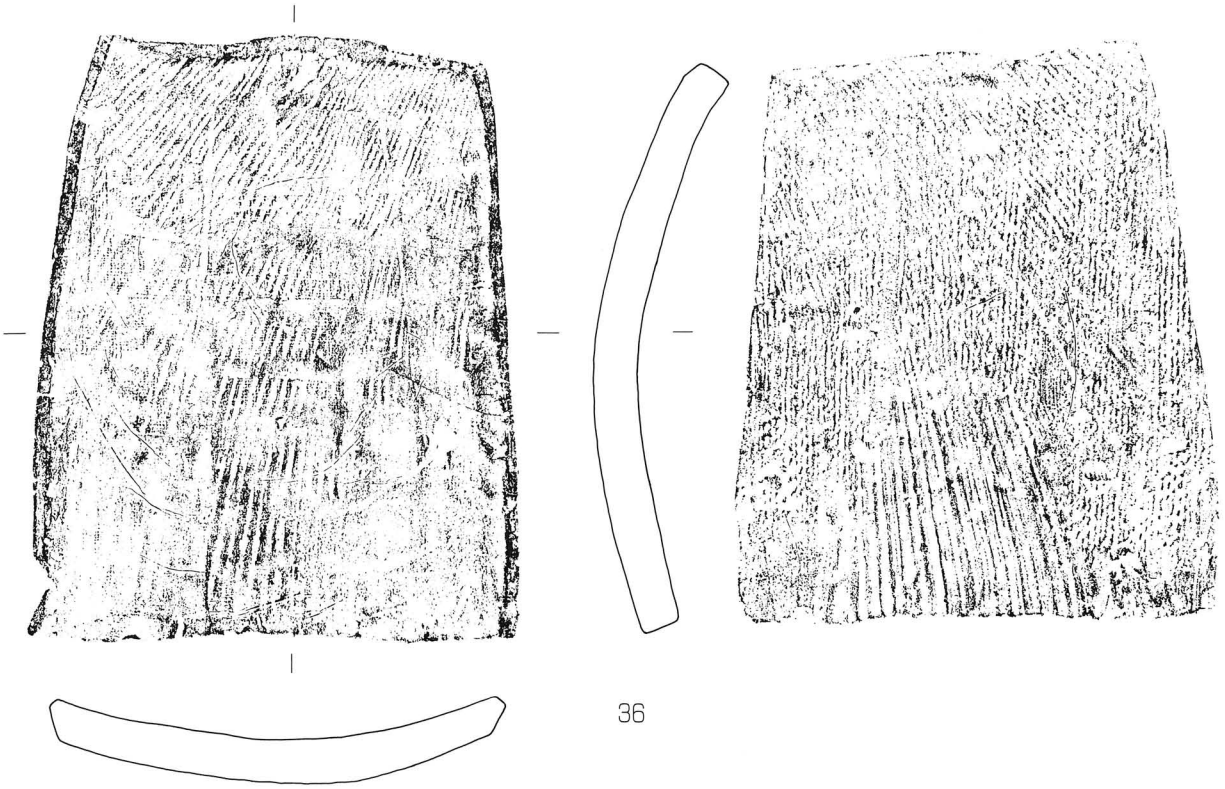


図 10　丸　瓦（3）



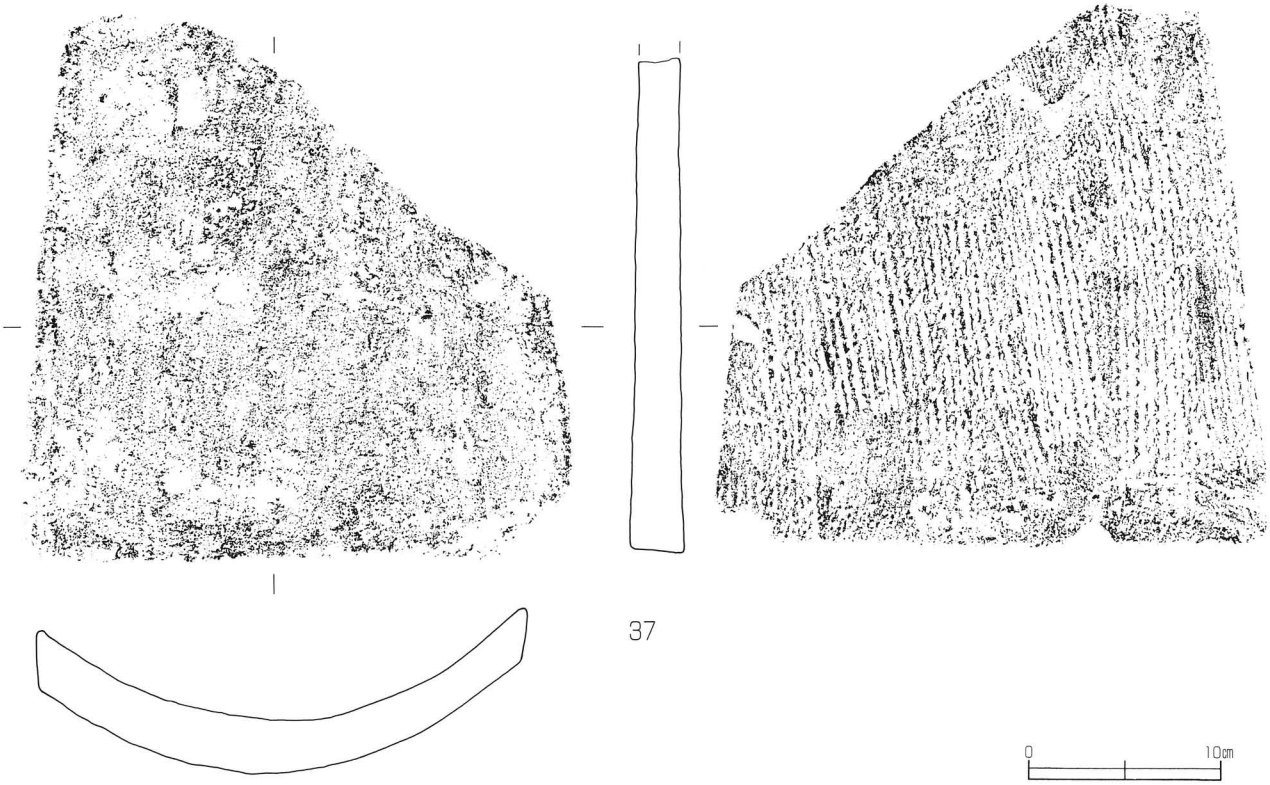


図11　平　瓦（1）

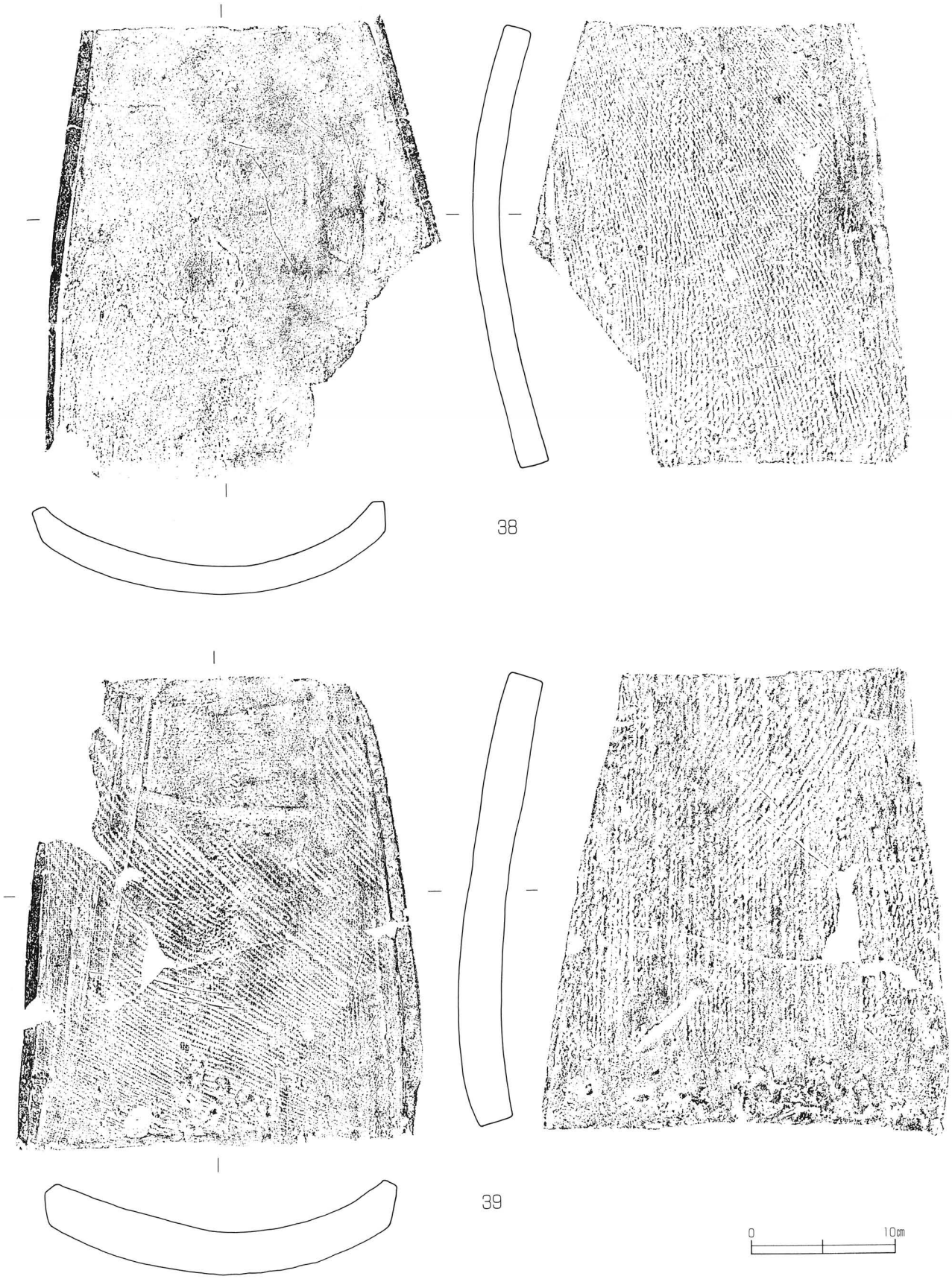


図12 平 瓦（2）

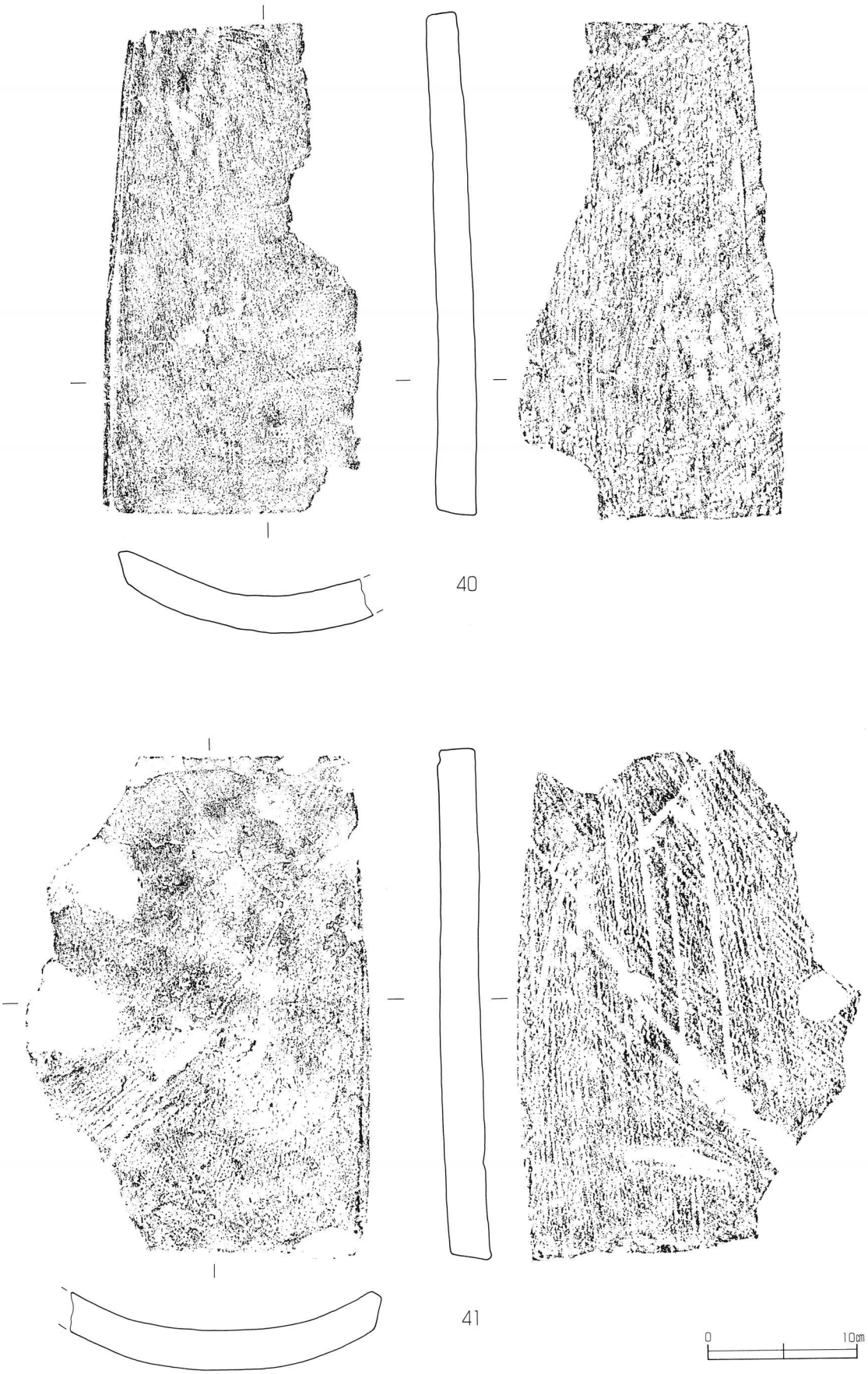
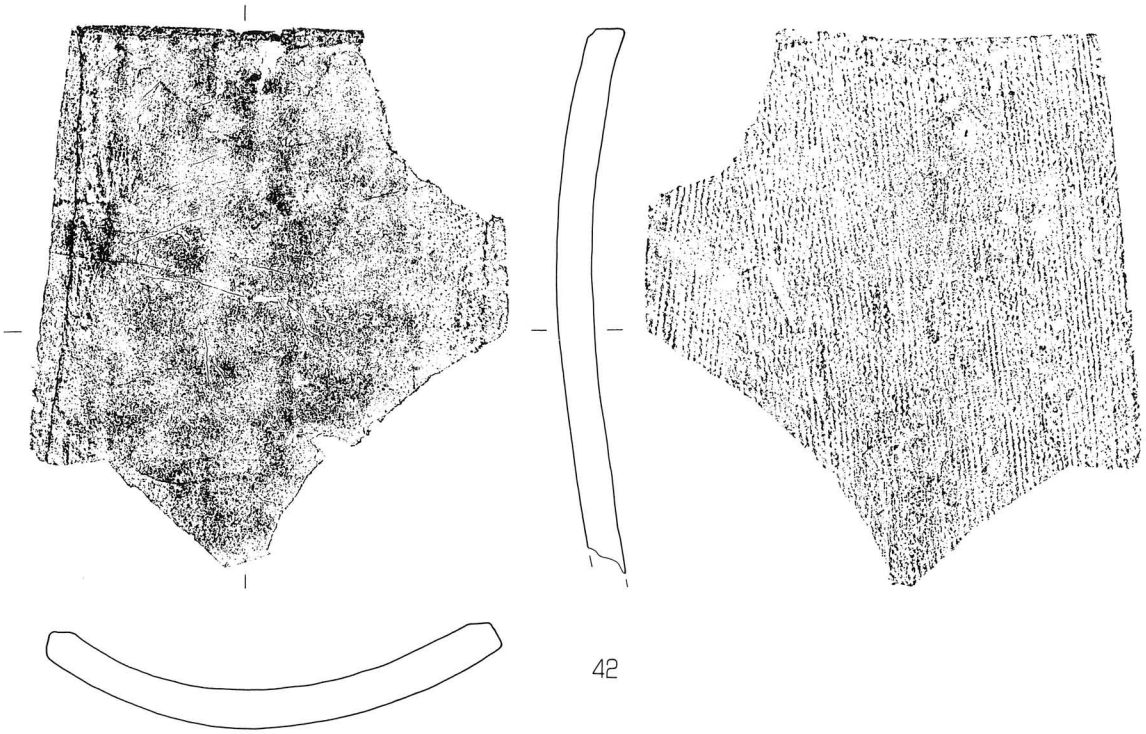


図 13　平　瓦（3）



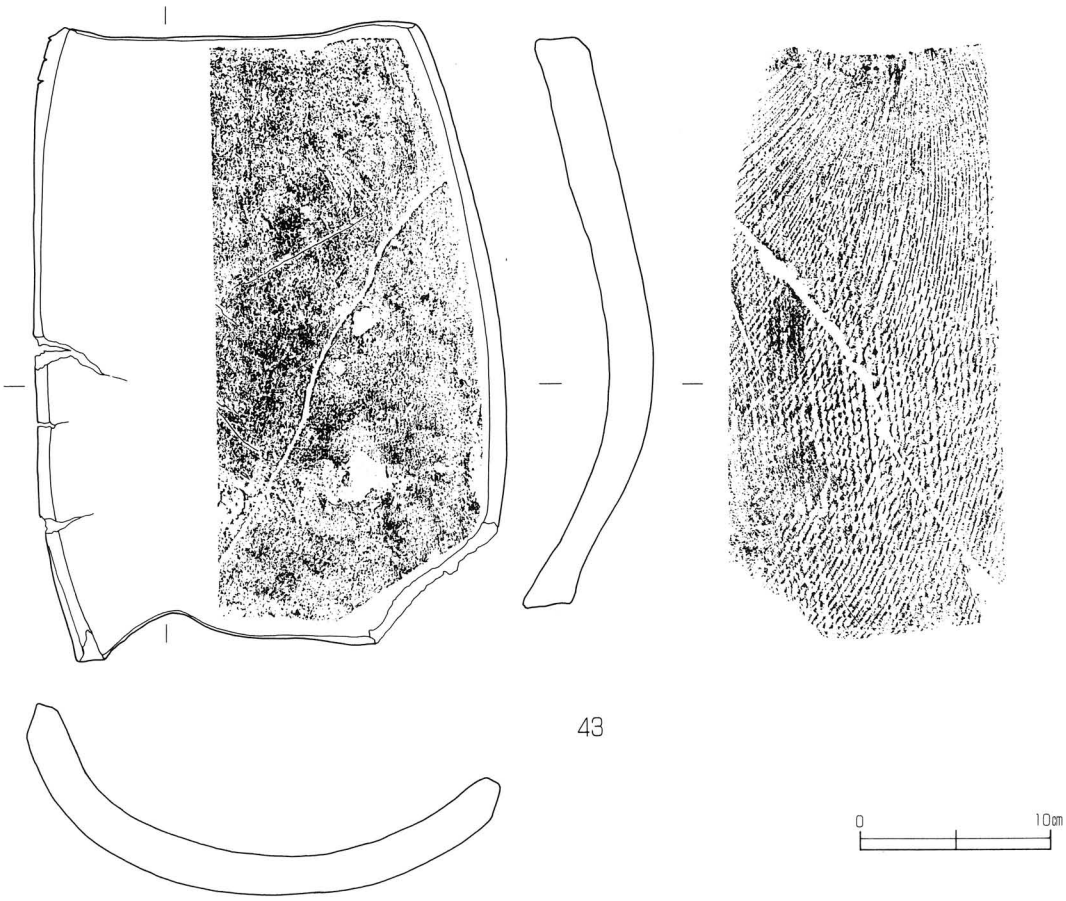


図14　平　瓦（4）

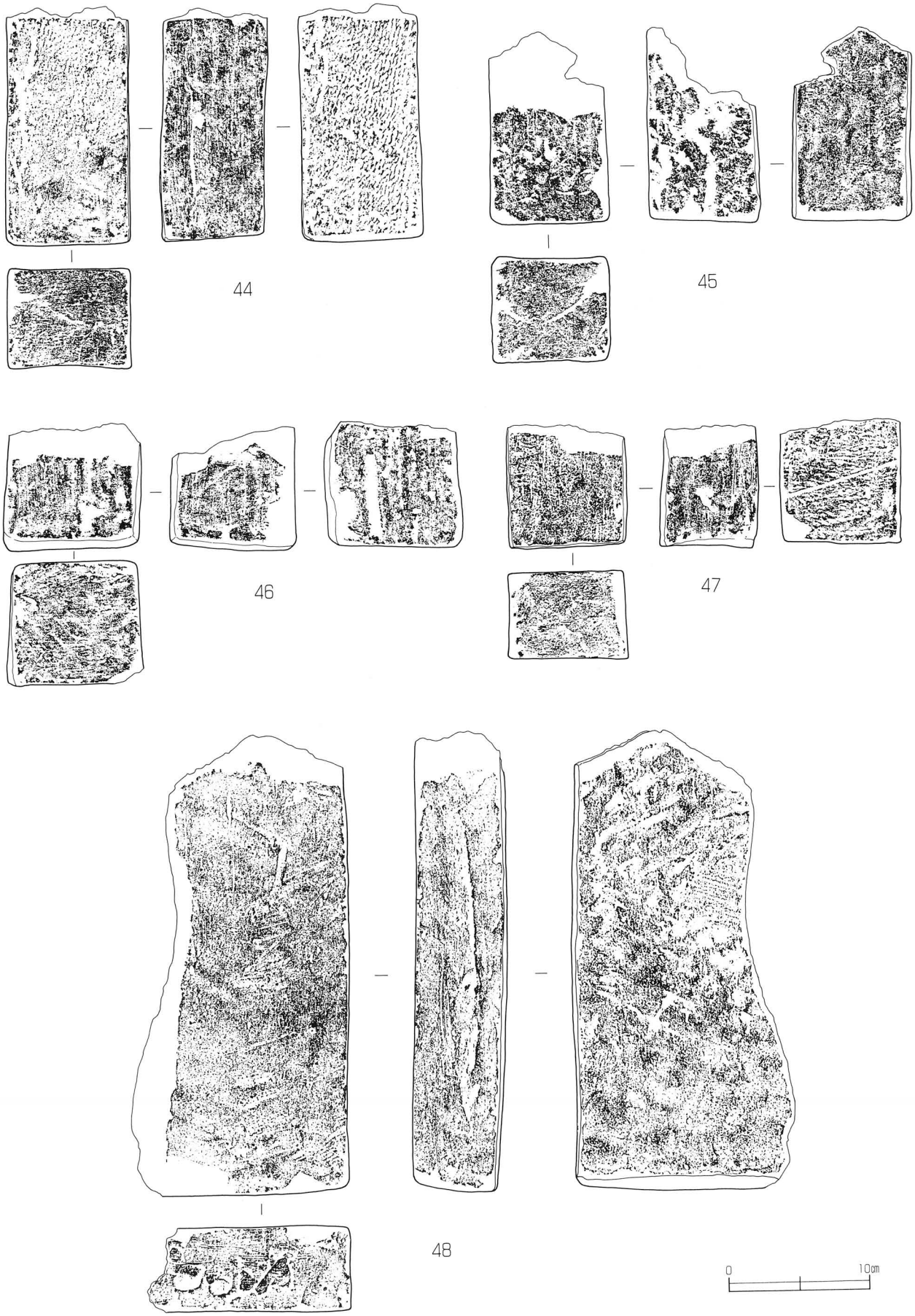
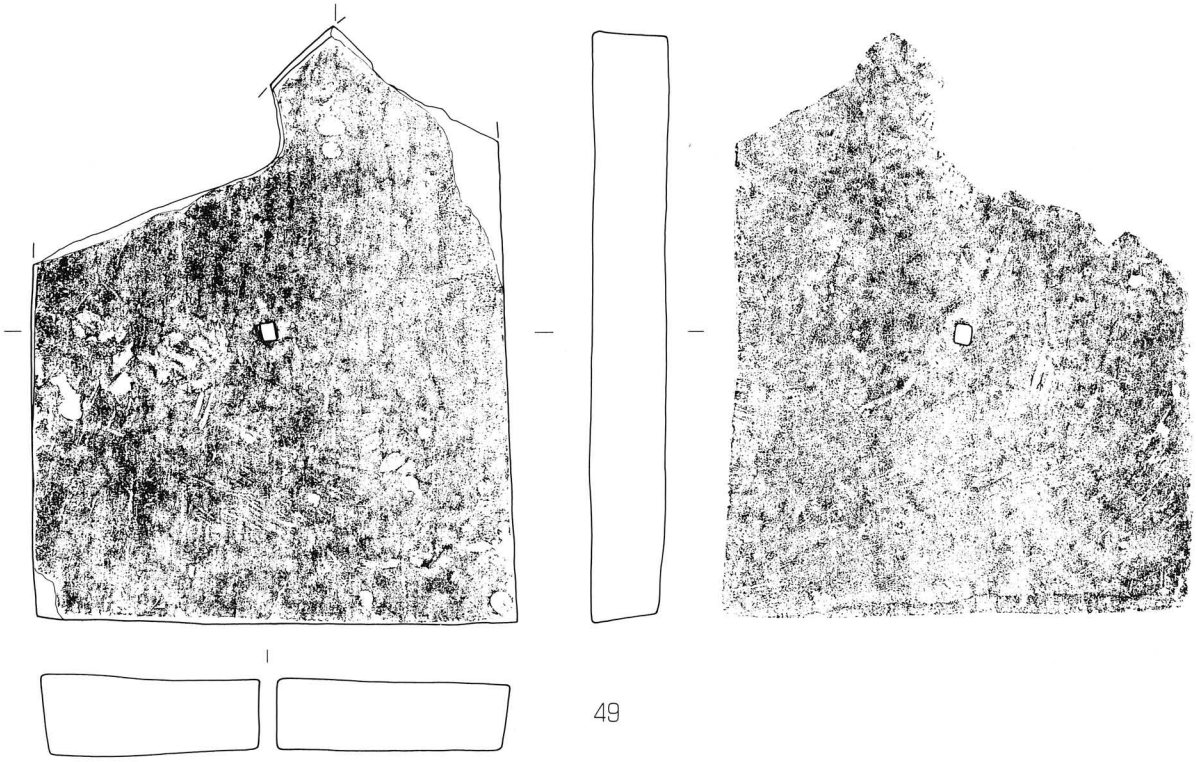
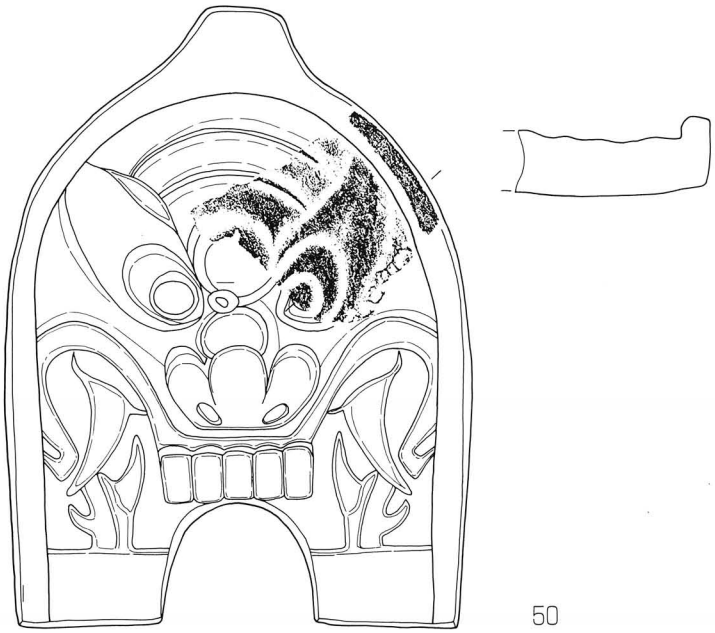


図 15　塼





0　20cm

図 16　塼・鬼瓦

上土器遺跡瓦観察表

単位：cm

番号	瓦　種	笵種	直　径　・　厚　さ	色　調	文　　様
1	軒丸瓦	A 1	17.5	灰褐色	素弁８葉蓮華文
2	軒丸瓦	A 1	17.4	灰褐色	素弁８葉蓮華文
3	軒丸瓦	A 2	16.6	灰褐色	素弁８葉蓮華文
4	軒丸瓦	A 2	17.2	灰褐色	素弁８葉蓮華文
5	軒丸瓦	不明	(17.0)	灰色	素弁８葉蓮華文
6	軒丸瓦	A 1	(16.0)	灰白色	素弁８葉蓮華文
7	軒丸瓦	A 1	(16.0)	灰褐色	素弁８葉蓮華文
8	軒平瓦	B 1	7.4 ／ 4.4	灰色	均整唐草文
9	軒平瓦	B 2		灰褐色	均整唐草文
10	軒平瓦	B 2	7.8 ／ 3.1	灰褐色	均整唐草文
11	軒平瓦	B 2		灰黄褐色	均整唐草文
12	軒平瓦	B 2		赤褐色	均整唐草文
13	軒平瓦	B 2		灰色	均整唐草文
14	軒平瓦	B 2		灰褐色	均整唐草文
15	軒平瓦	B 3		灰黄色	均整唐草文
16	軒平瓦	B 2	7.2 ／ 4.5	灰橙色	均整唐草文
17	軒平瓦	B 2	7.4 ／ 4.0	灰赤色	均整唐草文
18	軒平瓦	B 2		灰色	均整唐草文
19	軒平瓦	B 2		灰褐色	均整唐草文
20	軒平瓦	不明		灰色	均整唐草文
21	軒平瓦	不明		灰色	均整唐草文
22	軒平瓦	B 4		灰褐色	均整唐草文
23	軒平瓦	不明		灰赤色	均整唐草文
24	軒平瓦	不明		灰黄褐色	均整唐草文
25	軒平瓦	B 5		灰白色	均整唐草文
26	軒平瓦	B 6		灰色	３重弧文
27	軒平瓦	B 6	9.9 ／ 5.2	灰色	３重弧文
28	軒平瓦	B 6	9.0 ／	灰褐色	３重弧文
29	軒平瓦	B 6	7.3 ／ 3.2	灰色	３重弧文
30	丸瓦		縦 32.0・横 15.3　2.6	灰褐色	表　ケズリ／裏　布目
31	丸瓦		縦 30.1・横 16.8　2.6	明茶褐色	表　ナデ／裏　布目
32	丸瓦		縦 31.7・横 15.2　2.0	灰色	表　ナデ・叩目／裏　布目
33	丸瓦		縦 34.7・横 16.4　2.5	明茶褐色	表　ナデ／裏　叩目
34	丸瓦		縦 33.4・横　－　2.5	灰白色	表　ナデ／裏　布目
35	丸瓦		縦　－・横　－　4.0	明茶褐色	表　縦方向縄目／裏　布目
36	平瓦		縦 30.0・横 24.0　2.2	灰赤色	表　布目上に叩目／裏　縄目上に叩目
37	平瓦		縦　－・横 27.7　3.0	明茶褐色	表　ナデ／裏　縄目
38	平瓦		縦　－・横　－　－	灰褐色	表　ナデ・叩目／裏　縄目
39	平瓦		縦 33.0・横 26.5　3.0	灰色	表　布目・叩目／裏　縄目
40	平瓦		縦 34.0・横　－　2.4	灰褐色	表　ナデ／裏　縄目・叩目
41	平瓦		縦 38.0・横 22.2　2.7	灰褐色	表　ナデ・叩目／裏　縄目
42	平瓦		縦　－・横 23.8　1.9	灰褐色	表　ナデ・叩目／裏　縄目
43	平瓦		縦 31.2・横 29.8　2.0	灰褐色	表　ナデ・叩目／裏　縄目
44	塼		縦　－・横　8.5　7.0	灰色	表・裏　縄目／側面　ナデ
45	塼		縦　－・横　8.5　7.4	明赤褐色	ナデか
46	塼		縦　－・横　9.2　9.0	明赤褐色	ナデか
47	塼		縦　－・横　8.5　6.3	灰色	叩目
48	塼		縦　－・横　－　6.2	灰褐色	一部叩目あり
49	塼カ		縦 47.0 ・ 横 37.5 ・ 5.5	灰褐色	方形の穴あり
50	鬼瓦		縦　－ ・ 横　－　・ 4.5	灰白色	

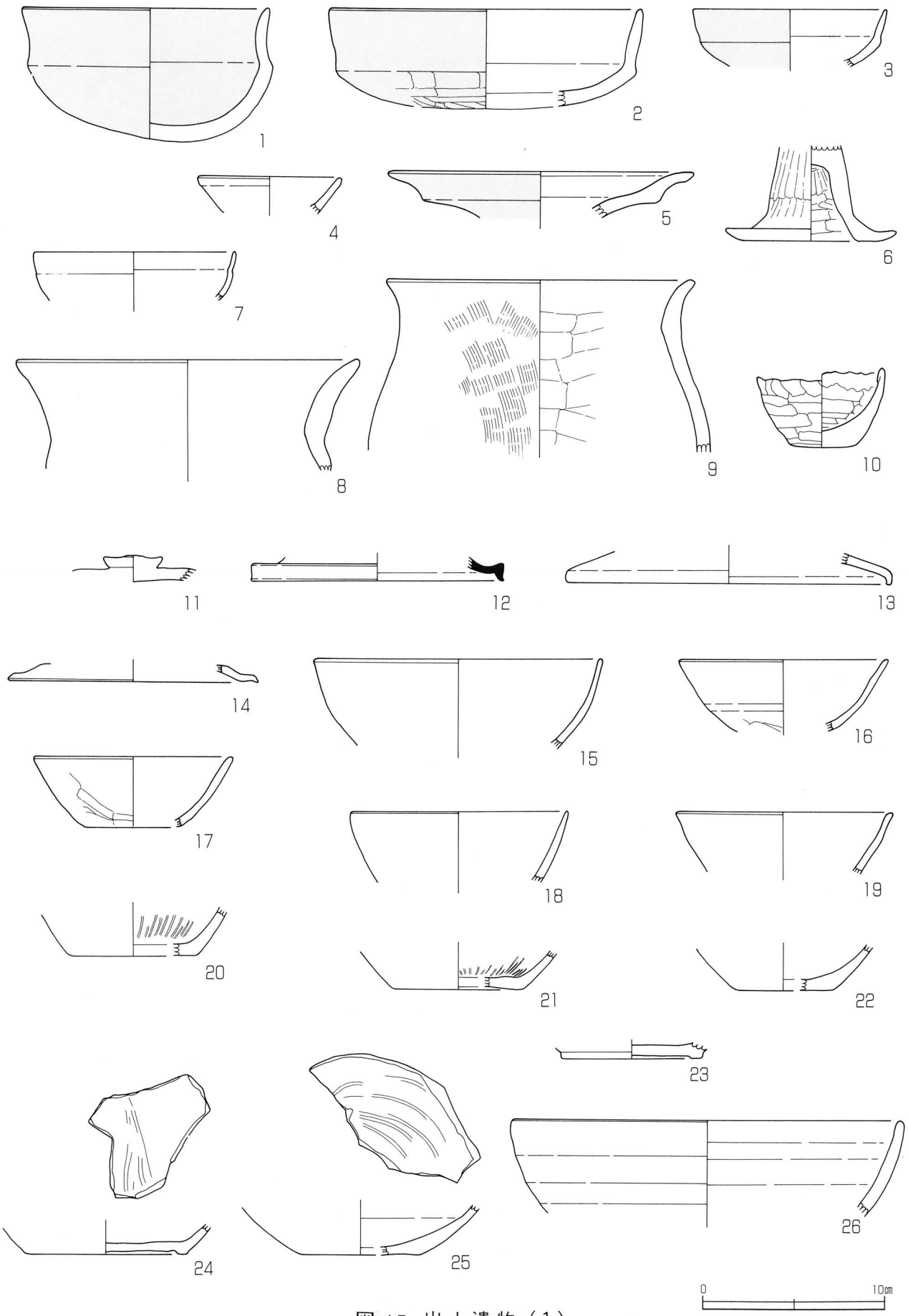


図 17 出土遺物（1）

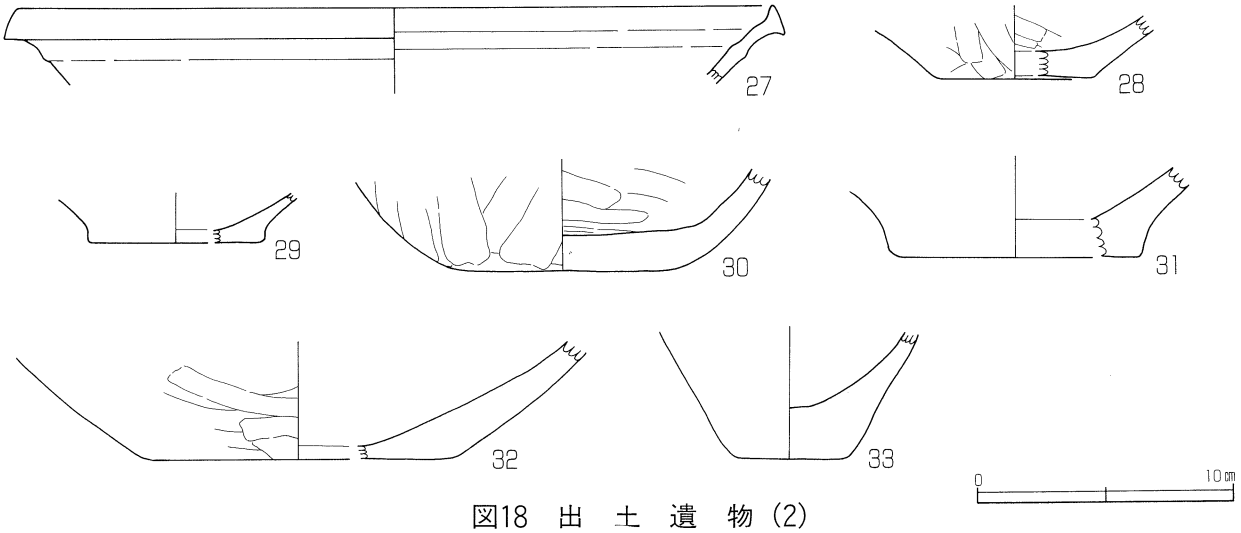


図18　出　土　遺　物（2）

表1　上土器遺跡出土遺物観察表

（　）復元値、単位(cm)

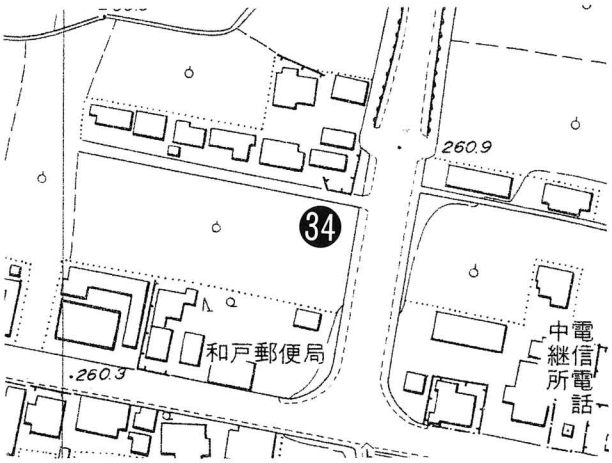
番号	種別 産地	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
1	土器	坏	(13.7)・(7.2)・(13.5)	口縁部～底部	ミガキ 外面赤色塗彩	金雲母・長石・赤色粒子	良	暗赤 10R 3/6	
2	土器	坏	(17.2)・(5.5)・(16.6)	口縁部～体部	外面下部ヘラ削り 赤色塗彩	金雲母・長石・赤色粒子	良	灰褐 7.5YR 6/2	
3	土器	坏	(10.8)・－・－	口縁部～体部	ナデ 外面赤色塗彩	金雲母・赤色粒子	良	にぶい橙 5YR 6/4	
4	土器	坏	(8.0)・－・－	口縁部～底部	ナデ	金雲母・長石・赤色粒子	良	内)黒 10YR 2/1 外)明赤褐 5YR 5/6	
5	土器	高坏	(17.0)・－・－	口縁部～胴部	ナデ 外面赤色塗彩	金雲母・長石	良	明赤褐 5YR 5/6	
6	土器	高坏	(17.0)・－・－	脚部	ヘラ削り	金雲母・赤色粒子	良	にぶい黄橙 10YR 7/4	
7	土器	坏	(11.2)・－・－	口縁部～体部	ヘラ削り	金雲母・長石・赤色粒子	良	内)黒 10YR 2/1 外)明赤褐 5YR 5/6	
8	土器	壺か甕	(19.0)・－・－	口縁部	ナデ	金雲母・長石・石英・赤色粒子	良	橙 7.5YR 6/6	
9	土器	甕か	(17.0)・－・－	口縁部～頸部	内面ヘラ削り 外面ハケ	金雲母・長石・石英	良	橙 5YR 6/6	
10	土器	坏	7.3・4.1・3.7	口縁部～底部	指頭痕	金雲母・長石・赤色粒子	良	にぶい橙 7.5YR 7/3	
11	土器	蓋	－・－・(3.2)	体部	ロクロ	金雲母	良	内)にぶい橙 7.5YR 7/3 外)にぶい橙 7.5YR 7/4	
12	須恵器	蓋	(13.9)・－・－	口縁部	ロクロ	金雲母・長石	良	灰 10Y 5/1	
13	土器	蓋	(18.0)・－・－	口縁部	ナデか	金雲母・赤色粒子	良	橙 5YR 6/6	
14	土器	蓋	(13.7)・－・－	口縁部	ロクロ	金雲母・赤色粒子	良	にぶい橙 7.5YR 7/4	
15	土器	坏	(14.0)・－・－	口縁部～体部	ナデ	金雲母・赤色粒子	良	にぶい橙 7.5YR 7/4	
16	土器	坏	(11.4)・－・－	口縁部～体部	ロクロ 外面下部削り	赤色粒子	良	にぶい橙 7.5YR 7/4	
17	土器	坏	(10.9)・(3.9)・(5.2)	口縁部～底部	ロクロ 外面下部削り	金雲母・赤色粒子	良	にぶい橙 7.5YR 7/4	
18	土器	坏	(12.0)・－・－	口縁部～体部	ナデ	金雲母・赤色粒子	良	橙 7.5YR 7/6	
19	土器	坏	(12.0)・－・－	口縁部～体部	ロクロ	金雲母・赤色粒子	良	にぶい黄橙 10YR 7/4	

表2　上土器遺跡出土遺物観察表

（　）復元値、単位(cm)

番号	種別 産地	器種	法量(cm) 口径・器高・底径	部位	調整など	胎土	焼成	色調	備考
20	土器	坏	－・－・(7.0)	底部	ロクロ 内面暗文	密	良	にぶい橙 7.5YR 7/4	
21	土器	坏	－・－・(7.2)	底部	ロクロ 内面暗文	長石・石英	良	にぶい橙 7.5YR 7/3	
22	土器	坏	－・－・(5.6)	体部～ 底部	ナデ	金雲母・長石・石英・赤色粒子	良	にぶい橙 7.5YR 6/4	
23	土器	坏	－・－・(7.8)	底部	ナデ	金雲母・赤色粒子	良	明赤褐 10YR 7/6	
24	土器	坏	－・－・(9.0)	底部	ロクロ 内面に暗文	密	良	にぶい橙 7.5YR 7/4	
25	土器	坏	－・－・(6.4)	底部	ロクロ 内面に暗文	密	良	浅黄橙 10YR 8/3	
26	土器	鉢	(21.3)・－・－	口縁部	ロクロ	長石	良	にぶい橙 7.5YR 7/4	
27	陶器	甕か	(30.0)・－・－	口縁部	外面施釉	密	良好	－	
28	土器	甕	－・－・(6.2)	底部	ヘラ削り	金雲母・長石・石英・赤色粒子	良	橙 7.5YR 7/6	
29	土器	壺か甕	－・－・(7.0)	底部	ナデ	金雲母・赤色粒子	良	橙 7.5YR 6/6	
30	土器	壺	(9.0)・－・－	底部	ヘラ削り	金雲母・長石・石英・赤色粒子	良	橙 5YR 6/8	
31	土器	壺か甕	－・－・(10.0)	底部	ヘラ削り	金雲母・長石・赤色粒子	良	橙 5YR 7/6	
32	土器	壺か甕	－・－・(12.2)	底部	内面ナデ 外面ヘラ削り	金雲母・長石・赤色粒子	良	灰白 7.5YR 8/2	
33	土器	壺か甕	－・－・(4.2)	底部	ナデ	金雲母・赤色粒子	良	浅黄橙 7.5YR 8/4	

大坪遺跡



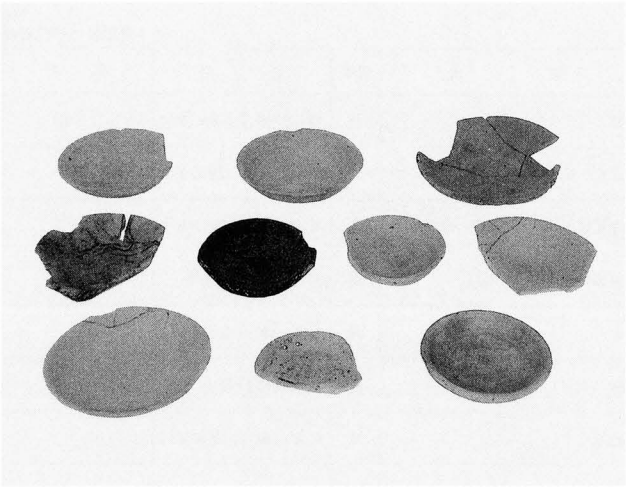
調査位置　甲府市横根町465-2番地他
調査原因者　個人
調査原因　給油所建設工事
調査面積　約132.0m²
調査期間　平成6年3月22日～23日
調査担当者　信藤祐仁

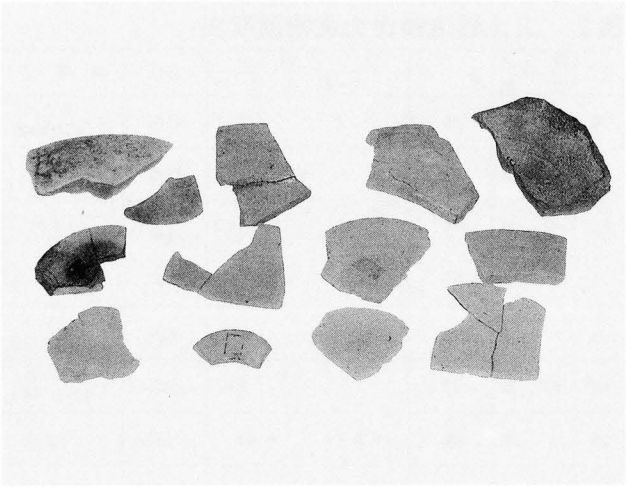
調査の概要

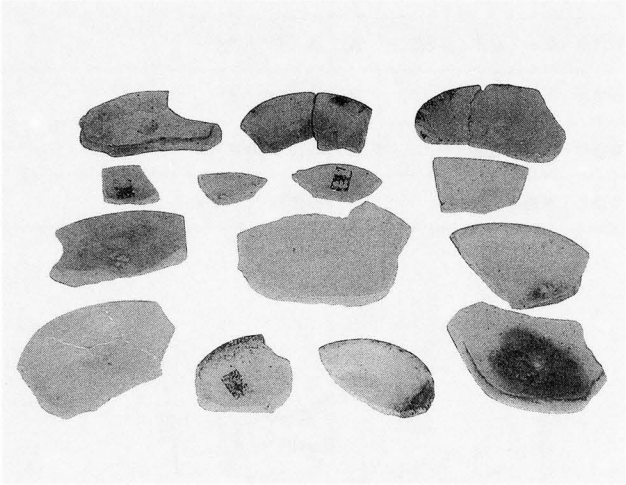
山梨県教育委員会が、昭和50年度に調査した跨線橋建設南地点の西南側に位置する。予定地内に、南北30m×2mのトレンチ2本とその中央に東西方向26m×2mのトレンチをH字状に設定した。ただし、予定地内に東西方向に道路が走っているため、南北トレンチで10m分それぞれ除外した。重機で掘削して、埋蔵文化財の有無と土層の堆積状況を確認した。

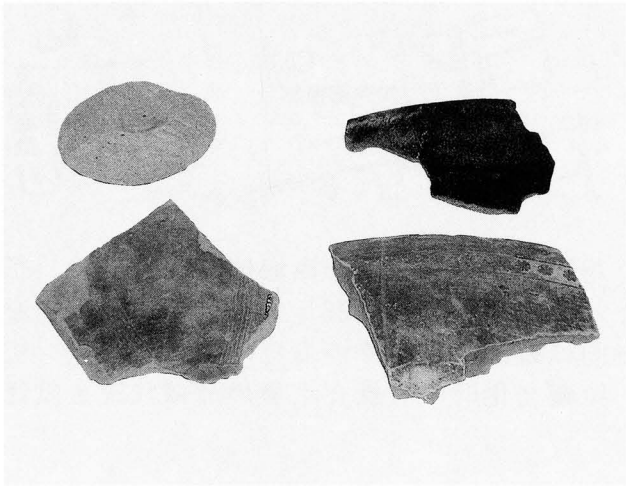
まとめ

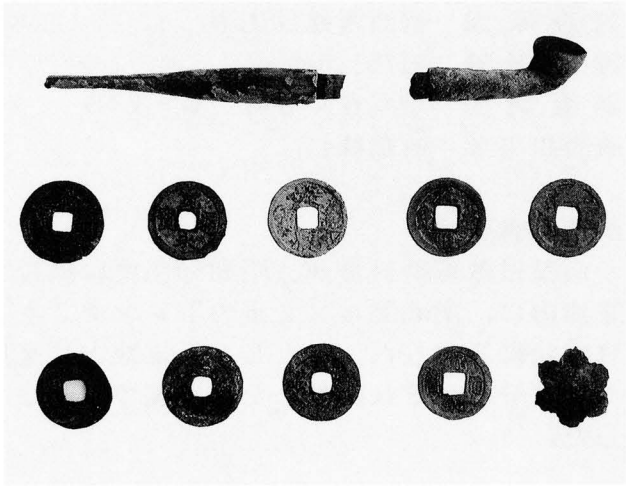
調査区は工事現場の資材置き場であった。深さ1.5mまで掘削したが、すべて以前の攪乱を受けており、遺物・遺構ともに確認できなかった。（信藤祐仁）





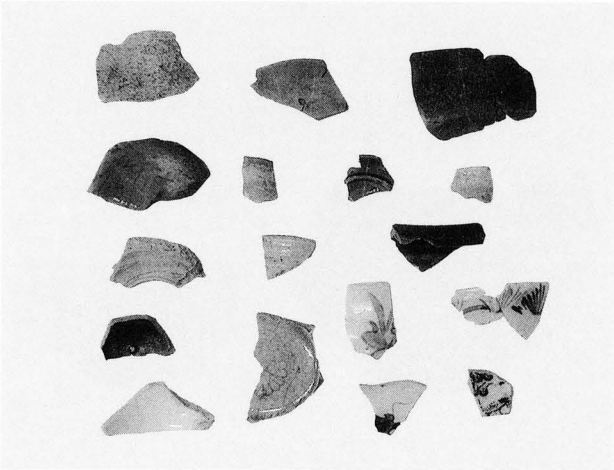




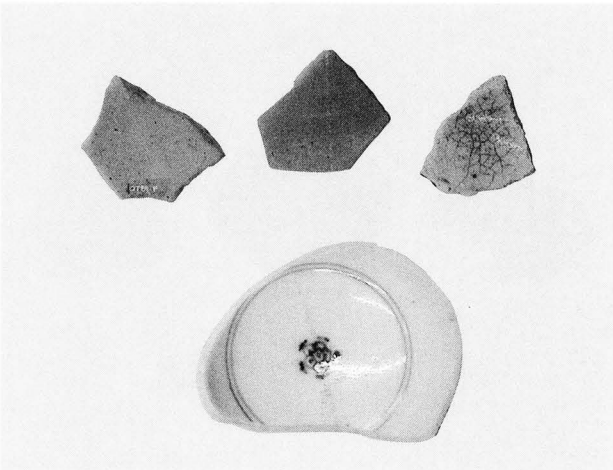


図版１　小瀬氏館跡遺跡出土遺物(1)

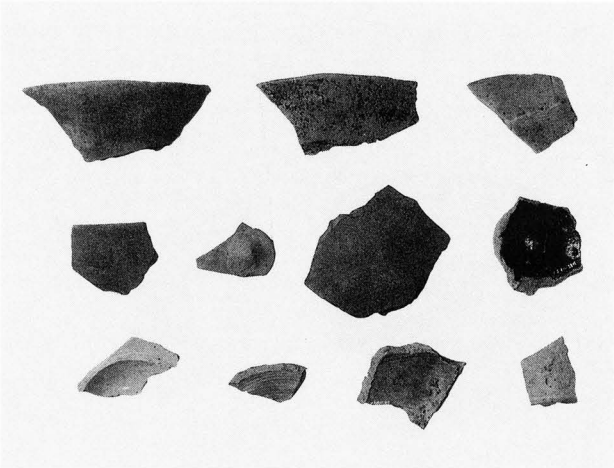
小瀬氏館跡遺跡出土遺物(2)



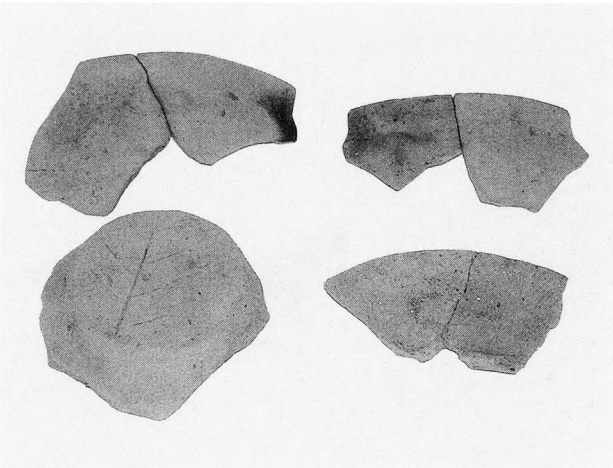
宮ノ脇遺跡出土遺物



工業技術センター予定地出土遺物

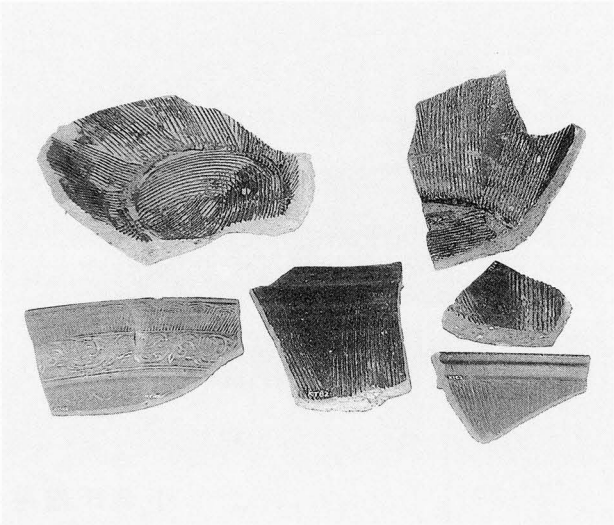


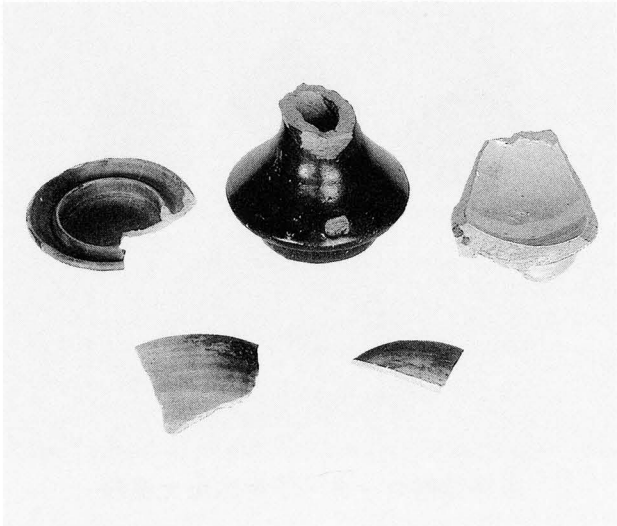
八木沢遺跡出土遺物

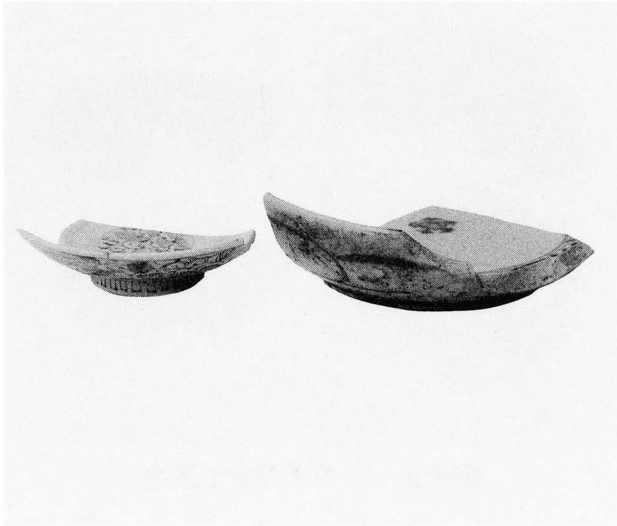


緑が丘一丁目遺跡出土遺物

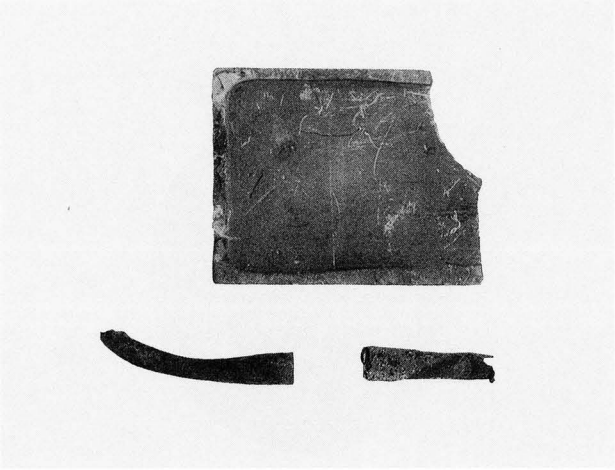
図版2　小瀬氏館跡遺跡・宮ノ脇遺跡・工業技術センター予定地・八木沢遺跡・緑が丘一丁目遺跡出土遺物

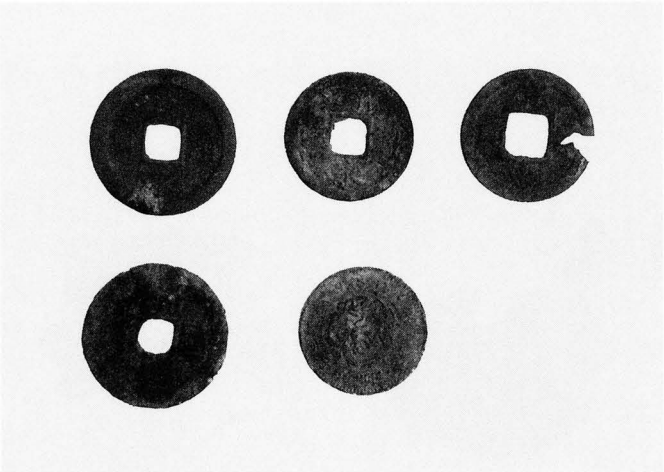




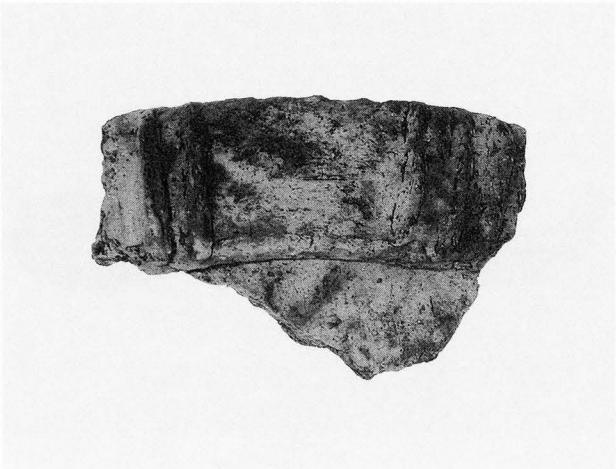


図版３　寿・宝区画整理予定地出土遺物(1)

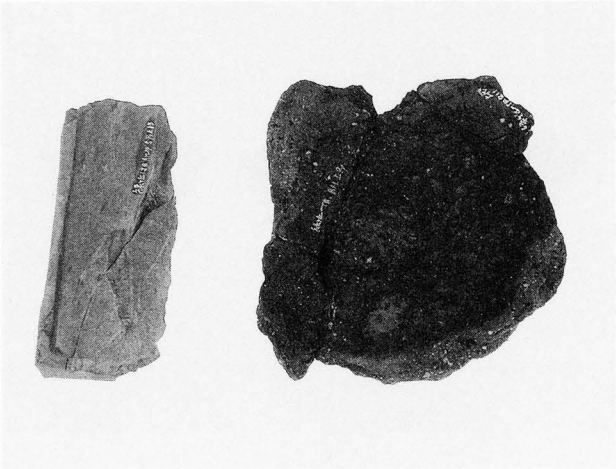




寿・宝区画整理予定地出土遺物(2)

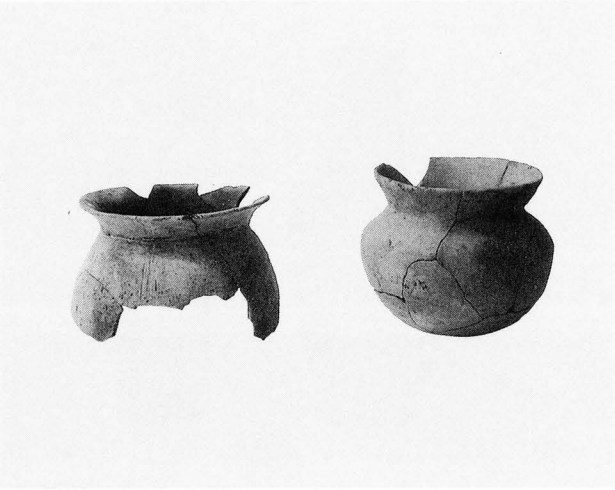


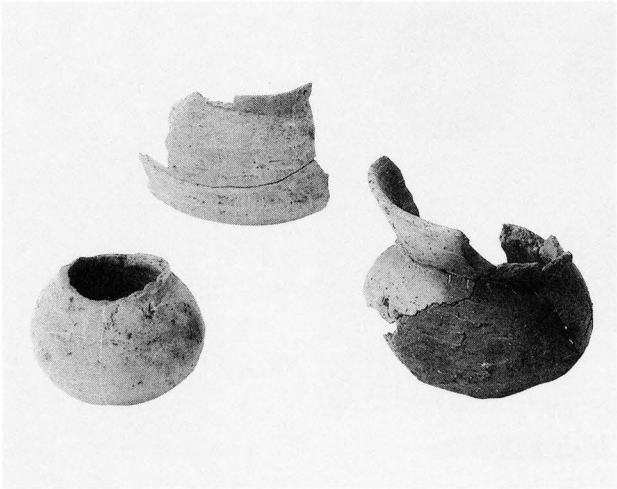
大坪遺跡出土遺物

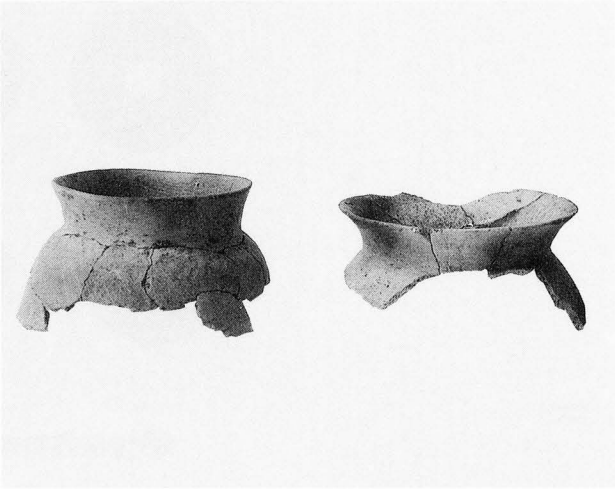


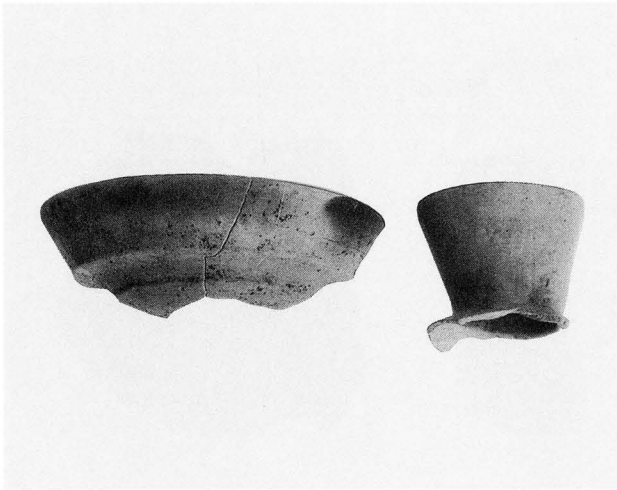
緑が丘一丁目遺跡出土遺物

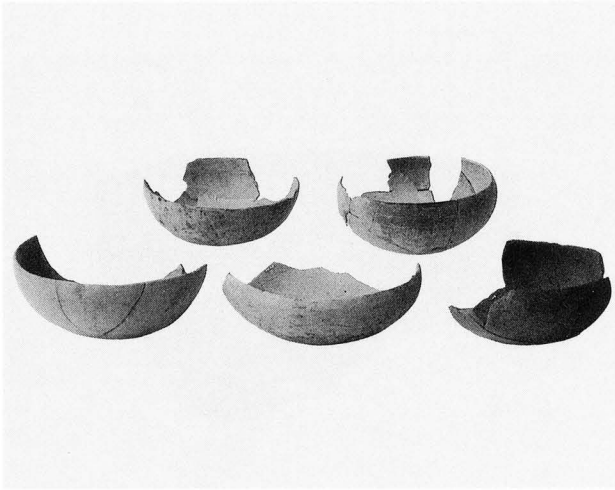
図版4　寿・宝区画整理予定地・大坪遺跡・緑が丘一丁目遺跡出土遺物



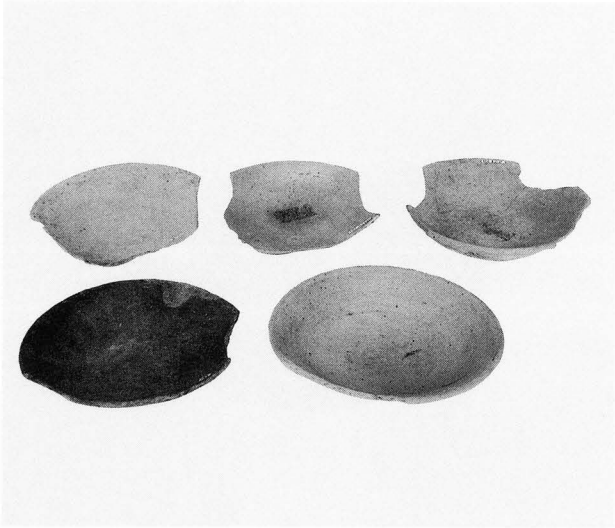


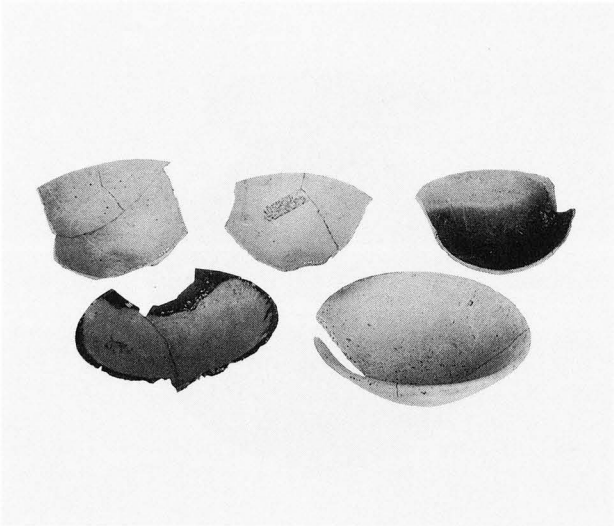




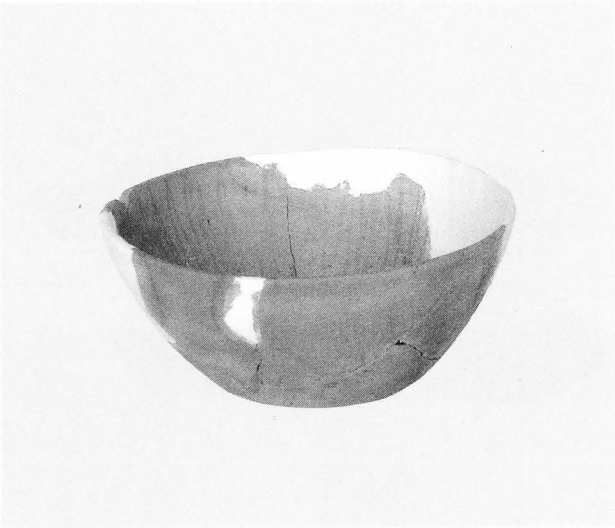


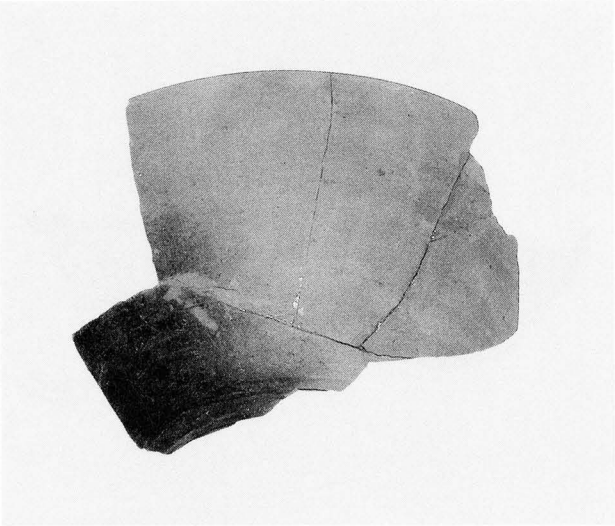
図版５　朝気遺跡（Ⅵ次調査）出土遺物



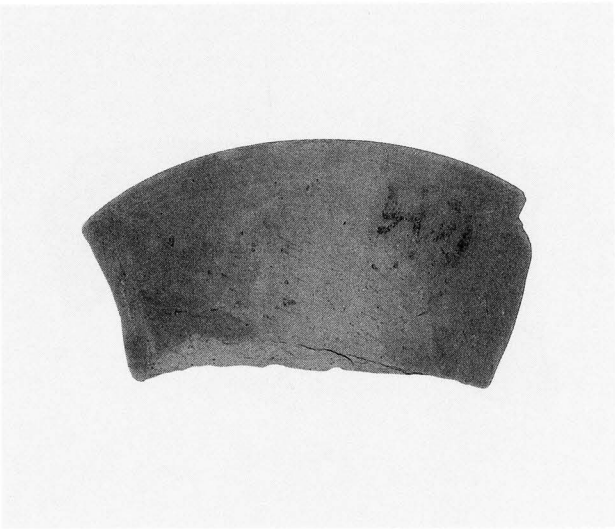


図版６　朝気遺跡出土遺物

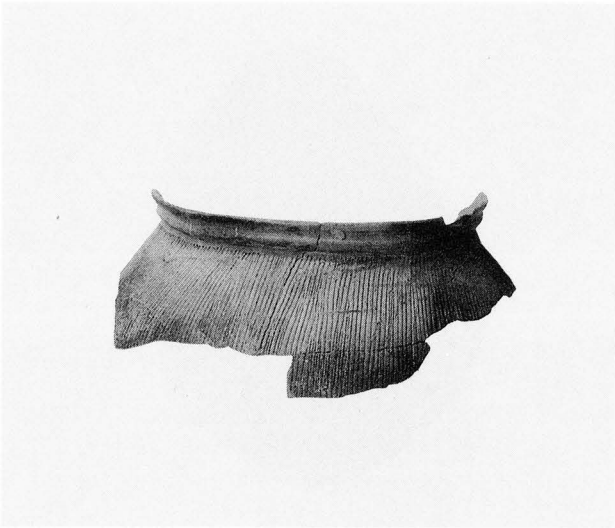


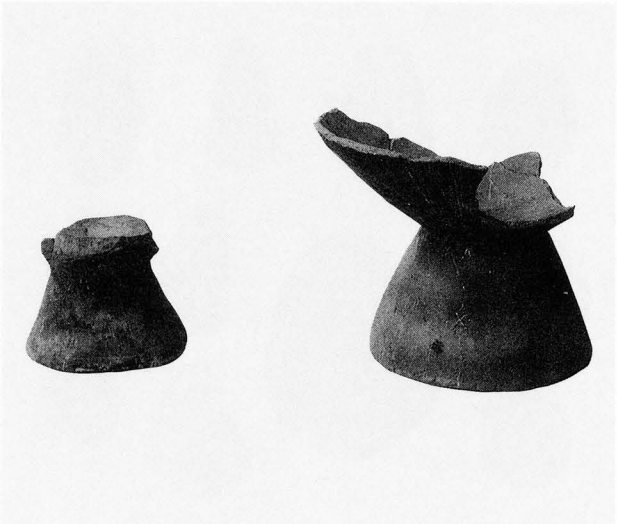


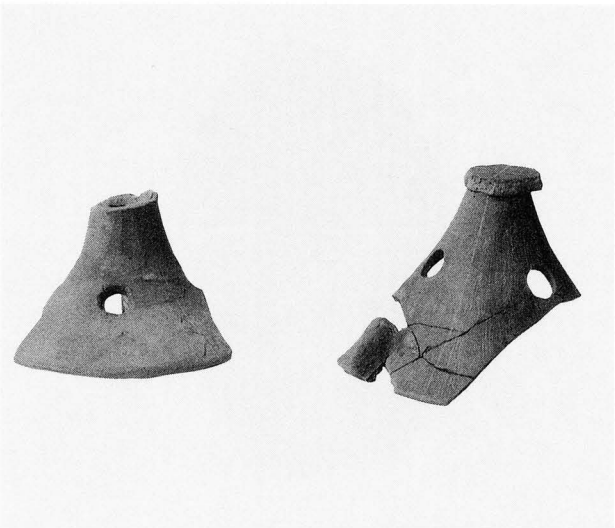
墨書土器

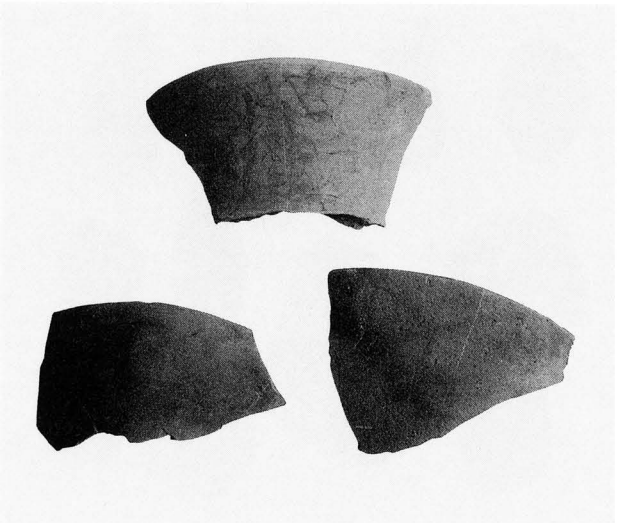


図版７　外河原ヂクヤ遺跡出土遺物

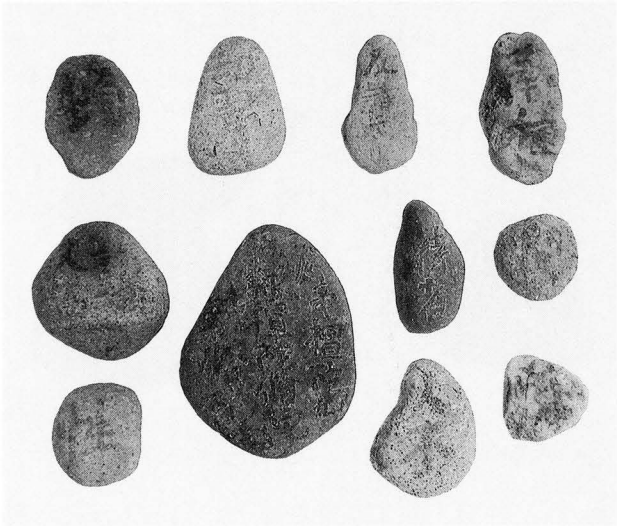


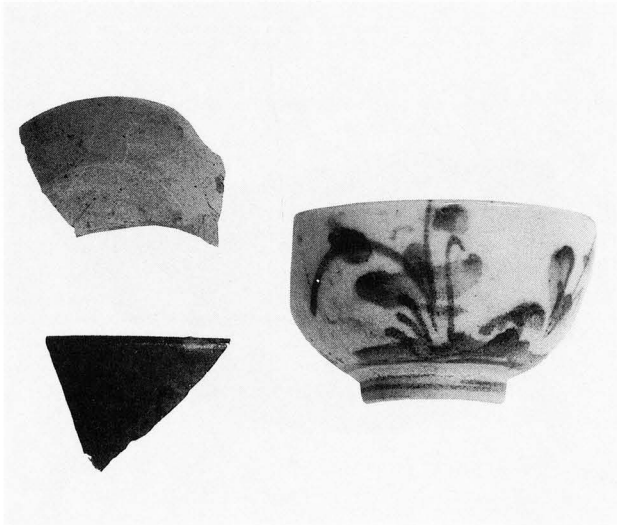






図版８　朝気遺跡（Ⅷ次調査）出土遺物



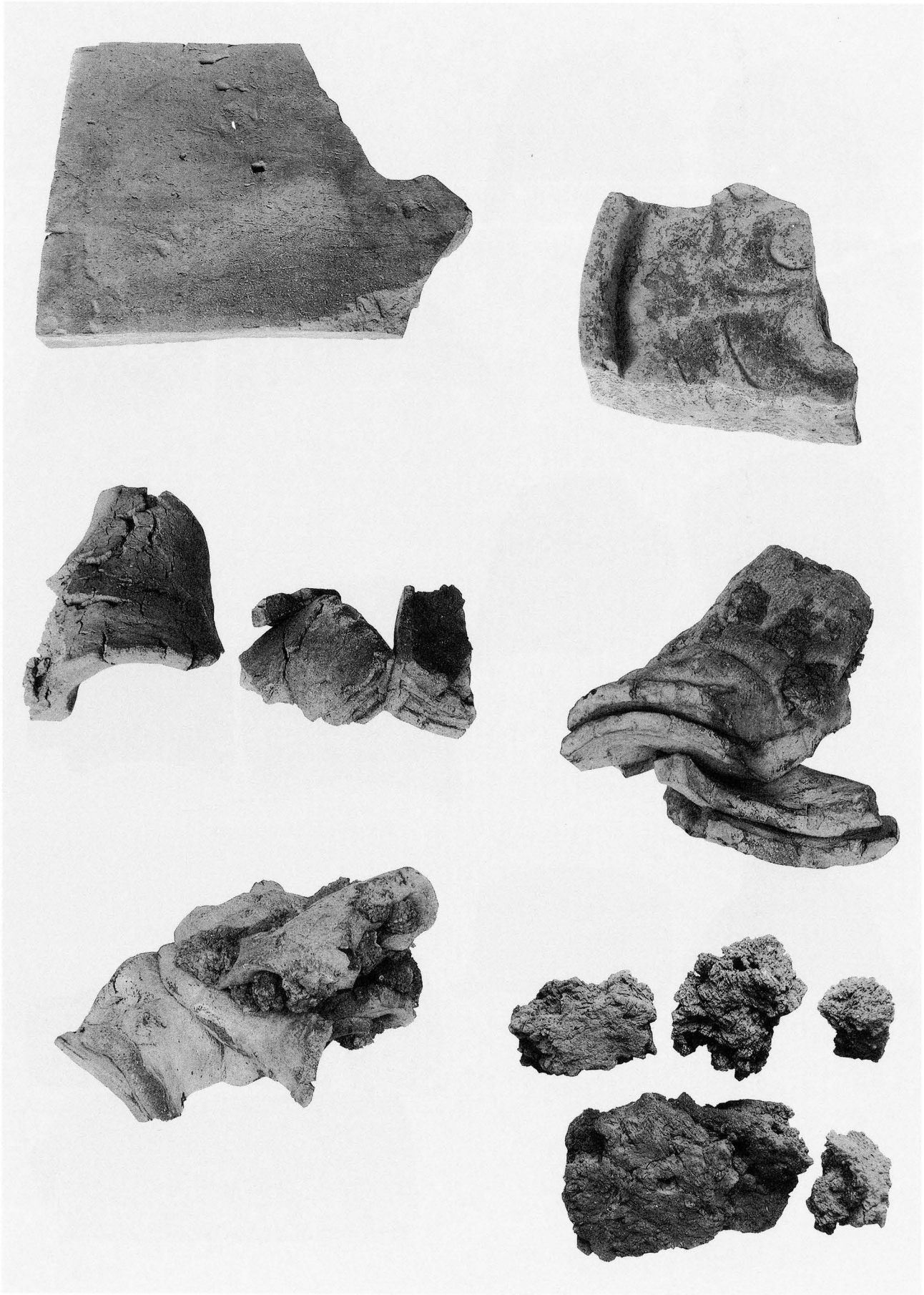


図版９　高源寺経塚出土遺物

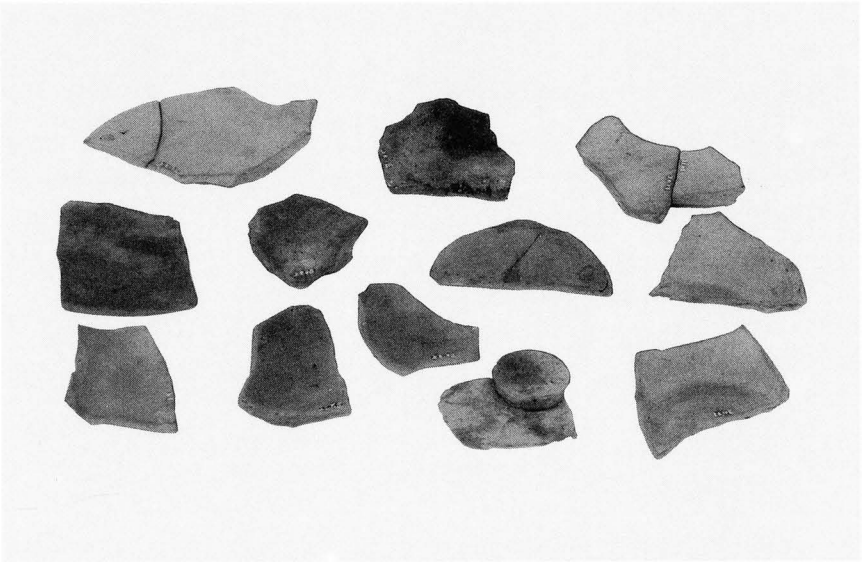
図版10　上土器遺跡出土瓦

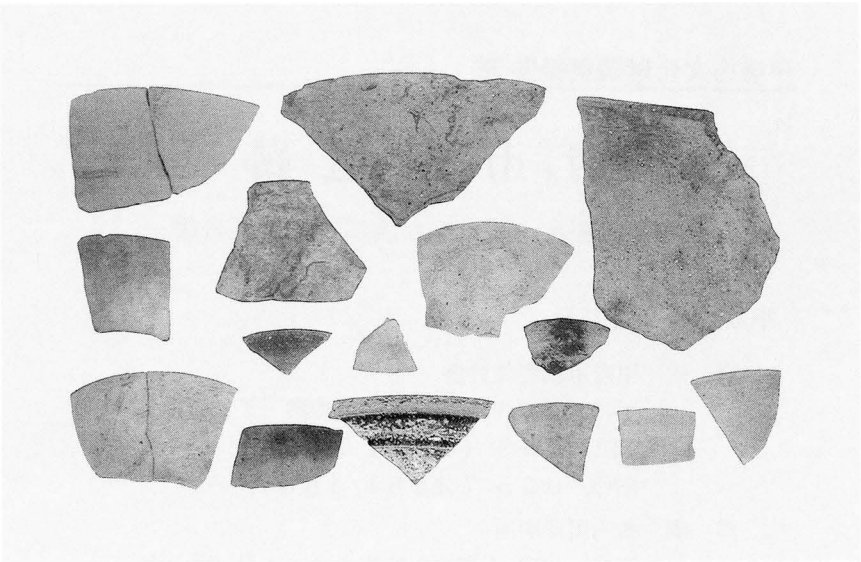
図版11　上土器遺跡出土瓦

図版12　上土器遺跡出土瓦類



図版13　上土器遺跡出土瓦類





図版14　上土器遺跡出土遺物

甲府市文化財調査報告 26

甲府市内遺跡 I

— 昭和61年度～平成５年度試掘調査報告書 —

平成16年３月31日

発　行　甲府市教育委員会
〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番１号
TEL　０５５（２２３）７３２４
FAX　０５５（２２６）４８８９

印　刷　㈱内田印刷所
〒400-0032 山梨県甲府市中央二丁目10番18号